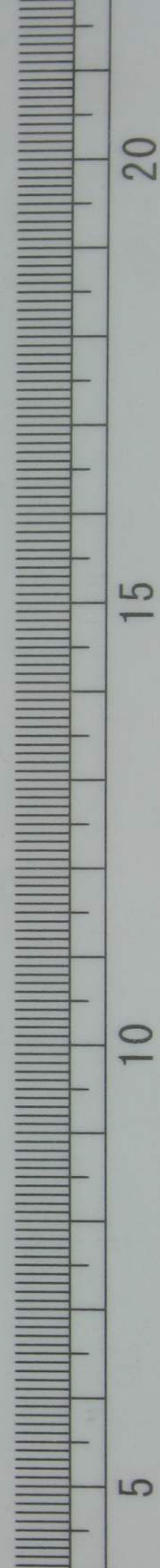


代表名作選集  
秋江篇







別れた妻

秋江

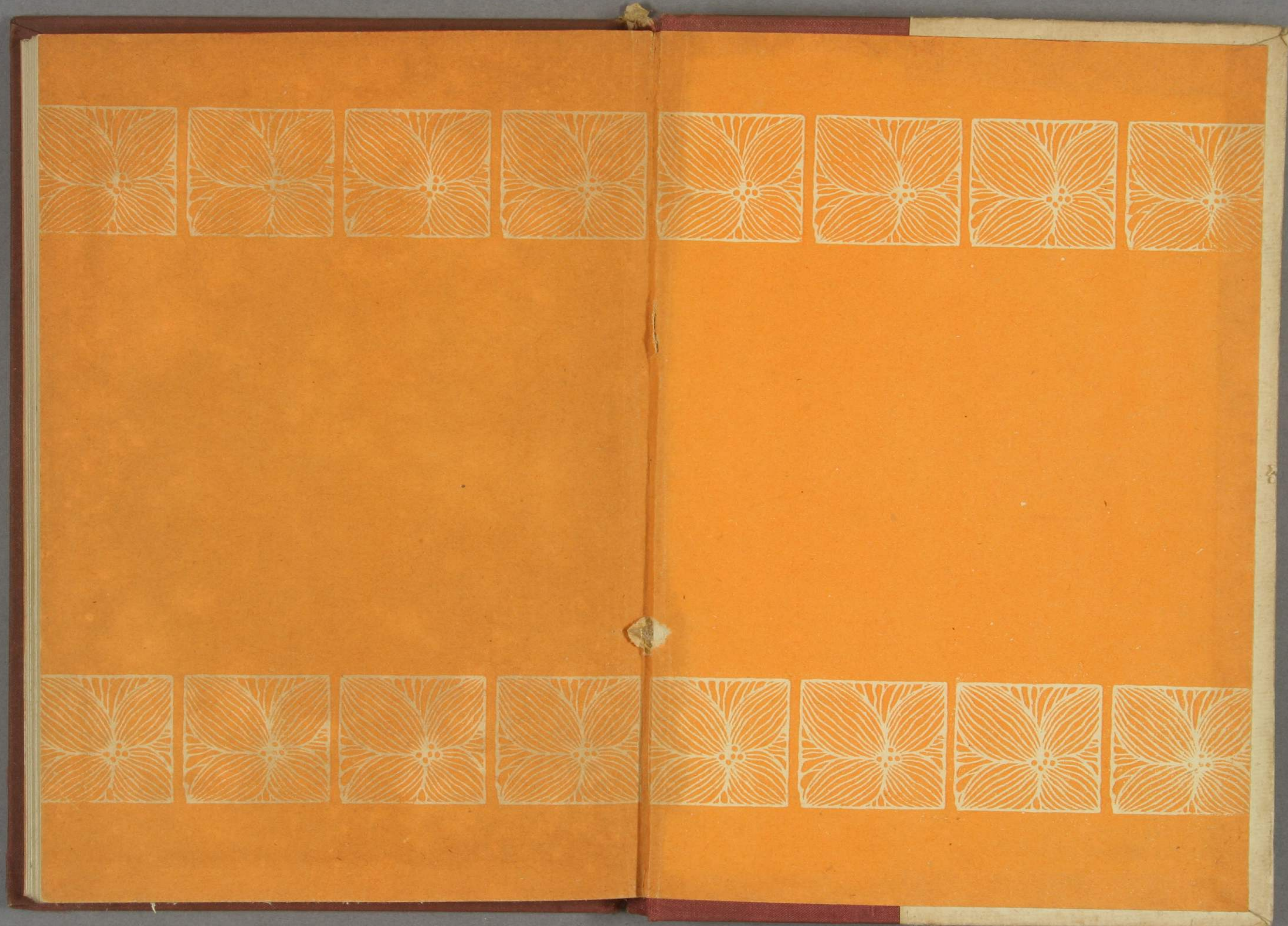


代表的名作選集(五)











別  
れ  
た  
妻

近  
松  
秋  
江  
作

■ 代 表 的 名 作 選 集

(16)

京 東  
社 潮 新  
版 出



## 解題

本篇は『別れたる妻に送る手紙』と題し、明治四十三年に發表したものである。はじめて、小説家としての作者の手腕を保證した作といふ意味に於てその處女作と云ふ可く、飽迄も實感に即して人間の眞を描くと共に、作者獨特の一味の情趣を漂はしたところ、以てヒューマニストにして同時に耽美的傾向の著しきこの作者の作風を代表せるものと見る事が出來よう。殊に、偽らず飾らず、作者が半生の悲痛なる經驗をさながらに描き且つ抒べた點に於て、此の作は、最も權威ある人間ヒューマン、ドキュメントの證券とす可きであらう。我が文壇に於て、最も獨自なる作家の最も獨自なる作品はこれである。

附録として添へた『男清姫』は大正四年春の作、矢張『別れたる妻』と同調のもので、最もよく作者を代表したる一篇である。



別れた妻

近松秋江



拜啓

お前——別れて了つたから、もう私がお前と呼び掛ける権利は無い。そののみよらず、風の音信（なごり）に聞けば、お前はもう疾（こころ）に嫁（よめ）いてゐるらしくもある。もしさうだとすれば、お前はもう返しの附かぬ人の妻だ。その人にこんな手紙を上げるのは、道理（すぢみち）から言つても私が間違つてゐる。けれど、私は、まだお前と呼ばずにはゐられない。どうぞ此の手紙だけではお前と呼ばしてくれ。また斯（こゝろ）様な手紙を送つたと知れたなら大變だ。私はもう何（なに）うでも可（い）いが、お前が、さぞ迷惑するであらうから申すまでもないが、讀んで了つたら、直ぐ焼くなり、何うなりしてくれ。

——お前が、私とは、つひ眼と鼻との間の同じ小石川區内にゐるとは知つてゐるけれど、丁度今頃は何處（どこ）に何うしてゐるやら少しも分らない。けれども私は斯（か）うして其の後のことをお前に知らせたい。いや聞いて貰（もら）ひたい。お前の顔を見なくなつてから、やがて七月（ななつき）になる。その間には、私には、種（いんげん）々なことがあつた。

一緒にゐる時分は、ほんの些（ちよ）としと可笑（わがし）いことでも、悔（く）しいことでも即座（い）に打ちまけて何とか彼（か）とか言つて貰（もら）はねば氣が濟まなかつたものだ。またその頃はお前の知つてゐる通り、別段（べつだん）に變つたことさへなければ、國の母や兄とは、近年ほんの一月（ひとしき）に一度か、二月（ふたつき）に三度ぐらゐしか手紙の往復（やりとり）をしなかつたものだが、去年の秋私一人になつた當座は殆ど二日（ふたつか）置きくらゐに

母と兄とに交（かは）る手紙を遣つた。

けれども今、此處（こゝ）に打明けようと思ふやうなことは、母や兄には話されぬ。誰れにも訴すことが出来ない。唯せめてお前にだけは聞いて貰（もら）ひたい。——私は最後の半歳（はんざい）ほどは正直お前を恨んでゐる。けれどもそれまでの私の仕打（しうち）に就いては随分自分が好（よ）くなかつた。といふことを、十分に自身でも承知してゐる。だから今話すことを聞いてくれたなら、お前の胸も幾許（いくさ）か晴れよう。また私は、お前にそれを心のありつたけ話し盡したならば、私の此の胸も透（す）くだらうと思ふ、さうでもしなければ私は本當に氣でも狂（ふ）れるかも知れない。出来るならば、手紙でなく、お前に直（ぢか）に會つて話したい。けれどもそれは出来ないことだ。それゆゑ斯（か）うして手紙を書いて送る。

お前は大方忘れたらうが、私はよく覚えてゐる。あれは去年の八月の末——二十十日の朝であつた。お前は、

『もう話の着（つ）いてゐるのに、あなたが、さう何時（いつ）までも、のんびんぐらりと、ずる（ず）る（ず）にしてゐては、皆（みんな）に、私が矢張（やっぱ）しあなたに未練があつて、一緒にずる（ず）る（ず）になつてゐるやうに思はれるのが辛い。少しは、あなただつて人の迷惑といふことも考へて下さい。いよく分れて了へば私は明日（あす）の日から自分で食ふことを考へねばならぬ。……それを思へば、あなたは獨身（ひとりみ）になれ



ば、何うしようと、足纏ひがなくなつて結句氣樂ぢやありませんか。さうしてゐる内にあなたはまた好きな奥さんなり、女なりありますよ。兎に角今日中に何處か下宿へ行つて下さい。さうでなければ私が柳町の人達にも言ひやうがないから。』

と言つて催促するから、私は探しに行つた。

二百十日の蒸暑い風が口の中までジャリ／＼するやうに砂塵埃を吹き捲つて夏劣けのした身體は、唯歩くのさへ怠儀であつた。矢來に一處あつたが、私は、主婦を案内に空間を見たけれど、假令何様な暮しをしようとも、これまで六年も七年も下宿屋の飯は食べないで來てゐるのに、これからまた以前の下宿生活に戻るのかと思つたら、私は、其の座敷の、夏季の間に裏返しだらしい疊のモジャ／＼を見て今更に自分の身が淺間しくなつた。それで、

『多分明日から來るかも知れぬから。』

と言つて歸りは歸つたが、どう思つても急に他へは行きたくなかつた。といふのは強ちお前のお母さんの住んでゐる家——お前の傍を去りたくなかつたといふのではない。それよりも斯うしてゐて自然に、心が變つて行く日が來るまでは身體を動かすのが怠儀であつたのだ。加之錢だつて差當り入るだけ無いぢやないか。歸つて來て、

『どうも可い宿はない。』といふと、

『急にさう思ふやうな宿は何うせ見附からない。松林館に行つたら屹度あるかも知れぬ。彼處ならば知つた宿だから可い。今晚一緒に持つて見ませう。』

と言つて、二人で聞きに行つた。けれども其處には何様な室もなかつた。其の途中で歩きながら私は最後に本氣になつて種々と言つて見たけれど、お前は、

『そりや、あの時分はあの時分のことだ。……私は先の時分にも四年も貧乏の苦勞して、またあなたで七年も貧乏の苦勞をした。私も最早貧乏には本當に飽き／＼した。……假令月給の仕事があつたつて私は、文學者は嫌ひ。文學者なんて偉い人は私風情にはもつたない。私もよもやに引かれて、今にあなたが良くなるだらう、今に良くなるだらうと思つてゐても、何時まで経つてもよくなるないのなもの。それにあなたがらゐる猫の眼のやうに心の變る人は無い。一生當てにならない……。』

斯う言つた。そりや私も自分でも、さう偉い人間だとは思つてゐないけれども、お前に斯う言はれて見れば、丁度色の黒い女が、お前は色が黒い。と言つて一口にへこまされたやうな氣がした。屢く以前、

『あなたは何彼に就けて私をへこみます。』と言ひ／＼した。私は『あゝ濟まぬ。』と思ひながらも随分言ひにくいことを屢々言つてお前をこき下した。それを能く覺えてゐる私には、あの時お前



にさう言はれても、何と言ひ返す言葉もなかつた。そのみならず全く私はお前に満六年間  
 『今日は、』

といふ想ひを唯の一日だつてさせなかつた。それゆゑさうなくつてさへ何につけ自信の無い  
 私は、その時から一層自分ほど詰らない人間は無いと思はれた。何を考へても、何を見ても、  
 何をしても白湯を飲むやうな氣持もしなかつた。……けれども、斯様なことを言ふと、お前に何  
 だか愚痴を言ふやうに當る。私は此の手紙でお前に愚痴をいふつもりではなかつた。愚痴は、  
 もう止さう。

兎に角、あの一緒に私の下宿を探しに行つた晩、

『あなたがどうでも家にあれば、今日から私の方で、あなたのゐる間、親類へでも何處へでも  
 行つてゐる。……奉公にでも行く。……好い縁があれば、明日でも嫁かねばならぬ。……同じ  
 歳だつて、女の三十四では今の内早く何うかせねば拾つてくれ手が無くなる。』と言ふから、  
 『ぢや今夜だけは家にゐて明日からいよいよさうしたら好いぢやないか。さうしてくれ。』と私  
 が頼むやうに言ふと、

『さうすると、またあなたが因縁を附けるから……厭だ。』

『だつて今夜だけ好いぢやないか。』

『ぢやあなた、一足前に歸つてゐらつしやい。私柳町に一寸寄つて後から行くから。』

私は言ふがまゝに、獨り自家に戻つて、遅くまで待つてゐたけれど、お前は遂に歸つて來な  
 かつた、あれつきりお前は私の眼から姿を隠して了つたのだ。

それから九月、十月、十一月と、三月の間、繰返さなくつても、後で聞いて知つてもゐるだ  
 らうが、私は、お前のお母さんに御飯を炊いて貰つた。お前も私の癖は好く知つてゐる。お前  
 の洗つてくれた茶碗でなければ、私は立つて、わざ／＼自分で洗ひ直しに行つたものだ。分け  
 てもお前のお母さんと來たら不精で汚らしい、そのお母さんの炊いた御飯を、私は三月——三  
 月といへば百日だ。私は百日の間辛抱して食つてゐた。

お前達の方では、これまでの私の性分を好く知り抜いてゐるから、あゝして置けば遂に堪ら  
 なくなつて出て行くであらう。といふ量見もあつたのだらう。が私はまた、前にも言つたやう  
 に、自然に心が移つて行くまで待たなければ、何うする氣にもなれなかつたのだ。

それは老母の身體で、朝起きて見れば、遠い井から、雨が降らうが何うせうが、水も手桶に  
 一杯は汲んで、ちゃんと縁側に置いてあつた。顔を洗つて座敷に戻れば、机の前に膳も据ゑて  
 くれ、火鉢に火も入れて貰つた。

段々寒くなつてからは、お前がした通りに、朝の燃き落しを安火に入れて、寝てゐる裾から静



と入れてくれた。——私にはお前の居先きは判らぬ。またお母さんに聞いたつて金輪際それを明す譯はないと思つてゐるから、此方からも聞かうともしなかつたけれど、お母さんがお前の處に一すく／＼會ひに行つてゐるくらゐは分つてゐた。それゆゑ安火を入れるのだけは、『あの人は寒がり性だから、朝寝起きに安火を入れてあげておくれ。』とでもお前から言つたのだらうと思つた。

それでも何うも夜も落々眠られないし、朝だつて習慣になつてゐることが、がらりと様子が變つて来たから寢覺めが好くない。以前屢々お前に話し／＼したことだが、朝熱く寢入つてゐて知らぬ間に静と音の立たぬやうに新聞を胸の上に載せて貰つて、その何とも言へない朝らしい新らしい匂ひで、何時とはなく眼の覺めた日ほど心持の好いことはない。まだ幼い時分に、母が目覺しを枕頭に置いてゐて、『これ／＼』と呼び覺してゐたと同じやうな氣がしてゐた。それが最早、まさか新聞まで寢入つてゐる間に持つて来て下さい。とは言はれないし、假令さうして貰つたからとて、お前にして貰つたやうに、甘くしつくりと行かないと思つたから頼みもしなかつた。が、時々其様なことを思つて一つさうして貰つて見ようかなど、寢床の中で考へては、ハツと私は何といふ馬鹿だらうと思つて獨りでに可笑くなつて笑つたこともあつたよ。で、新聞だけは自分で起きて取つて来て、また寢ながら見たが、さうしたのでは唯字が眼に

入るだけで、もう面白くも何ともありやしない。……本當に新聞さへ澤山取つてゐるばかりで碌々讀む氣はしなかつた。

それに、あの不愛相な人のことだから、何一つ私と世間話をしようぢやなし。——尤も新聞も面白くないくらゐだから、そんなら誰れと世間話をしようといふ興も湧かなかつたが——米だつて悪い米だ。私はその朝無闇に早く炊いて、私の起きる頃には、もう可い加減冷めてポロ／＼になつた御飯に茶をかけて流し込むやうにして朝飯を濟ました。——間食をしない私が、何様なに三度の食事を樂みにしてゐたか、お前がよく知つてゐる。さうして獨りでつくねんとして御飯を食てゐるのだと思つて來るとむら／＼と逆上げて來て果ては、膳も茶碗も霞んで了ふ。寢床だつて暫時は起きたまゝで放つて置く。床を疊む元氣もないぢやないか、枕當の汚れたのだつて、私が一々口を聞いて何とかせねばならぬ。

秋になつてから始終雨が降り續いた。あの古い家のことだから二所も三所も雨が漏つて、其處ら中にバケツや盥を並べる。家賃はそれでも、十日ぐらゐ遅れることがあつても拂つたが、幾許直してくれと言つて催促してもなかく職人を寄越さない。寒いから障子を入れようと思へば、どれも破れてゐる。それでも入れようと思つて種々にして見たが、建て附けが悪くなつて何れ一つ満足なのが無い。



私はもう「え、何うなりとなれ！」と、バタリ／＼雨滴の落ちる音を聞きながら、障子もしめない座敷に静として、何を爲ようでもなく、何を考へようでもなく、四時間も五時間も唯然となつて坐つたなり日を暮すことがあつた。

何日であつたか寢床を出て鉢前の處の雨戸を繰ると、あの眞正面に北を受けた縁側に落葉交りの雨が顔をも出されないほど吹付けてゐる。それでも私は寢巻の濡れるのを忘れて、其處に立つたまま凝乎と、向の方を眺めると、雨の中に遠くに久世山の高臺が見える。そこらには何時までも忘れることの出来ぬ處だ。それから左の方に銀杏の樹が高く見える。それがつひ四五日氣の附かなかつた間に黄色い葉が見違へるばかりにまばらに瘦せてゐる。私達はその下にも住んでゐたことがあつたのだ。

そんなことを思つては、私は方々、目的もなく歩き廻つた。天氣が好ければよくつて戸外に出るし、雨が降れば降つて家内にちつとしてゐられないで出て歩いた。破れた傘を翳して出歩いた。

さうしてお前と一緒に借りてゐた家は、古いのから古いのから見て廻つた。けれども何の家の前に立つて見たつて、皆な知らぬ人が住んでゐる。中には取拂はれて、以前の跡形もない家もあつた。

でも九月中ぐらゐは、若しかお前のゐる氣配はせぬかと雨が降つてゐれば、傘で姿が隠せるから、雨の降る日を待つて、柳町の家の前を行つたり來たりして見た。

家内にゐる時は、もう書籍なんか讀む氣にはなれない。大抵猫と遊んでゐた。あの猫が面白い猫で、あれと追駈ツこをして見たり、樹に逐ひ登らして、それを竿でつゝいたり、弱つた秋蟬を捕つてやつたり、ほうせん花の實つて弾けるのを自分でも面白くつて、むしつて見たり、それを打つてて吃驚させて見たり、そんなことばかりしてゐた。處がその猫も、一度二日も續いて土砂降りをした前の晩、些との間に何處へ行つたか、ゐなくなつて了つた。お母さんと二人で種探して見たが遂に分らなかつた。

そんな寂しい思ひをしてゐるからつて、これが他の事と違つて他人に話の出来ることぢやなし、また誰れにも話したくなかつた。唯獨りの心に閉ぢ籠つて思ひ耽つてゐた。けれどもあの矢來の婆さんの家へは始終行つてゐた。後には「また想ひ遣りですか……あなたが、あんまりお雪さんを虐めたから……またあなたもみつちりお働きなさい。さうしたらお雪さんが、此度は向から頭を下げて謝つて來るから……」など、言つて笑ひながら話すこともあつたが、あの婆は、丁度お前のお母さんと違つて口の上手な人でもあるし、また若い時から随分種々な目にも會つてゐる女だから、



「本當にお雪さんの氣の強いにも呆れる。……私だつて、あゝして四十年連れ添うた老爺さまと別れは別れたが、あゝ今頃は何うしてゐるだらうかと思つて時々呼び寄せては、私が状袋を張つたお錢で好きな酒の一口も飲まして、小遣ひを遣つて歸すんです。……私には到底お雪さんの眞似は出来ない。……思ひ切りの好い女だ。それを思ふと雪岡さん、私はあなたがお氣の毒になりますよ……」

と言つて、襦袢の袖口で眼を拭いてくれるから、私のことゝ婆さんのことゝは理由が全然違つてゐるとは知つてゐながら、

「ナニお雪の奴、そんな人間であるもんですか。……それに最早、何うも嫁いてゐるらしい。屹度それに違ひない。」と言ふと、婆さんは思はせ振りに笑ひながら、

「へ……奴なんて、まあ大層お雪さんが憎いと思はれますね。まさか其様なことはないでせう……私には分らないが……お雪さんだつて、あれであなたの事は色々と思つてゐるんですよ……あの自家の押入れに預かつてある茶碗なんか御覽なさいな。壊れないやうに丹念に一つ一つ紙で包んで仕舞つてある。矢張しまたあなたと所帯を持つ下心があるからだ。……あんなに細かいことまでしやんくよく氣の利く人はありませんよ。」と、斯う言ひくした。

私は、私とお前との間は、私とお前とが誰れよりもよく知つてゐると知つてゐたから婆さん

がそんなことを言つたつて決して本當にはしやしない。随分度々、お前には引越の手数を掛けたものだが、その度毎に、茶碗だつて何だつて鄭寧に始末をしたのは、私も知つてゐる——尤も後になつては、段々お前も、『もう茶碗なんか、鄭寧に包まない。』と言ひ出した。それも私はよく知つてゐる。また其れが、いよく別れねばならぬことになつて、一層鄭寧に、私の所帯道具の始末をしてくれたのも知つてゐる。

それでゐて、私は柳町の人達よりも一層深い事情を知らぬ婆さんが、さう言つてくれるのを自分でも氣安めだ。と承知しながら、聞いてゐるのが何よりも樂みであつた。私は寄席にでも行くやうなつもりで、何か買つて懐中に入れては婆さんの六十年の人情の節を附けた調子で「お雪さんだつて、あれであなたのことは思つてゐるんですよ。」を聞きに行つた。

さうしながら心は種々に迷うた。何うせ他へ行かねばならぬのだから家を持たうかと思つて探しにも行つた。出歩きながら眼に着く貸家には入つても見た。が、婆さんを置くにしても、小女を置くにしても私の性分として矢張し自分の心を使はねばならぬ。それに敷金なんかは出来やうがない。少し纏まつた錢の取れる書き物なんかする氣には何うしてもなれない。それなら何うしようといふのではないが、唯何にでも魂魄が奪られ易くなつてゐるから、道を歩きながら、フト眼に留つた見知らぬ女があると、浮々と何處までも其の後を追うても見た。



長く男一人でゐれば、女性も欲しくなるから、矢張り遊びにも行つた。さうかと言つて錢が無  
いだから、好くつて面白い處には行けない。それゆゑ錢の入らない珍らしい處をくゞと漁つ  
て歩いた。ならうならば、何もしたくないのだから、家賃とか米代とか、お母さんに酷しく言  
はれるものは、據なく書き物をして五圓、八圓取つて来たが、其様な處へ遊びに行く錢は『あ  
あ行きたい。』と思へば段々段々と大切にしていゐる書籍を凝乎と、披いて見たり、捻つて見たり  
して、『あゝこれを賣らうか遊びに行かうか。』と思案をし盡して、最後にはさて何うしても賣つ  
て遊びに行つた。矢來の婆さんの處にも度々古本屋を連れ込んだ。さうすれば、でも二三日は  
少しは心が落着いた。

その時分のことだらう。居先きは明さないが、一度お前が後始末の用ながらに婆さんの處へ  
寄つて、私の本箱を明けて見たり、抽斗を引出して見たりして、

『まあ本當に本も大方賣つて了つてゐる。あの人は何日まで、あゝなんだらう。』と言つて、それ  
から私の夜具を戸棚から取出して、襦袢を拂つて、縁側の日の當る處に乾して、婆さんに晩に取  
入れてくれるやうに頼んで行つたことをも聞いた。

まあさういふやうにして、ちよびく書籍を賣つては、錢を拵へて遊びにも行つた。けれど  
も、それでも矢張り物足りなくつて、私の足は一處にとまらなかつた。唯女を買つたゞけでは

氣の済む譯がないのだ。私には一人樂みが出来なければ寂しいのも間切れない。

處がさうしてゐる内に、遂々一人の女に出會した。

それが何ういふ種類の女であるか、商賣人ではあるが、藝者ではない。といへばお前には判  
斷出来よう。一口に藝者でないと言つたつて——笑つては可けない。——さう馬鹿には出来ない  
よ。遊びやうによつては随分錢も掛かる。加之女だつて銘々性格があるから、藝者だから面白  
いのばかりとは限らない。

その時は、多少纏まつた錢が骨折れずに入つた時であつたから、何時もちよびく本を賣つ  
ては可笑な處ばかりを彷徨いてゐたが、今日は少し氣樂な贅澤が爲て見たくなつて、一度長  
田の友達といふので行つた待合に行つて、その時知つた女を呼んだ。さうするとそれがゐなく  
つて、他な女が来た。それが初め入つて来て挨拶をした時にちらと見たのでは、それほどゝも  
思はなかつたが、別の間に入つてからよく見ると些と男好きのする女だ。——お前が知つてゐ  
る通り私はよく斯様なことに氣が着いて困るんだが、——脱いだ着物を、一寸觸つて見ると、  
着物も、羽織も、ゴリ／＼するやうな好いお召の新らしいのを着てゐる。此の社會のことには  
私も大抵目が利いてゐるから、それを見て直ぐ『此女は、なか／＼賣れる女だな。』と思つた。  
よく似合つた極くハイカラな束髪に結つて小肥な、色の白い、肌理の細かい、それでゐて血氣



のある女で、——これは段々後になつて分つたことだが、——気分もよく變つたが、顔が始終變る女だつた。——心持ち平面の、鼻が少し低い私の好きな口の小さい——尤も笑ふと少し崩れるが、——眼も平常はさう好くなかつた。でもさう馬鹿に濃くなくつて、柔か味のある眉毛の恰好から額にかけて、何處か氣高いやうな處があつて、泣くか何うかして憂ひに沈んだ時に一寸々品の好い顔をして見せた。そんな時には顔が小さく見えて、眼もしをらしい眼になつた。後には種々なことから自暴酒を飲んだらしかつたが、酒を飲むと溜らない大きな顔になつて、三ツ四ツも古けて見えた。私も『どうして此様な女が、さう好いのだらう?』と少し自分でも不思議になつて、終には淺間しく思ふことさへもあつた。肉體も、厚味のある、幅の狭い、さう大きくなくつて、私とはつりあひが取れてゐた。

で、その女をよく見ると、『あゝ斯ういふ女がゐるか。』と思つた。それが、その女が私の氣に染み附いたそもくだつた。さうすると、私の心は最早今までと違つて何となく、自然に優あしくなつた。

静と女の指——その指がまた可愛い指であつた、指輪も好いのをはめてゐた——を握つたり、もんだりしながら、

『君は大變綺麗な手をしてゐるねえ。さうして斯う見た處、こんな社會に身を落すやうな人柄

でもなさうだ。それには何れ種んな理由もあるのだらうが出来ることなら、少しも早く此様な商賣は止して堅氣になつた方が好いよ。君は何となしまだ此の社會の灰汁が骨まで浸込んでゐないやうだ。惜しいものだ。』

人間といふものは勝手なものだ。此様な境涯に身を置く人に同情があるならば、私は何の女に向つても、同じことを言ふ理由だが、私は其の女にだけそれを言つた。さう言ふと、女は指を私に任せながら、黙つて聞いてゐた。

『名は何といふの?』

『宮』

『それが本當の名?』

『えゝ本當は下田しまといふんですけれど、此處では宮と言つてゐるんです。』

『宮とは可愛い名だねえ。……お宮さん。』

『えッ』

『私はお前が氣に入つたよ。』

『さうオ……あなたは何をなさる方?』

『さあ何をする人間のやうに思はれるかね。言ひ當て、御覽。』



さういふと、女は、しほくした眼で、まじく私の顔を見ながら、

『さう……學生ぢやなし、商人ぢやなし、會社員ぢやなし……判りませんわ。』

『さう……判らないだらう。まあ何かする人だらう。』

『でも氣になるわ。』

『さう氣にしくつても心配ない。これでも悪いことをする人間ぢやないから。』

『さうぢやないけれど……本當言つて御覽なさい。』

『これでも學者を見たやうなものだ。』

『學者！ 何學者？……私、學者は好き。』

本當に學者が好きらしう聞くから、

『さうか。お宮さん學者が好きか。此の土地にや、お客の好みに叶ふやうに、頭だけ束髪の外見だけのハイカラが多いんだが、お宮さんは、ぢや何處か學校にでも行つてゐたことでもあるの？』

學生とか、ハイカラ女を好む客などに對しては、その客の氣風を察した上で、女學生上りを看板にするのが多い。——それも商賣をしてゐれば無理の無いことだ。——その女も果して女學校に行つて居つたか、何うかは遂には分らなかつたが所謂學者が好きといふことは、後になる

に従つて本當になつて來た。

斯う言つて先方の意に投ずるやうに聞くと、

『本郷の××女學校に二年まで行つてゐましたけれど、都合があつて廢したんです。』と言ふから、ぢや何うして斯様な處に來てゐる……と訊いたら、斯うしてお母さんを養なつてゐると言ふ。お母さんは何處にゐるんだ？ と聞くと、下谷にゐて、他家の間を借りて、裁縫をしてゐるんです。と言ふ。

私は、全然直ぐそれを本當とは思はなかつたけれど、女の口に乗つて、紙屋治兵衛の小春の「私一人を頼みの母様。南邊の賃仕事して裏家住み……」といふ文句を思ひ起して、お宮の母親のことを本當と思ひたかつた。——否、或は本當と思込んだのかも知れぬ。

お前が斯様なことをしてお母さんを養はなくつてもほかに養ふ人はないのか？ と訊くと、姉が一人あるんですけれど、それは深川のある會社に勤める人に嫁いてゐて先方に人數が多いから、お母さんは私が養はなければならぬ、としをらしく言ふ。

『さうか。……ぢや宮といふ名は、小説で名高い名だが、宮ちゃん君は小説のお宮を知つてゐるかね？』

『え、あの貫一のお宮でせう？ 知つてゐます。』







すると、お宮は、眼を瞑つた顔を口元だけ微笑みながら、  
 『そんな他人の性格なんか直ぐ分るもんですか。』甘えるやうに言つた。私は性格といふ言葉を使つたのに、また少し興を催して、  
 『性格!……性格なんて、君は面白い言葉を知つてゐるねえ。』と世辭を言つた。——兎に角漢語をよく用ひる女だつた。

さうして私は、唯柔かい可愛らしい精神になつて、蒲團を疊む手傳ひまでしてやつた。  
 他の室に戻つてから、

『また来るよ。君の家は何といふ家?』

『家は澤村といへば分ります。……あゝ、それから電話もあります。電話は浪花のね三四の十二でせう。それに五つ多くなつて、三十七、三十八番と覚えてゐれば好いんです。』と立ちながら言つて疲れて、颯颯の邊を蒼くして歸つて行つた。

私は、何だか俄かに枯木に芽が吹いて來たやうな心持がし出して、——忘れもせぬ十一月の七日の雨のバラ／＼と降つてゐた晩であつたが、私も一足後から其家を出て番傘を下げながら——不思議なものだ、その時ふと傘の破れてゐるのが、氣になつたよ。種々な屋臺店の幾個も並んでゐる人形町の通りに出た。濕とりとした小春らしい夜であつたが、私は自然にふい／＼口淨

瑠璃を唸りたいやうな氣になつて、すしを摘まうか、やきとりにしようか、と考へながら頭で、れんを分けて露店の前に立つた。

その錢が入つたら——例の函根から酷しくも言つて來るし、自分でも是非そのままにしてゐる荷物を取つて來たり、勘定の仕残りだのして二三日遊んで來ようと思つてゐたのだが、私はもう函根に行くのは厭になつた。で、種々考へて見て函根へは爲替で錢を送ることにして、明日の晩早くからまた行つた。さうして此度は泊つた。——斯様いふ處へ來て泊るなんといふことは、お前がよく知つてゐる、私には殆ど無いと言つて可い。

續けて行つたものだから、お宮は、入つて來て私と見ると、『さては……』とでも思つたか『いらつしやい。』と離れた處で尋常に挨拶をして、此度上げた顔を見ると嬉しさを、キユツと紅を潮した唇で小さく食ひ締めて、誰れが來てゐるのか、といつたやうな風に空とぼけて、眼を遠くの壁に遣りながら、少し、顎を斜にして、黙つてゐた。その顔は今に忘れることが出來ない。好い色に白い、意地の強さうな顔であつた。二十歳頃の女の意地の強さうな顔だから、私には唯美しいと見えた。

私は可笑くなつて此方も暫く黙つてゐた。けれども、私はそんなにして黙つてゐるのが嫌ひだから、



『そんな風をしないでもつと此方において。』と言つた。  
待つてゐる間、机の上に置いてあつた硯箱を明けて、巻紙に徒ら書きをしてゐた處であつたから机の向に來ると、

『宮ちゃん、之れに字を書いて御覽。』

『え、書きます。何を？』

『何とでも可いから。』

『何かあなたさう言つて下さい。』

『私が言はないつたつて、君が考へて何か書いたら可いだらう。』

『でもあなた言つて下さい。』

『ぢや宮とでも何とでも。』

『……私書けない。』

『書けないことはなからう、書いてごらん。』

『あなた神経質ねえ。私そんな神経質の人嫌ひ！』

『……………』

『分つてゐるから、……あなたのお考へは。あなた私に字を書かして見て何うするつもりか、

ちやんと分つてゐるわ。ですから 後で手紙を上げますよ。あゝ私あなたに濟まないをしたの。名刺を貰つたのを、つひ無くして了つた。けれど住所はちやんと憶えてゐます。……××區××町××番地雪岡京太郎といふんでせう。』

斯様なことを言つた。私に字を書かして見て何うするつもりかあなたの心は分つてゐます。なんて自惚も強い女だつた。

その晩、待合の湯に入つた。『お前、前入つておいで。』と言つて置いて可い加減な時分に後から行つた。……

尙ほ他の室に行つてから、

『宮ちゃん、お前斯ういふ處へ來る前に何處か嫁いてゐたことでもあるの？』  
と、具合よく聞いて見た。

『え、一度行つてゐたところがあるの。』と問ひに應ずるやうに返事をした。

日毎、夜毎に種々な男に會ふ女と知りながら、また何れ前世のあることゝは察してゐながら、私は自分で勝手に尋ねて置いて、それに就いてした返事を聞いて少し嫉ましくなつて來た。

『何ういふ人の處へ行つてゐたの？』

『大學生の處へ行つてゐたの。……卒業前の法科大學生の處へ行つてゐたんです。』



私は腹の中で、『へッ！ 甘いことを言つてゐる。成程本郷の女學校に行つてゐた。といふから、もしさうだとすれば、何うせ野合者だ。さうでなければ生計しかねて、母子相談での内職か。』と思つたが、何處かさう思はせない品の高い處もある。

『へえ。大學生！ 大學生とは好い人の處へ行つてゐたものだねえ。どういふやうな理由から、それがまた斯様な處へ来るやうになつたの？』

『行つて見たら他に細君があつたの。』

『他に細君があつた！ それはまた非道い處へ行つたものだねえ。欺されたの？』大學生には、なかく女たらしがある。また女の方で随分たらしられもするから、私は、或は本當かとも思つた。

『え。』と問ふやうに返事をした。

『だつて、公然、仲に立つて世話でもする人はなかつたの？ お母さんが附いて居ながら、大

事な娘の身で、そんな、もう細君のある男の處へ行くなんて。』

『そりや、その時は口を聞く人はあつたの。ですけれど此方がお母さんと二人きりだつたから甘く皆に欺されたの。』

私は、女が口から出任せに嘘八百を言つてゐると思ひながら、聞いてゐれば、聞いてゐるほど、段々先方の言ふことが眞實のやうにも思はれて來た。さうして憐れな女、母子の爲に、話し

の大學生が憎いやうな、また羨ましいやうな氣がした。

『ひどい大學生だねえ。お母さんが——さぞ腹を立てたらう。』

『そりや怒りましたさ。』

『無理もない、ねえ。……が一體如何な人間だつた？ 本當の名を言つて御覽。』

女は枕に顔を伏せながら、それには答へず、『はあ……』と、さも術なさうな深い太息をして、『だから私、男はもう厭！』傍を構はず思ひ入つたやうに言つた。『私もその人は好きであつたし、その人も私が好きであつたんですけれど、細君があるから、何うすることも出来ないの。……温順しい、それは親切な人なんですけれど、男といふものは、あゝ見えても皆な道樂をするものですかねえ。……下宿屋の娘か何かと夫婦になつて、それにもう兒があるんですもの。』

『フム。……ぢや別れる時には二人とも泣いたらう。』

『え、そりや泣いたわ。』女は悲しい甘い涙を憶ひ起したやうな少し浮いた聲を出した。

『自分でも私はお前の方が好いんだけど、一時の無分別から、もう兒まで出來てゐるから、何うすることも出来ない。と言つて男泣きに泣いて、私の手を取つて散々あやまるんですもの。』

——その女の方で何處までも附いてゐて離れないんでせう——私の方だつて、ですから怒らうたつて怒られやしない。氣の毒で可哀さうになつたわ。——でも細君があると知れてから、随分



「押おめて苛いぢめてやった。」

人を傍そばに置いてゐて、さう言つて獨りて忘れられない、楽しい追憶おもひをに耽おぼつてゐるやうであつた。私は静ぢつと聞いてゐて、馬鹿にされてゐるやうな氣がしたが、自分もその大學生のやうに想はれて、さうして苛いぢめられるだけ、苛いぢめられて見みたくなつた。

その男は高等官になつて、名古屋に行つてゐると言つた。江馬と言つて段々遠慮がなくなるにつれて、何につけ「江馬さんく」と言つてゐた。

そののみならず、大學生に馴染なじみがあるとか、あつたとかいふのが此の女の誇で、後になつても屢よくく「角帽姿はまた好いんだもの。」と口に水の溜たまりまるやうな調子で言ひくした。

すると、お宮は暫時して、フツと顔を此方に向けて、

「あなた、本當ほんとうに奥様おくさんは無ないの？」

「あゝ。」

「本當ほんとうに無ないの？」

「本當ほんとうに無ないんだよ。」

「男といふものは眞個ほんごに可笑わかしいよ。細君があれば、あると言つて了つたら好きさうなものに此方で、「あなた、奥様があつて？」と聞くと、大抵の人があつても無ないといふよ。」

「ぢや私も有つても無ないと言つてゐるやうに思はれるかい？」

「何うだか分らない。」人の顔を探るやうに見て言つた。

「僕、本當ほんとうはねえ。あつたんだけど、今は無ないの。」

「さうら……本當ほんとうに？」女はにや／＼笑ひながら、油斷なく私の顔を見成つた。

「本當ほんとうだとも。有つたんだけど、別れたのさ。……薄情はくじやうに別わかられたのさ。……一人で氣樂きらくだよ。……同情どうじやうしてくれ玉たまへ！衣類えいりだつて、あれ、あの通り綻ほびだらけぢやないか。」

「それで今、その女ひとは何なにうしてゐるの？」お宮の瞳ひとみが冴さえて、兩頰ほほに少し熱あつを潮しほして來た。

「さあ、別れたツきり。自家うちにゐるか何なにうしてゐるか。行先ゆきなんか知らないさ。」

「本當ほんとうに？……何時いつ別わかれたんです？……ちゃんと分るやうに仰おんしやい！法學者ほつがくしやの處ところにゐたら、曖昧あいまいな事を言ふと、直ただぐ弱點じやくてんを抑おさへるから。……何なにうして別わかれたんです？」氣味惡きゐごさうに聞いた。

「種々しゆしゆ一緒にいっしょにゐられない理由わけがあつて別わかれたんだが、最早もつと半歳はんさいも前の事ことさ。」

「へツ、今だつてあなたその女ひとに會あつてゐるんでせう。」探たづぐるやうに疑うたがつて言つた。

「馬鹿ばかな。別わかれた細君ほそくんに何處どこに會あふ奴やつがあるものかね。」

「さう……でも其の女おんなのことは矢張やじやうし思おもつてゐるでせう。」



『そりや、何年か連添うた女房だもの。少しは思ひもするさ。斯うしてゐても忘れられないこともある。けれども最早いくら思つたつて仕様がなないぢやないか。宮ちゃんの、その人のことだつて同じことだ。』

『……私。あなたの家とこに遊びに行くわ。』

本當に遊びに来て貰ひたかつた。けれども今來られては都合が悪い。

『あゝ、遊びにお出で。……けれども今は一寸家の都合が悪いから、その内私家を變らうと思つてゐるから、さうしたら是非來ておくれ。』

私は、その時初めて、お前のお母さんの家を出ようといふ氣が起つた。自然に心の移る日を待つてゐたらお宮を遊びに來さす爲には早く他へ行きたくもなつた。

さう言ふと、お宮はまた少し烏散さうに、

『都合が悪い!……へッ、矢張しあるんだ。』と微笑んだ。

『ある處かね。あれば仕合せなんだが。』

『ぢや遊びに行く。』

『……………』

『奥様がなくなつて、ぢやあなた何様な處とこなにゐるの?』

『年取つた婆さんに御飯を炊いて貰つて二人でゐるんだから面白くもないぢやないか。宮ちゃんに遊びに来て貰ひたいのは山々だけれど、その婆さんは私が細君と別れた時分のことから、知つてゐるんだから、少しは私も年寄りの手前を慎まなければならぬのに、幾許半歳經つと言つたつて、宮ちゃんのやうな綺麗な若い女に訪ねて來られると、一寸具合が悪いからねえ。屹度變るから變つたらお出で。』

すると、『宮ちゃんく。』と、女中の低聲がして、階段の方で急いそがしさうに呼んでゐる。

二人は少しはつとなつた。

『何うしたんだらう?』

『何うしたんだらう?……』二三秒して、『えッ?』と女中に聞えるやうに言つた。『一寸行つて見て來る。』

お宮は、そのまま出て行つた。

四五分間して戻つて來た。『此の頃、警察がやかましいんですつて。戸外そとに變な者が、ウロ／＼してゐるやうだから何時遣つて來るかも知れないから、若し來たら階下から「宮ちゃんく。』とツて聲をかけるから、さうしたら脱衣だてを抱へて直ぐ降りてお出でつて。……ちやんと隠れる處が出来てゐるの。……今燈いまひを點ともして見せて貰つたら、ずうつと奥の方の物置室ものおきの座板ざいたの下に疊







ことをする。丁度そのイーをしたやうな心持のする險しい顔を一寸して、

『此間櫻木に行つたら、「此の頃屢くいらつしやいます。泊つたりしていらつしやいます。」……お宮といふのを呼んだと言つてゐた。……僕は泊つたりすることは無いが、……お宮といふのは、何様な女か、僕は知らないが、……』

その言葉が、私の胸には自分が泊らないのに、何うして泊つた？自分がまだ知らない女を何うして呼んだ？と言つてゐるやうに響いた。私は苦笑しながら黙つてゐた。長田は言葉を續けて、『此間社に来て、昨夜耽溺をして来た。と言つてゐたと聞いたから、はあ此奴は屹度櫻木に行つたなと思つたから、直ぐ行つて聞いて見てやつた。』笑ひながら嘲弄するやうに言つた。

私は、返事の仕様が無いやうな氣がして、

『うむ……お宮といふんだが、君は知らないのか……』と下手に出た。

他の女ならば何でも無いが、此のお宮とのことだけは誰れにも知られなくなかつた。尤も平常から聞いて知つてゐる長田の遊び振りでは或は夙にお宮といふ女のあることは知つてゐるんだが、長田のことゝてついで何でもなく通り過ぎて了つたのかとも思つてゐた。——初めてお宮に會つた時にもう其様なことが胸に浮んでゐた。それが今、長田の言ふのを聞けば、長田は知つてゐなかつた。知つてゐなかつたとすれば尙ほのこと、知られなくなかつたのだが、既う斯う

突き止められた上に、悪戯で岡妬きの強い人間と来てゐるから、此の形勢では早晩何とか爲すにはゐまい。もしさうされたつて『賣り物、買ひ物』それを差止める權利は毛頭無い。また多寡があゝいふ商賣の女を長田と張合つたとあつては、自分でも野暮臭くつて厭だ。もし他人に聞かれてもすると一層外聞が悪い。此處は一つ觀念の眼を瞑つて、長田の心で、ならうやうにやらして置くより他はないと思つた。

が、さうは思つたものゝ、自分の今の場合、折角探してた寶をむざ／＼他人に遊ばれるのは身を斬られるやうに痛い。と言つて、『後生だ。何うもしないで置いてくれ。』と口に出して頼まれもしないし、頼めば、長田のことだから、一層悪く出て悪戯をしながら、黙つてゐるくらいのことだ。と、

私はお宮ゆゑに種々心を碎きながら、自家に戻つた。此の心をお宮に知らず術はないかと思つた。

取留めもなく、唯自家で沈み込んでゐた時分には、何うかして心の間切れるやうに好きな女でも見附かつたならば、意氣も揚るであらう。さうしたら自然に読み書きをする氣にもなるだらう。読み書きをするのが、何うでも自分の職業とあれば、それを勉強せねば身が立たぬ、と思つてゐた。すると女は兎も角も見附かつた。けれども見附かると同時に、此度はまた新らしい不



安心が湧いて来た。しばらく寂しく沈んでゐた心が一方に向つて強く動き出したと思つたら、それが楽しいながらも苦しくなつて来た。

女からは初めて、心を惹くやうな、悲しんで訴へるやうな、氣取つた手紙を寄越した。私の心は何も彼も忘れて了つて、唯其方の方に迷うてゐた。

錢がなければ女の顔を見ることが出来ない。が、その錢を拵へる心の努力は決して容易ではなかつた。——辛抱して錢を拵へる間が待たれなかつたのだ。

さうする内に函根から荷物が届いた。長く彼方にゐるつもりであつたから、その中には、私に取つて何よりも大切な書籍もあつた。之ばかりは何様なことがあつても賣るまいと思つてゐたが、お宮の顔を見る爲に、それも賣つて惜しくないやうになつた。

厭味のない紺青の、サンタヤナのライフ・オブ・リーゾンは五冊揃つてゐた。此の夏それを丸善から買つて抱へて歸る時には、電車の中でも紙包を抜いて見た。オリブ表紙のサイモンズの伊太利紀行の三冊は、十幾年來憶れてゐて、それも此の春漸く手に入つたものであつた。座右に放さなかつたアミールの日記と、サイモンズの譯したベンペニユトオ・チェリニーの自叙傳とは西洋に誂へて取つたものであつた。アーサー・シモンスの「七藝術論」サンド・ブープの「名士と賢婦の畫像」などもあつた。

私は其等をきちんと前に並べて、獨り熟々と見惚れてゐた。さうしてゐると、その中に哲人文士の精神が籠つてゐて、何とか言つてゐるやうにも思はれる。或はまた今まで其等が私に嘘を吐いてゐたやうにも思はれる。

私がそんな書籍を買つてゐる間、お前はお勝手口で、三十日に借金取の斷りばかりしてゐた。私もまさかそんな書籍を買つて来て、書箱の中に並べ立て、それを静と眺めてさへゐれば、それでお前が、私に言つて責めるやうに、『今に良くなるだらう。』と安心してゐるほどの分らず屋ではなかつたが、けれども唯お前と差向つてばかりゐたのでは何を目的に生きてゐるのか、といふやうな氣がして、心が寂しい。けれどもさうして書箱に、そんな種々な書籍があつて、それを時々出して見てゐれば、其處に生き効もあれば、また目的もあるやうに思へた。私だとても米代を拂ふ胸算もなしに、書籍を買ふのでもないが、でもそれを讀んで、何か書いてゐれば、『今に良くなるのだらう。』くらゐには思はないこともなかつた。

これはお宮の髮容姿と、その厭味のない、知識らしい氣高い「ライフ・オブ・リーゾン」やアミールの日記など、比べて見て始めて氣の附いたことでもない。

いや、お前に『私もよもやに引かされて、今にあなたが良くなるだらう。今に良くなるだらうと思つてゐても、何時まで経つてもよくなるもの。』と口に出して言はれる以前か、



自分にも分つてゐた。「良くなる」といふのは、何が良くなるのだらう？ 私には「良くなる。」といふことが、よく分つてゐるやうで、考へて見れば見るほど分らなくなつて来た。

私は一度は手を振上げて其の本に「何だ、馬鹿野郎！」と、拳固を入れた。けれども果して書籍に入れたのやら、それとも私自身に入れたのやら、分らなくなつた。

私は、ハツとなつて、振返つて、四邊を見廻した。けれども幸ひ誰もゐなかつた。固より誰れもゐやう筈はない。

身體は自家にゐながら、魂魄は宙に迷うてゐた。お宮を遊びに来さす爲には家を變りたいと思つたが、お前のこと、過去のことを思へば、無慘と、此所を餘所へ行く事も出来ない。お母さんの顔には日の經つごとに「何時までもゐるつもりだ。さっ／＼と出て行け！」といふ色が、一日々々と濃く讀めた。またそれを口に出して言ひもした。私も無理はないと知つてゐた。さうでなくてさへ況して年を取つた親心には、可愛い生の娘に長い間、苦勞をさした男は、譯もなく唯、仇敵よりも憎い。お母さんで見れば、私と別れたからと言つて、そんならお前を何うしようといふのではない。唯暫時でも傍へ置いときさへすれば好い。それが仇敵がさうしてゐる爲に、娘を傍に置くことが出来ないばかりではない。自分で仇敵に朝晩の世話までしてやらなければならぬ。老母に取つては、それほど逆さまなことはない。

けれども、私の腹では、假令お前はゐなくつても、此家に斯うしてゐれば、まだ何處か縁が繋がつてゐるやうにも思はれる。出て了へば、此度こそ最早それきりの縁だ。それゆゑイザとなつては、思ひ切つて出ることも出来ない。さうしてゐて、たゞ一寸逃れにお宮の處に行つてゐたかつた。

四度目であつたか——火影の暗い座敷に、獨り机によつてゐたら、引入れられるやうに自分のこと、お前のこと、またお宮のことが思はれて、堪へられなくなつた。お宮には、錢さへあれば直ぐにも逢へる。逢つてゐる間は他の事は何も彼も忘れてゐる。私は何うしようかと思つて、立上つた。立上つて考へてゐると、もうそのまゝ坐るのも怠儀になる。私は少し遅れてから出掛けた。

櫻木に行くと、女中が例の通り愛想よく出迎へたが、上ると、氣の毒さうな顔をして、

「先刻、澤村から、電話でねえ。あなたがいらつしやるといふ電話でしたけれど、他の者の知らない間に主婦さんが、もう一昨日から斷られないお客様にお約束を受けてゐて、つい今、お酉さまに連れられて行つたから、今晚は遅くなりませうツて。あなたがいらしつたら、一寸電話口まで出て戴きたいツて、さう言つて來てゐるんですが。……」

私は、さうかと言つて電話に出たが、固より「えゝゝ」と言ふより仕方がなかつた。



女中は、商賣柄、『まことにお氣の毒さまねえ。今晚だけ他な女をお遊びになつては如何です。他にまだ好いのもありますよ。』と言つてくれたが、私はお宮を見附けてから、もう他の女は拙ち向いて見る氣にもならなかつた。

まだ浅い馴染とはいひながら、それまでは行く度に機會好く思ふやうに呼べたが、逢ひたいと思ふ女が、さうして他の客に連れられてお西さまに行つた。と聞いては、固より有りうちのことゝ承知してゐながらも、流石に好い氣持はしなかつた。さういふ女を思ふ自分の心を哀れと思つた。

『いや！ また來ませう。』と其家を出て、そのまゝ戻つたが、私は女中達に心を見透かされたやうで、獨りて恥かしかつた。さぞ悄然として見えたことであらう。

戸外は寒い風が、道路に、時々軽い砂塵埃を捲いてゐた。その晩は分けて電車の音も冴えて響いた。ましてお西さまと、女中などの言ふのを聞けば、何となく冬も急がれる心地がする。

『あゝ詰らない〜。斯うして、浮々としてゐて、自分の行末は何うなるといふのであらう？』と、そんなことを取留めもなく考へ込んで、もつとて電車の乗換へ場を行き過ぎる處であつた。心柄とはいひながら、夜風に吹き曝されて、私は眼頭に涙を潤ませて歸つた。

それでも少しは、何かせねばならぬこともあつて、二三日間を置いてまた行つた。私は電車

に乗つてゐる間が毎時も待遠しかつた。さういふ時には時間の經つのを忘れてゐるやうに面白い雑誌か何か持つて乗つた。

その時は三四時間も待たされた。——此間の晩もあるのに、あんまり來やうが遅いから、來たら些と口説を言つてやらう。それでも最う來るだらうから、一つ寢入つた風をしてゐてやれ。と夜着の襟に顔を隠して自分から寢た氣になつても見る。するとそれも、ものゝ十分間とは我慢しきれないで、またしても顔を出して何度見直したか知れない雑誌を繰抜いて見たり、好きもせぬ煙草を無闇に吹かしたり、獨りで焦れたり、嬉しがつたり、浮かれたりしてゐた。

火鉢の佐倉炭が、段々眞赤に圓くなつて、冬の夜ながらも、室の中は濕とりとしてゐる。煙草の烟で上の方はぼんやりと淡青くなつて、黒の勝つた新しい模様の子禪メリンスの小さい幕を被せた電燈が朧ろに霞んで見える。

階中では女中の聲も更けた。もう大分前に表の木戸を降したらしい。時々低く電話を鳴してお宮を催促してゐるやうであつた。

やがてすうつと襖が開いて、衣擦れの音がして、枕頭の火鉢の傍に黙つて坐つた。私は獨り探られるやうな氣持になつて凝乎と堪へて蒲團を被つたまゝでゐた。

女は矢張り黙つて軽い太息を洩らしてゐる。



私は遂々負けて襟から顔を出した。

女は雲のやうな束髪をしてゐる、何時か西洋の演劇雑誌で見たことのある、西洋の女優のやうな頭髪をしてゐる。と思つて私は仰けに寝ながら顔だけ少し横にして、凝乎と微笑ひく、女の姿態に見惚れてゐた。

壁鼠とでもいふのか、くすんだ地に薄く茶糸で七寶繋ぎを織り出した例のお召の羽織に矢張り之れもお召の沈んだ小豆色の派手な午緋の薄綿を着てゐた。

深夜の、臙に霞んだ電燈の微光の下に、私は、それを、何も彼も美しいと見た。

女は、矢張り黙つてゐる。

『おい！ どうしたの？』私は矢張り負けて静かに斯う口を切つた。

『どうも遅くなつて済みませんでした。』優しく口を利いて、軽く嬌態をした。

さう言つたまゝ、後は復た黙あつて此度は一層強い太息を洩らしながら、それまでは火鉢の縁に翳してゐた両手を懐中に入れて、傍の一貫張りの机にぐったりと身を凭せかけた。さうして右の掌だけ半分ほど胸の處から覗して、襦袢の襟を抑へた。その指に指輪が光つてゐた。崩れた膝の間から派手な長襦袢が溢れてゐる。

女と逢ひそめてから、これでまだ四度にしかならぬ。それが、其様な惱んだ風情を見せられ

るのが初めてなので、それをも、私は嬉しく美しいと自分も黙あつて飽す眺めてゐた。

けれども遂々辛抱しきれないで、復た

『どうしたの？』と重ねて柔しく問うた。すると、女は、

『はあッ』と絶え入るやうに更に強い太息を吐いて片袖に顔を隠して机の上に俯伏して了つた。

束髪は袖に緩く亂れた。

私は哀れに嬉しく心元なくなつて來た。

戸外を更けた新内の流しが通つて行つた。

『おい！ 本當に何うかしたの？』私は三度問うた。

すると尙ほ暫時経つて、女は、

『ほうッ』と、一つ深あい呼吸をして、疲れたやうにそうツと顔を上げて、此度はさも思ひ餘つたやうに胸元をがっくりと落して、頸を肩の上に投げたまゝ味氣なささうに、目的もなく疊の方を見詰めて居た。矢張り両手を懐中にして。

私は何處までも凝乎とそれを見てゐた。

平常はあまり眼に立たぬほどの切れの浅い二重瞼が少し逆上となつて赤く際だつてしをれて見えた。睫毛が長く眸を霞めてゐる。



『何うしたい?』四度目には氣軽く訊ねた。『散々私を待たして置いて来る早々沈んで了つて。何が其様な氣の採めることがあるの? 好い情人でも何うかしたの?』

『遅くなつたつて私が故意に遅くしたのぢやないし。ですから、済みませんでした。と謝つてゐるぢやありませんか。早く来ないと言つたつて、方々都合が好いやうに行きやしない。……はあッ、私もう此様な商賣するのが厭になつた。……』うるさうに言つた。

それまでは、機會に依つては、何處かつんと思ひ揚つて、取澄ましてゐるかと思へば、また甚く慎やかで、愛相もさう悪くはなかつたが、今夜は餘程思ひ餘つたことがあるらしく、心が惱めば悩むほど、放埒な感情がびりびりと苛立つて、人を人臭いとも思はぬやうな、自暴自棄な氣性を見せて來た。

その時私はますく、『こりや好い女を見附けた。此の先きどうか自分の持物にして、モデルにもしたい。』と腹で考へた。さう思ふと尙ほ女が愛しくなつて、一層聲を和げて賺すやうに、『……何を言つてる? 君が早く来ないと言つてそれを何とも言つてやしないぢやないか。見玉へ! 斯うして温順しく書籍を讀んで待つてゐたぢやないか。……戶外はさぞ寒かつたらう。さッ、入つてお寢!』

『本當に済みませんでしたねえ、随分待つたでせう。』此方に顔を見せて微笑んだ。

『さあ〜そんなことは何うでも好いわ。……』けれどもそれは女の耳に入らぬやうであつた。

『はあッ……私、困つたことが出來たの。』聲も絶え〜に言つた。『困つた。……何うしよう? ……言つて了ふか。』と一寸小首を傾けたが、『言はうかなあ……言はないで置かうかッ。』と一つ舌打ちをして、『言つたら、さぞあなたが愛相を盡かすだらうなあ!』と獨りて思案にくれて、とつおいつしてゐる。私は、やゝ心元なくなつて來た。

『何うしたの? ……私が愛相を盡かすやうなことツて。何か知らぬが、差問へなければ言つて見たら好いぢやないか。』私はその時些と胸に浮んだので、『はあ! ぢや分つた! 私知つた人でも遊びに來たの?』と續けて訊いた。

『否む!』と頭振を掉つた。私も幾許何でもまさか其様なことは無いであらうと思つてゐたが、あんまり心配さうに言ふので、もし其様なことでもあるのかと思つたがさうでなくつて、先づそれは安心した。

『ぢや何だね? 待たして焦らしてさ! 尙ほその上に唯困つたことがある。困つたことがある。……と言つてゐたのでは私も斯うしてゐれば氣に掛かるぢやないか。役に立つやうだつたら、私も一緒に心配しようぢやないか。……何様なこと?』

『はあッ』と、まだ太息を吐いてゐる。『ぢや思ひ切つて言つて了ふかなあ! ……あなたが屹度



愛相を盡かすよ。……盡かさない？』うるさく訊く。

『何様なことか知らぬが盡しやしないよ。僕は君といふものが好いんだから假令これまでに如何なことをしてゐようとも何様な素性であらうとも差支へないぢやないか。それより早く言つて聞かしてくれ。宵からさう何や彼に焦らされてゐては私の身も耐らない。』と言ひは言つたが、腹では本當に據りない心持ちがして來た。

『ぢや屹度愛相盡かささない？』

『大丈夫！』

『ぢや言ふ！……私には情夫があるの！』

『へえッ……今？』

『今……』

『何時から？』

『以前から！』

『以前から？ ぢや法科大學の學生の處に行つてゐたといふのはあれは嘘？』私もまさかとは思つてゐたが、それでも少しは本當もあると思つてゐた。

『それもさうなの。けれどまだ其の前からあつたの。』

『その前からあつた！ それは何様な人？』

先刻から一人で浮かれてゐた私は、眞面目に心細くなつて來た。さうして腹の中で、斯ういふ境涯の女にはよくあり勝ちな、悪足でもあることゝ直ぐ察したから、

『遊人か何か？』と續けさまに訊いた。

『いや、さうぢやないの。……それも矢張り學生は學生なの。……それもなか／＼出来ることは出来る人なの。……』低い聲で獨り恥辱を辯解するやうに言つた。其男を悪く言ふのは、自分の古傷に觸られる心地がするので、成るだけ静として置きたいやうである。

『ふむ。矢張り學生で……大學生の前から……』私は獨語のやうに言つて考へた。

女も、それは耳にも入らぬらしく、再び机に體を凭して考へ込んでゐる。

『それでその人とは今何ういふ關係なの？……ぢや大學生の處に、欺まされてお嫁に行つたといふのも嘘だつたね。……さうか……。』私は軽く復た獨語のやうに言つた。さうして自分から、美しう信じてゐた女の箔が急に剥けて安ッぽく思はれた。温順しいと思つた女が、悪擦れのやうにも思はれて唯聞いたゞけでは少し恐くもなつて來た。

『えゝ嘘なの。……私にはその前から男があるの。……はあッ！』と、また一つ深い、太息をして、更に言葉を續けた。『私は、その男に去年の十二月から、つひ此間まで隠れてゐたの。……』



もう分らないだらうと思つて、一と月ほど前から此地に来てゐると、一昨日また、それが、私のある處を探り當てゝ出て來たの。……私、明後日までにはまた何處かへ姿を隠さねばならぬ。……ですから最早今晚きりあなたにも逢へないの。……あなたにこれを上げますから、これを記念に持つて行つて下さい。」と言葉は落着いて温順しいが、仕舞をてきばきと言ひつゝ、腰に締めた、茶と小豆の辨慶格子の、もう可い加減古くなつた、短かい縮緬の下じめを解いて前に出した。

「へえッ！」と、ばかり、私は寢心よく夢みてゐた楽しい夢を、無理に揺り起されたやうで、暫く呆れた口が塞らなかつた。けれども、しごきをやるから、これを記念に持つて行つてくれ、といふのは、子供らしいが、嬉しい。何といふ懐かしい想ひをさする女だらう！ 悪い男があれはあつても面白い！ と、吾れ識らず棄て難い心持がして、私は、  
 『だつて、何うかならないものかねえ？ さう急に隠れなくなつて、……私は君と今これッきりになりたくないよ。もし私を棄てないで置いてくれないか。……何日かも話した通り、此の土地で始めてお蓮を呼んで、あまり好くもなかつたから、二十日ばかりも足踏みしなかつたが、また、ひょつと來て見たくなつて、お蓮でも可いから呼べと思つて、呼ぶと、蓮ちゃんがゐなくなつて、宮ちゃんが來た。それから後は君の知つてゐる通りだ。宮ちゃんのやうな女は、

また容易に目附からないもの。』

さう言つて、私は、仰けになつてゐた身體を跳ね起きて、女の方に向いて、蒲團の上に胡坐をかいた。

お宮は、沈んだ頭振を掉つて、

『いけない！ 何うしても隠れなくつちやならない！』堅く自分に決心したやうに底力のある聲で言つて、後は『ですからあなたにはお氣の毒なの……。私の代りにまたお蓮さん呼んであげて下さい。』と言葉尻を優しく愛相を言つた。さうしてまた獨りて思案に暮れてゐるらしい。私は、喪然して了つた。

『何うでも隠れなくつてはならない！……君には、其様な逃げ隠れをせねばならぬやうな人があつたのか。……それには何れ一と通りならぬ理由のあることだらうが、何うしてまあ其様なことになつたの？……そんなことゝは知らず、僕は眞實に君を想つてゐた。——尤も君を想つてゐる人は、まだ他にも澤山あるのだらうが——けれども、さういふ男があると知れては、幾許思つたつて仕方がない。……ねえ！ 宮ちゃん！……おや、せめてお前と、その人との身の上でも話して聞かしてくれないか。……もう大分遅いやうだが、今晚寝ないでも聞くよ。私には扱帯なんかよりもその方が好いよ。……私もさういふことのまんざら分らないこともない。同



情するよ。……それを聞かして貰はうぢやないか。……えッ？ 宮ちゃん！……お前の國は本當何處なの？』私は、わざと陽氣になつて言つた。

何處かで、ボン／＼と、高く二時が鳴つた。

すると、お宮は沈み込んでゐた顔を、ついと興奮したやうに上げて、私の問ひに應じて口數少くその來歴を語つた。

一體お宮は、一口に言つて見れば、單へに嘘を商賣にしてゐるからばかりではない。その言つてゐることでも、その所作にも、何處までが眞個で何處までが嘘なのか嘘と眞個との見界の附かないやうな氣持をさする女性だつた。年も初め十九と言つたが、二十一か二にはなつてゐたらう。心の恐ろしく複雑んで、人の口裏を察したり、眼顔を読むことの驚くほどはしこい、それでゐてあどけないやうな、何處までも情け深さうな、たより無氣で人に憐れを催さすやうな、嘘を言つてゐるかと思ふと、また思ひ詰めれば、至つて正直な處もあつた。それ故その身の上げなしも、前後辻褄の合はぬことも多くつて、私には何處までが眞個なのか分らない。

お宮といふ名前も、また初めての時、下田しまと言つた本當の名も、皆その他にまだ幾通かある、變名の中の一つであつた。

『だから故郷は栃木と言つてるぢやないか。』お宮はうるささうに言つた。

『さうかい。……だつて僕はさう聞かなかつた。何時か、熊本と言つたのは嘘か。福岡と言つてゐたこともあつたよ。……それらは皆知つた男の故郷だらう。』

『そんなことは一々覚えてゐない。……宇都宮が本當さ！』

『何時東京に出て來たの？』

『丁度、あれは日比谷で焼討のあつた時であつたから、私は十五の時だ。下谷に親類があつて、其處に來てゐる頃、その直ぐ近くの家に其男もゐて、遊びに行つたり來たりしてゐる間に次第にさういふ關係になつたの。』

『その人も學校に行つてゐたんだらうが、その時分何處の學校に行つてゐたんだ？』

『さあ、よく知らないけれど、師範學校とか言つてゐたよ。』

『師範學校？ 師範學校とは少し變だな。』私は、女がまた出鱈目を云つてゐるのか、それとも、さうと思つてゐるのか、と、眞個に教育の有無をも考へて見た。

『でも師範學校の免狀を見せたよ。』

『免狀を見せた。ぢや高等であつたか尋常であつたか。』

『さあ、そんなことは何方であつたか、知らない。』

『その人は國は何處なんだ。年は幾つ？ 何と言ふの？』



「熊本。……今二十九になるかな。名は吉村定太郎といふの。……それはなか／＼才子なの。」

「ふむ。江馬といふ人と何うだ？」

「さうだなあ、才子といふ點から言へば、それや吉村の方が才子だ。」

「男振は？」

「男は何方も好いの。」と、普通に言つた。私は、それを聞いて、腹では一寸妬けた。

「何うも御馳走さま！……宮ちゃん男を拵へるのが上手と思はれるナ。……そりやまあ、學生と娘と關係するなんか、ザラに世間にあることだから、悪くばかしは言へない。が、其の吉村といふ人とそんな仲になつて、それから何ういふ理由で、その男を逃げ隠れをするやうになつたり、またお前が斯様な處に来るやうな破目になつたんだ？」私は、何處までも優しく尋ねた。

「吉村も道樂者なの。」と、言ひにくさうに言つた。『あなたさぞ私に愛相が盡きたてせう。』

「ふむ……江馬さんも温順しい、深切な人であつたが、下宿屋の娘と食附いたし、吉村さんも道樂者。……成程お前が、何時か「男はもう厭！」と言つたのに無理はないかも知れぬ。……私にしたつて、斯うして斯様な處に来るのだから矢張り道樂者に違ひない。……が、併しその人は何ういふ道樂者か知らないが、道樂者なら道樂者として置いて、君が此様な處に来た理由が分らないな。私には、私だつて、つき合つて見れば、此の土地にゐる女達も大凡何様な人

柄のくらゐは見當が附く。先達つて私の處に始めて寄越した手紙だつて「……多くの人は、妾等の悲境をも知らず、侮蔑を以つて能事とする中に、流石は、同情を以つて、その天職とせる文學者に始めて接したる、その刹那の感想は……」——ねえ、ちゃんと斯う私は君の手紙を讀記してゐるよ。——その刹那の感想はなんて、あんな手紙を書くのを見ると、何うしても女學生めがりといふ處だ。何うも君の實家だつて、さう悪い家だとは思はれない。加之宮ちゃんは非常に氣位が高い。随分大勢女もゐるが、皆な平氣で商賣してゐるのに君は自分が悲境にゐることをよく知つてゐて、それほど侮蔑を苦痛に感じるほど高慢な人が、何うして此様な處に来たの？……可笑しいぢやないか。えッ宮ちゃん？」

けれどもお宮は、それに就いては、唯、人に饒舌らして置くばかりで、黙つてゐた。さうして此度は其の男を辯護するかのやうに、

「そりや初めはその人の世話にも随分なるにはなつたの。……あなたの處に遣つた、その手紙に書いてゐるやうなことも、私がよく漢語を使ふのも皆其の人が先生のやうに教育してくれたの。……けれど、學資が來てゐる間はよかつたけれど、その内學校を卒業するでせう。卒業してから學資がびつたり來なくなつてから困つて了つて、それから何するとも出來なくなつたの。』

「だつて可笑しいなあ。君がいふやうに、本當に師範學校に行つてゐて卒業したのなら、高等の



方だとすると、立派なものだ。そんな人が、何故自分の手を附けた若い娘を終に此様な處に來なければならぬやうにするか。……十五で出て來て間もなくといふんだから、男を知つたのもその人が訖度初めだらう？」

『え、そりや其の人に、を破られたの。』と、それを取返しに附かぬことに思つてゐるらしい。

『は、面白いことを言ふねえ。もし尋常師範ならば、成程國で卒業して、東京に出てから、ぐれるといふこともあるかも知れぬが、今二十九で、五年も前からだといふから、年を積つても可笑しい。師範學校ぢやなからう。……お前の言ふことは何うも分らない。……けれど、まあ其様な根掘り葉掘り聞く必要はないわねえ。……で、一昨日は何うして此處に來てゐることが分つたの？』

『下谷に知つた家があつて、其處から一昨日は電話が掛かつて、一寸私に來てくれと言ふから、何かと思つて行くと、其處に吉村が、ちゃんと來てゐるの。それを見ると、私ははあと思つて、本當にぞつとして了つた。』

『ふむ。それで何うした？』

『私は黙あつてゐてやつた。さうすると、「何うして黙つてゐる？ お前は非道い奴だ。俺を一

體何と思つてゐる？ 殺して了ふぞ。』と、恐ろしい權幕で言ふから、「何と思つてゐるツて、あなたこそ私を何と思つてゐる？」と私も強く言つてやつた。此方でさう言ふと、此度は向から優しく出るの。さうして何卒これまでのやうになつてゐてくれといふの。……私は、「厭だ！」と言つてやつた。其様なことを言ふんなら、私は今此處で本當に殺してくれと言つてやつた。……悪い奴なの。』と、さもなく悪者のやうに言ふ。

『さういふと、何う云つた？』

『けれども、何うもすることは出来ないの。……元は屢く私を撲つたもんだが、それでも、此度は餘程弱つてゐると思はれて、何うもしなかつた。』お宮は終を獨語のやうに言つた。

『何うして分つたらうねえ？ お前が此處にゐるのが。』

『其處が才子なの。私本當に恐ろしくなるわ。方々探しても、何うしても分らなかつたから、口露なんか刺つて了つて、一寸見たくらゐでは見違へるやうにして、私の故郷に行つたの。さうすると、家の者が、皆口ぢや何處にゐるか知らない。と甘く言つたけれど、田舎者のことだから間が抜けてゐるでせう。すると、誰れも一寸居ない間に、吉村が状差しを探して見て、その中に私が此處から遣つた手紙が見附かつたの。よくさう言つてゐるのに、本當に田舎者は仕様がなう。』



「ふむ。お前の故郷まで行つて探した！ ぢや餘程深い仲だなあ。……さうして其の人、今何處にゐるんだ？ 何をしてゐるの？」

「さあ、何處にゐるか。其様なこと聞きやしないさ。……それでも私、後で可哀さうになつたから、持つてゐたお錢を二三圓あつたのを、銀貨入れのまゝそつくり遣つたよ。煙草なんかだつて、悪い煙草を吸つてゐるんだもの。……くれて遣つたよ。私」と、ホツと息を吐いて、後は萎れて、しばらく黙つてゐる。

「身装なんか、何様な風をしてゐる？」

「そりや汚い身装をしてゐるさ。」

「どうも私には、まだ十分解らない處があるが、餘程深い理由があるらしい。宮ちゃんも少し何うかして上げれば好い。」

「何うかしてあげれば好いつて、何うすることも出来やしない。際限がないんだもの。」と、お宮は、怒るやうに言つたが、「私もその人の爲にはこれまで盡せるだけは盡してゐるの。初め此方が世話になつたのは、既う夙に思は返してゐる。何倍此方が盡してゐるか知れやしない。……つまり自分でも此の頃漸く、私くらゐな女は、何處を探しても無いといふことが分つて來たんでせうと思ふんだ。斯う見えても、私は、本當の心は好いんですから、そりや私くらゐ盡

す女は滅多にありやしないもの。……ですから其の人の心も、他の者には知らなくつても、私にだけは分ることは、よく分つてゐるの。」と、しんみりとなつた。

「うむ〜。さうだ。お前の言ふことも、私にはよく分つてゐる。……ぢや二人で餘程苦勞もしたんだらう。」

「それや苦勞も随分した。米の一升買ひもするし……私、終には月給取つて働きに出たよ。」

「へえ、そりやえらい。何處に？」

「上野に博覽會のあつた時に、あの日本橋に山本といふ葉茶屋があるでせう。彼處の出店に會計係になつても出るし、それから神保町の東京堂の店員になつて出てゐたこともある。……博覽會に出てゐた時なんか、暑うい時分に、私は朝早くから起きて、自分で御飯を炊いて、私が一日居なくつても好いやうにして出て行く。その後で、晩に遅くなつて歸つて見ると、家では、朝から酒ばっかり飲んで、何にもしないでゐるんですもの。……」

「酒飲みぢや仕様がない。……酒亂だな。」

「えゝ酒亂なの、だから私、此様な處にゐても、酒を飲む人は嫌ひ。……湯島天神に家を持つてゐたんですが、私、一と頃生傷が絶えたことがなかつた。……そんな風だから、私の方でも、終には、「あゝもう厭だ。」と思つて、何か氣に入らぬことがあると此方でも負けずに言ふでせう。」



さうすると「貴様俺に向つて何言ふんだ。」と言つて、煙管で撲つ、ピールの空瓶で打つ、煙草盆を投げ附ける。……その煙草盆を投げ附けた時であつた。その時の傷がまだ残つてゐるんです。此處に小さい痣が出来てゐるでせう。痣なんか、私にやありやしなかつた。」と言つて、白い顔の柔和な眉毛の下を遺恨のあるやうに、軽く指尖で抑へて見せた。それは、あるか、無いかの淡青い痣の痕であつた。

私は、黙つてお宮の言ふのを聞きながら、静と其の姿態を見成つて、成程段々聞いてゐれば、何うも賢い女だ。縹緞だつて、他人には何うだか、自分にはまづ氣に入つた。これが、まだそんな十七や八の若い身で元は皆心がらとはいひながら、男の爲に、眞實にさういふ所帯の苦勞をしたかと思へば、唯いぢらしくもなる。自分で氣にするほどでもないが、痣の痕を見れば、寧ろ其れがしをらしくも見える。私は、「おゝ」と言つて抱いてやりたい氣になつて、

『ふむ……それは感心なことだが。併しそれほど心掛の好い人が何うして、とどの詰り斯ういふ處へ来るやうになつたんだらうねえ?』と、

またころりと横になりながら、心からさう思つて、餘りうるさく訊くのも、却つて女の痛心に對して察しの無いことだから、さも餘處の女のことのやうに言つてまたしても斯う尋ねて見た。さうして、つひ身につまされて、先刻からお宮の話聞きながらも、私は自分とお前と

のことに、また熟々と思入つてゐた。「お雪の奴、いま頃は何處に何うしてゐるだらう? 本當に既う嫁いてゐるか。嫁いてゐなければ好いが。嫁いて居ると思へば心元なくてならぬ。最後には自分から私を振切つて行つて了つたのだ。それを思へば憎い。が、元を思へば、皆な此方が苦勞をさしたからだ。あゝ、悪いことをした。彼女も行末は何うなる身の上だらう? 淺間しくなつて果てるのではなからうか?』と、しみんと哀れになつて、斯うして静としてはゐられないやうな氣がして來て、しばらくは、私達が丁度お宮等二人のやうに思はれてゐたが、

「いや、お雪が、お宮と同じであらう道理が無い。自分がまた吉村であらう筈もない。私に、何うして斯ういふ女を、終に斯様な處に來なければならぬやうにするやうな、そんな無慘なことが出来よう!』と、私は少しく我れに返つて、

『けれども其の人間も随分非道いねえ。そんなにして何處までも、今まで通りに夫婦になつてゐてくれといふほどならば、何故、宮ちゃんが其様なにして盡してゐる間に、少しはお前を可愛いととは思はなかつたらうねえ? お前が可愛いければ、自分でも確乎せねばならぬ筈だ。況して自分が初めて手を附けた若い女ぢやないか!』と、人の事を全然自分を責めるやうに、さう言つた。

お宮はお宮で、先刻から黙つて、獨りて自分の事を考へ沈んでゐたやうであつたが、



『ですから私、何度逃げ出したか知れやしない。……その度毎に追掛けて来て捉へて放さないんだもの……はあッ！ 一昨日からまた其の事で、彼方此方してゐた。』と、またしても太息ばかり吐いて、屈託し切つてゐる。私には其大學生の江馬と吉村と女との顛末などに就いても、屹度面白い筋があるに違ひない。と、それを探るのを一つは楽しくも思ひながら、種々と腹の中で考へて見たが、お宮に對つてはその上強ひては聞かうともしなかつた。唯、『で、一昨日は何と言つて別れたの？』と訊ねると、

『まあ二三日考へさしてくれと、可い加減なことを言つて歸つて來た。……ですから、何うしたら好いか、あなたに知恵を借りれば好いの。……』と、其の事に種々心を碎いてゐる所爲かそれとも、唯私に對してさう言つて見たゞけなのか、腹から出たとも口前から出たとも分らないやうな調子で言ふから、

『……知恵を借りるツたつて、別に好い知恵もないが、ぢや私が何處かへ隠して上げようか。』

と、女の思惑を察して私も唯一口さう言つて見たが、此方からさう言ふと、女は、

『否！ 何うしても駄目！』と頭振を掉つた。

『ぢや仕様がな。よく自分で考へるさ。……あゝ遅くなつた。もう寝よう。君も寝たまへ。』と、言ひながら、私は欠伸を噛み殺した。

『えゝ』と、お宮は氣の抜けたやうな返事をして、それから五分間ばかりして、

『あなたねえ。濟みませんが、今晚私を此のまま靜々と寝かして下さい。一昨日から何處の座敷に行つても、私身體の鹽梅が悪いからつて、皆な、さう言つて斷つてゐるの……明日の朝ねえ……はあッ神經衰弱になつて了ふ。』と萎えたやうに言つて、横になつたかと、思ふと、此方に脊を向けて、襟に顔を隠して了つた。さうして夜具の中から『あゝ、あなた本當に濟みませんが、電燈を一寸捻つて下さい。』

『あゝ。よくお寢！』

と、私は立つて電燈を消したが、頭の心が冴えて了つて眠られない。

また立つて明るくして見た。お宮は眠つた眼を眩しさうに細く可愛く開いて見て、口の中で何かむにやゝ言ひながら、一旦上に向けた顔を、またくるりと枕に伏せた。私は此度は幕で火影を包んで置いて、それから腹這ひになつて、煙草を一本摘んだ。それが盡きると、また立ち上つて暗くした。お宮は聽てぐつすり寢入つたらしい。……私は夜明けまで遂々熟睡しなかつた。翌朝、お宮は、

『精神的に接するわ。』と、一つは神經の疲れてゐた所爲もあつたらうが、ひどく身體を使った。『ぢや、これッ切り最う會へないねえ。何だか残り惜しいなあ。お別れに飯でも食べよう。……』



何が好いか? ……かしはにしようか。」と、私は手を鳴らして朝飯を誂へた。

お宮は所在なきうに、

『あなた、私に詩を教へて下さい。私詩が好きよッ。』と、言つて自分で頼山陽の『雲乎山乎』を低聲で興の無きうに口ずさんでゐる。

その顔を、凝乎と見ると、種々な苦勞をするか、今朝はひどく面糞れがして、先刻洗つて来た、昨夕の白粉の痕が青く斑點になつて見える。『……萬里泊舟天草灘……』と唯口の前だけ聲を出して、大きく動かしてゐる下腮の骨が厭に角張つて突き出てゐる。斯うして見れば年も三つ四つ老けて案外、さう縹緖も好くないなあ! と思つた。

『ねえ! 教へて下さい。』

と、いふから、『ぢや好いのを教へよう。』と氣は進まないながら、自分の好きな張若虚の『春江花月夜』を教へて遣つた。『これに書いて意味を教へて下さい。』といふから巻紙に記して、講釋をして聞せて遣つた。『……昨夜間潭夢落花。可憐春半不還家。江水流春去欲盡……』といふ邊は私だけには大いに心遣りのつもりがあつた。

飯は濟んだが、私はまだ女を歸したくなかつた。

お宮は、心は何處を彷徨いてゐるのか分らないやうに、懷手をして、呆然窓の處に立つて、

つま先きで足拍子を取りながら、何かフイ〜口の中で言つて、目的もなく戶外を眺めなどしてゐる。

『あなた、一寸々々。』

と、いふから、『えッ何?』と、立つて、其處に行つて見ると、

『あれ、子供が體操の眞似をしてゐる。……見てゐると面白いよ。』と、水天宮の裏門で子供の遊んでゐるのを面白がつてゐる。

私は、『何だ! 昨夜はあんな思ひ詰めたやうなことを言つて、今朝の此のフワ〜とした風は? ……』と元の座に戻りながら、不思議に思つて、またしても女の態度を見成つた。

すると、女は、フツと此方を振向いて、窓の處から傍に寄つて來ながら、

『あなた、妾を棄てない? ……棄てないで下さい!』と、言葉に力が入つてゐるが、それもまた口の前から出るのやら、腹の底から出たのやら分らぬやうな調子で言つた。

『あゝ。』と、私もそれに應ずるやうに返事した。

『ぢや屹度棄てない? ……屹度?』重ねて言つた。

さう言はれると、此方もつひ釣込れて、

『あゝ屹度棄てやしないよ。……僕より君の方が棄てないか?』と、言つたが、眞實に腹から



「棄てないで下さい！」と言ふのならば、思ひ切つて、何うかして下さい。とでも、もう少し打明けて相談をし掛けないのであらうと、それを効なく思つてゐた。

さういふと、女は黙つてゐた。また以前の通り何處に心があるのやら分らなかつた。するとまた暫く經つて『定つたらあなたに手紙を上げますから、さうしたら何うかして下さいな。』とさう言ふ。此度は此方で『うむ！』と氣のない返事をした。

戸外は日が明るく照つて、近所から、チーン／＼と鍛冶の槌の音が強く耳に響いて来る。何處か少し遠い處で地を揺るやうな機械の音がする。今朝は何だか濡りつ氣がない。

勘定が大分嵩んだらう。……斯う長く居るつもりではなかつたから、固より持合せは少かつた。私は突然に好い夢を破られた失望の感と共に、少しでも勘定が不足になるのが氣になつて、さうしてゐながらも、些とも面白くなかつた。私にはまだ自分で待合で勘定を借りました經驗はなかつた。お宮を早く歸せば錢も嵩まないと思つてゐたが、それは出来なかつた。又假令これ限りお宮を見なくなるにしてもお宮のゐる前で勘定の不足をするのは尙ほ堪へられなかつた。さう思つて先刻から、一人で神経を悩ましてゐたが、ふつと、今日は、長田が社に出る日だ。彼處に使ひを遣つて、今日は最う十七日だから、今月書いた今までの分を借りよう。——それはお前も知つてゐる通りに、始終行つてゐたことだ。——と、さう氣が着いて、手紙の裏には牛

込區喜久井町、雪岡」と書いて車夫に、彼方に行つてから、若しも何處から來たと聞かれても、牛込から來た。と言はしてくれと女中に頼んだ。

暫時して車夫は歸つて來たが、急いで封を切つて見ると、錢は入つてゐなくつて唯、『主筆も編輯長もまだ出社せねば、その金は渡すこと相成りがたく候。』

と、長田の例の亂筆で、汚い新聞社の原稿紙に、いかにも素氣なく書いてある。私は、それを見ると、錢の入つてゐない失望と同時に『はつ』と胸を打れた。成程使者が丁度向に行つた頃が十二時々分であつたらうから、主筆も編輯長もまだ出社せぬといふのは、さうであらう。が、『その金は渡すこと相成り難く候。』とあるのは可怪い。長田の編輯してゐる日曜附録に、つまらぬことを書かして貰つて僅かばかりの原稿料を、併も錢に困つて、一度に、月末まで待てないで、二度に割たりなどして受取つてゐるのだが、分けても此の頃は種々なことが心の面白くないことばかりで、それすら碌々に書いてゐない。けれども前借をと言へば、假し自分が出社せぬ日であつても、これまで何時も主筆か編輯長に當て、幾許の錢を雪岡に渡すやうにと、長田の手紙を持つてさへ行けば、私に直ぐ受取れるやうに、兎に角氣輕にしてくれてゐる。然るに、假令錢は渡せない分とも、その錢は渡すことならぬ。といふその錢は、何ういふつもりで書いたのだらう？ 自分は平常懶惰者で通つてゐる。お雪を初めその母親や兄すらも、最初こそ二



足も三足も譲つてゐたものだが、それすら後には向からあの通り遂々愛相を盡して了つた。幾許自分にしても傍で見てゐるやうに理由もなく、只々懶けるのでもないが、成程懶けてゐるに違ひない。長田は國も同じければ、學校も同時に、また爲てゐる職業も略ぼ似てゐる。それ故此の東京にゐる知人の中でも長田は最も古い知人で、自分の古い頃のことから、つい近頃のことまで、長田が自分で觀、また此方から一寸々話しただけのことは知つてゐる。長田の心では雪岡はまた女に凝てゐる。あの通り、長い間一緒にゐた女とも有耶無耶に別れて了つて、段々詰らん坊になり下つてゐる癖に、またしても、女道樂でもあるまい。と、少しは見せしめの爲めにその錢は渡すこと相ならぬ。といふ積りなのであらうか。それならば難有い譯だが、否！ あの人間の平常から考へて見ても、他人の事に立入つた忠告がましいことや、口を利いたりなどする長田ではない。して見れば、此の、その錢は渡されぬといふ簡単な文句には、あの先達つての様子といひ、長田の性質が歴然と出てゐる。これまでとても、随分向側に廻て、小蔭から種々な事に、ちびり／＼邪魔をされたのが、あれにあれに、あれと眼に見えるやうに心に残つてゐる。此度はまた淫賣のことで祟られるかな。と平常は忘れてゐる、其様なことが一時に念頭に上つて自分をば取着く島もなく突き離されたその上に、まだ石を打附けられるかと、森々と感じながら、

『ふむ／＼。』と、獨り肯き／＼唯それだけの手紙を私はお宮が

『それは何？』と、

終に怪しんで問ふまで、長い間、黙つて凝視めてゐた。それ故文句も、一字一句覚えてゐる。

お宮にさう言はれて、漸と我れに返つて、『うむ。何でもないさ！』と言つて置いて、早速降りて行つて、女中を小蔭に呼んで譯を話すと、女中は忽ち厭な顔をして、

『そりや困りますねえ。手前共では、もう何方にも、一切さういふことは、しないやうにして居るんですが、萬一さういふことがあつた場合には、私共女中がお立て換へをせねばならぬことになつて居るんですから。ですから其の時は時計か何か持つてお出になる品物でも一時お預りして置くやうにして居りますが。』と言ひにくさうに言ふ。ぢや、古い外套だが、あれでも置いとかう。と、私が座敷に戻つて來ると、神経質のお宮は、もう感附いたか、些と顔を青くして、心配さうに、

『何事？……何うしたの？……何うしたの？』と、氣にして聞く。私は、失敗つた！と、穴にも入りたい心地を力めて隠して、

『否む！ ナニ。何でもないよ。』と言つてゐると、階下から、

『宮ちゃん！ 』と口早に呼ぶ。



お宮は『えッ?』と降りて行つたが、直ぐ上つて来て、黙つて坐つた。  
 『ぢや、もうお歸り。』と、いふと、  
 『さうですか。ぢやもう歸りますから……種々御迷惑を掛けました。』と、尋常に挨拶をして歸つて行つた。

その後から、直ぐ此度は、若い三七八の他の女中が、入り交りに上つて来て、

『本當にお氣の毒さまですねえ。手前共では、もう一切さういふことはしないことにして居りますから、どうぞ悪からず思召してねえ。……あの長田さんにも随分長い間、御最負にして戴いて居りますけれど、あの方も本當にお堅い方で。長田さんにすら、もう一度も其様なことはございませぬのですから。……況してあなたは長田さんのお友達とは承知して居りますけれどつひまだ昨今のことでございますし。』

と、さも氣の毒さうな顔をして、黄色い聲で、口先で世辭とも何とも附ぬことを言ひながら追立てるやうに、其等のものを片端からさつくと形附け始めた。

『え、ナニ。そりやさうですとも。私の方が濟ないんです。私は今まで此様な處で借りを拵へた覚えがないもんですから、それが極りが悪いんです。』と、心の千分の一を言葉に出して恥辱を自分で間切した。

『あれ! 極りが悪いなんて。些ともそんな御心配はありませんわ。ナニ此様な失禮なことを申すのぢやございませぬのですけれどねえ。』と、少し低聲になつた眞似をして『帳場が、また悪く八ヶ間敷いんですから。私なんか全く困るんですよ。……時々斯うして、お客様に、女中がお氣の毒な目をお掛け申して。』

『全く貴女方にはお氣の毒ですよ。……いや。何うも長居をして濟みませんでした。』と、私はそんなことを言ひながらも、

『あの女は、もうゐなくなるさうですわねえ。……自分ぢや、つひ此の間出たばかりだ。と言つてゐたが、そんなことはないでせう。』

と聞くと、

『え、居なくなるなんて、ことは、まだ聞きませんが、随分前からですよ。此度戻つて來たのは、つひ此間ですけれど、始めて出てから、もう餘程になりますよ。』

と、言ふ。私は、『彼女め! 何處まで嘘を吐くか。』と思つて、ますく心に描いた女の箔が褪めた思ひがした。

私は、あの古い外套を形に置いて、櫻木の入口を出たが、それでも、其れを着てゐれば目に立たぬが、下には、あの、もう袖口も何處も切れた、剝げちよろけの古い米澤琉球の羽織に、



着物は例の、焼けて焦茶色になつた秩父銘仙の綿入れを着て、堅く腕組みをしながら玄關を下りた時の心持は、吾れながら、自分の見下げ果てた状態が、歴々と眼に映るやうで、思ひ做しばかりではない、女中の『左様なら！ どうぞお近い内に！』といふ送くり出す聲は、背後から冷水を浴せ掛けられてゐるやうであつた。

昨夜は、お宮の來るのが、遅いので、女中が氣にして時々顔を出しては、『……いえ。あの娘のゐる家は、恐ろしい慾張りなものですから、一寸でも時間があると、御座敷へ出さすものですから、それで斯う遅くなるのです。……本當にお氣の毒さまねえ。でも、もう追附け参りませうから。』と詫びながら柔かいお召のどてらなどを持つて來て貸してくれた。私はそれを、悠然と着込んで待つてゐたのだが、用事のある者は、皆な、それ〴〵忙しきうにしてゐる時分に、日の射してゐる中を、昨夜に變る、今朝の此の姿は、色男の器量を瞬く間に下げて了つたやうで、音も響も耳に入らず。眼に着くものも眼に入らず。消え入るやうに、勢も力もなく電車に乗つたが、私は切符を買ふのも氣が進まなかつた。

喜久井町の自家に戻ると、もう彼れ是れ二時を過ぎてゐた。さて詰らなきうに戻つて見れば、家の中は今更に、水の退いた跡のやうで、何の氣もしない。何處か、其處らに執り着く物でもゐるのではないかと思はれるやうに、またぞつと寂しさが募る。私は、落ちるやうに机の

前に尻を置いて、『ほうッ』と、一つ太息を吐いて、見るともなく眼を遣ると、もう幾日もく形附けをせぬ机の上は、塵埃だらけな種々なものが、重なり放題重なつて、何處から手の附けやうもない。それを見ると、また續けて太息が出る。『あゝ！』と思ひながら、脇を向いて、此度は、脊を凹ますやうに捻ぢまげて何氣なく、奥の六疊の方を振返ると、あの薄暗い壁際に、矢張りお前の箆筒がある。其れには平常の通り、用箆筒だの、針箱などが重ねてあつて、その上には、何時からか長いこと、桃色甲斐絹の裏の附いた糸織の、古うい前掛けに包んだ火熨斗が吊してある。『あの前掛けは大方十年も前に締めたのであらう！』と思ひながら私は、あの暗い天井の隅々を、一遍ぐるりと見廻した。さうして、また箆筒の方に氣が着くと、

あの抽斗も、下の方の、お前の僅ばかりの物で、重なるものゝ入つてゐさうな處は、最初から鏡を下してあつたが、でも上の二つは、——私の物も少しは入つてゐるし、——何か知ら、種々なものがあつて、鏡も下さないであつたが、婆さんがしたのか、誰れがしたのか、何時の間にかお前の物は、餘所々々しく、他へ入換て了つて、今では唯上の一つが、抽き差し出来るだけで、それには私の單衣が二三枚あるばかりだ。……『一體何處に何うしてゐるんだらう？』と、また暫時く其様なことを思ひ沈んでゐたが。

……お宮も何處かへ行つて了ふと、言ふ。加之今朝のことを思ひ出せば、遠く離れた此處に



斯うしてゐても、何とも言ふに言へない失態おぼろげが未だに身に付き纏うてゐるやうで、唯あの土地とちを、思つても厭な心持がする。ナニ糞！と思つて了しまへば好いのだが、さう思へないのは矢張りお宮に心が残るのであらう。と、ふつと自分が可笑可笑くもなつて、獨り笑ひをした。後はまた、それからそれへと種々なことを取留めもなく考へながら、呆然ぼんやり縁側に立つて、遠の方を見ると、晩秋おきの空は見上げるやうに高く、清淨せいじやうに晴れ渡つて、世間が静かた、冷やりと、自然ひたひたに好い氣持がして来る。向ふの高臺の上の方に、何處かの工場の烟けむりであらう？ 緩く立迷つてゐる。

それ等を見るときもなく見ると、私は、あゝ、自分は秋が好きであつた。誰れに向つても、自分は秋が好きだ。と言つて、秋をば自分の時節が回つて来たやうに、その静なのを却つて楽しく賑かなものに思つてゐたのだが、此の四五年來といふもの、年一年と何の年を考へ出して見ても楽しい筈であつた其の秋の樂しかつたことがない。毎年いづも唯それはと、心ばかり急がしさうにしてゐる間に經つて行つて了しまふ。分けて此の秋くらゐ、斯うして此こんなに寂しい思ひのするのは、始めて覺えることだ。何よりも一つは年齢との所爲せゐかも知れぬ。白髪しろがさへ頻りに眼に附て来た。加之これに段々、豫期してゐたことが、實際とは違つて来るのに、氣が附つくに連れて、世の中の事物ものが、何も彼も大抵興きが醒めたやうな心持がする。——昨夕ゆうべのお宮が恰ちやうどそれだ。

あゝいふ境遇きんぎよにゐる女性おんなだから、何うせ清淨せいじやうなものであらう筈も無いのだが、何につけ事物ものを善く美しう、眞個まことのやうに思ひ込み勝ちな自分は、あのお宮が最初からさう思はれてならなかつた。すると昨夕ゆうべから今朝けさにかけて美しいお宮が普通おたふまへな淫賣えんばいになつて了しまつた。口の利きやうからして次第そんざいに粗在そんざいな口を利いた。自分の思つてゐたお宮が今更に懐かしい。——が、あのお宮は眞實まことに去つて了しまふか知らん？——自分は何うも夢を眞實まことと思ひ込む性癖せうせきがある。それをお雪は屢々言つて、『あなたは空想家だ。小栗風葉の書いた欽哉きんさいにそつくりだ。』と、戯談かじかふやうに『欽哉きんさい』と言つては、『そんな目算めあても無いことばかり考へてゐないで、もつと手近なことを、さつさつと無さいな！』と、たしなめくした。本當に、自分は、今にもつと良いことがある。今に、もつと良いことがある。と夢ばかり見てゐた。けれども、私を空想家だ。と言つた、あのお雪が矢張り空想勝ちな人間であつた。『今にあなたが良くなるだらう。今に良くなるだらう。』と思つてゐても何時いつまで經つても良くなるのだもの。』と、あの晩彼女おれが言つたことは、自分でも熱々あつあつとさう思つたからであらうが、私には、あゝ言つたあの調子が悲哀あはれなやうに思はれて、何時までも忘れられない。彼女おれも私と一緒に、自分の福運ふくうんを只夢を見てゐたのだ。私は遂々とうとう其の夢を本當にしてやることが出来なかつた。七年の長い間のことを、今では、さも、詰らない夢を見て年齢とばかり取つて了しまつた。と、恨んで居るであらう。年々としとしひどく顔かほの皺しわを氣に



しては、

『私の眼の下の此の皺は、あなたが持らへたのだ。私は此の皺だけは恨みがある。……これは、あの音羽にゐた時分に、あんまり貧乏の苦勞をさせられたお蔭で出来たんだ。』

と、二三年來、鏡を見ると、時々それを言つてゐた。——そんなことを思ひながら、フツと庭に目を遣ると、杉垣の傍の、笹混りの草の葉が、既う紅葉するのは、して、何時か末枯れて了つてゐる中に、ひよろ／＼と、身長ばかり伸びて、勢の無いコスモスが三四本わびしきうに咲き遅れてゐる。

これは此の六月の初めに、遂々話が着いて、彼女が後の女中の心配までして置いて、あの關口臺町から此家へ歸つて來る時分に、彼家の庭によく育つてゐたのを、

『あなた、あのコスモスを少し持つて行きますよ。自家の庭に植ゑるんですから。』と。それでも楽しきうに言つて、簞笥や蒲團の包みと一緒に荷車に載せて持つて戻つたのだが、誰れが植ゑたか、投げ植ゑるやうにしてあるのが、今時分になつて、漸う／＼數へるほどの花が白く開いてゐる。

あゝ、さう思へば、あの戸袋の下の、壁際にある秋海棠も、あの時持つて來たのであつた。先達て中始終秋雨の降り朽ちてゐるのに、後から／＼と蕾を附けて、根好く咲いてゐるな。を

思つて、折々眼に着く度に、さう思つてゐたが、其れは既う咲き止んだ。

六月、七月、八月、九月、十月、十一月と、丁度半歳になる。あの後、何うも不自由で仕方が無い。夏は何うせ東京には居られないのだから、旅行をするまでと、言つて、また後を追つて此家に暫時く一緒になつて、それから、七月の十八日であつた。いよ／＼箱根に二月ばかり行く。それが最後の別れだ。と言つて、立つ前の日の朝、一緒に出て、二人の白單衣を買つた。それを着て行れるやうに、丁度盆時分からかけて暑い中を、私は早く寝て了つたが、獨り徹夜をして縫ひ上げて、自分の敷蒲團の下に敷いて寝て、敷伸しをしてくれた。朝、眼を覺して見ると、もう自分は起きてゐて、まだ寢衣のまま、詰らなさうに、考へ込んだ顔をして、靜と黙つて煙草を吸つてゐた。もう年が年でもあるし、小柄な、瘦た、縹致も、よくない女であつたが、あゝ、それを思ふと、一層みじめなやうな氣がする。それから新橋まで私を送つて、暫時く汽車の窓の外に立つてゐたが、別に話すこともなかつた。私の方でも口を利くのも怠儀であつた。

『斯うしてゐても際限がないから、……私、最早歸りますよ。ちやこれで一生會ひません。』と、傍を憚るやうに、低聲で強ひて笑ふやうにして言つた。

私は『らむ！』と、唯一口、首肯くのやら、頭振を掉るのやら自分でも分らないやうに言つた。



それから汽車に乗つてゐる間、窓の枠に頭を凭して、乗客の顔の見えない方ばかりに眼をやつて、静と思ひに耽けつてゐた。——彼地に行つても面白くないから、それで、またしても戻つて来たのだが。斯うしてゐても、あの年齢を取つた、血氣のない、慳巧さうな顔が、明白と眼に見える。……あれから、あゝして、あゝしてゐる間に秋海棠も咲き、コスモスも咲いて、日は流れるやうに經つて了つた。……

それにしても、胸に納まらぬのは、あの長田の手紙の文句だ。歸途に電車の中でも、勢ひその事ばかりが考へられたが、此度のお宮に就いては、悪戯ぢやない嫉妬だ。洒落れた唯の悪戯は長田のしさうなことではない。……碌に錢も持たないで長居をするなどは、誰れに話したつて、自分が悪い。それに就いて人は怨まれぬ。が、あの手紙を書いた長田の心持ちは、忌々しさに、打壊しをやるに違ひない。何いふ心であるか。餘所ながら見て置かねばならぬ。もし間違つて、此方の察した通りでなかつたならば、其れこそ幸ひだが。それにしても、他人との間に些とても荒立つた氣持ちでゐるのは、自分には斯う静と獨りである、耐へられない。兎に角行つて様子を見よう。自家にゐても何だか心が落着ぬ。と、また出て長田の處に行つた。

長田は、もう一と月も前から、目白坂の、あの、水田の居たあとの、二階のある家に越して

来てゐたから、行くには近かつた。——長田は言ふに及ばず、その水田でも前に言つた△△新聞社の上田でも、村田でも、其の他これから後で名をいふ人達も、凡てお前の一寸でも知つてゐる人ばかりだ。——

長田は、丁度居たが、二階に上つて行くと、平常は大抵此方から何か知ら、初め口を利くのが、その時は、長田に似ず、何か自分で氣の濟まぬことでも、私に仕向けたのを笑ひて聞切らすやうに、些と顔に愛嬌をして、

『今日も少し使者の來るのが遅かつたら、好つたんだが……明日でも自分で社に行く可い。』と言ふ。

『うむ。なに。一寸相變らずまた小遣か無くなつたもんだから。』と私は、何時も屢くいふ通りに言つて、何氣なく笑つてゐた。すると、長田は、意地悪さうな顔をして、

『他人が使ふ錢だから、そりや何に使つても可い理由なんだ。……何に使つても可い理由なんだ。』と、私に向つて言ふよりも、自分の何か、胸に潜んでゐることに向つて言つてゐるやうに、軽く首肯しながら言つた。

私は、『妙なことを言ふ。ぢや確適と此方で想像した通りであつた。』と腹で肯づいた。が、それにして、彼様なことをいふ處を見れば、今朝の使者が何處から行つたといふことを長田の



ことだから、最う見抜いてゐるのではなからうか。とも思ひながら、俺が道樂に錢を遣ふことに就いて言つてゐるのだらう。それは飲み込んでゐる。といふやうに、  
『はゝゝ』と私は抑へた笑ひ方をして、それに無言の答へをしてゐた。けれども何處から使者が行つたかは氣が着いてゐないらしい。

けれども、お宮はあの通り隠れると言つたから、本當にゐなくなるかも知れぬ。若し矢張りゐるにしても、ゐなくなると言つて置いた方が事がなくつて好い。無残々々と人に話すには、惜いやうな昨夕であつたが、寧ろ長田に話して了つて、岡嫉きの氣持を和らがした方が可い。と私は即座に決心して、

『例のは、もう居なくなるよ。二三日あと一寸行つたが、彼女には悪い情夫が着いてゐる。初め大學生の處に嫁に行つてゐたなんて言つてゐたが、まさか其様なことは無いだらうと思つてゐたが、その通りだつた。その男を去年の十二月から、つひ此の間まで隠れてゐたんだが、其奴がまた探して出て來たから二三日中にまた何處かへ隠れねばならぬ。』と言つて記念に持つてゐてくれた僕に古臭いしごきなんかくれたりした。……少しの間面白い夢を見たが、最早覺めた。あゝ！ あゝ！ もう行かない。』

笑ひく、さう言ふと。長田は興ありさうに聞いてゐたが、居なくなると言つたので始めて、

稍同情したらしい笑顔になつて、私の顔を珍らしく優しく見成りながら

『本當に、一寸だつたなあ……さういふやうなのが果敢き縁といふのだなあ！』

と、私の心を咏歎するやうに言つた。私もそれにつれて、少しじめくした心地になつて、唯『うむ！』と言つてゐると、

『本當にゐなくなるか知らん？ さういふやうな奴は屢くあるんだが、其様なことを言つても、なか／＼急に何處へも行きやしないつて。……さうかと思つてゐると、まだ居ると思つた奴が、此度行つて見ると、もうゐなくなつてゐる。なんて言ふことは屢くあることなんだから。』と、

長田は自分の從來の經驗から割り出したことは確だと、いふやうに一寸首を傾けて、キツとした顔をしながら半分は獨言のやうに言つた。

私は、凝乎と、その言葉を聞きながら顔色を見てみると、『その内是非一つ行つて見てやらう。』といふ心が歴々と見える。

『或はさうかも知れない。』と私はそれに應じて答へた。

暫時そんなことを話してゐたが、長田は忙しさうであつたから、早く出て戻つた。

自家に戻ると、日の短い最中だから、四時頃からもう暗くなつたが、何をする氣にもなれず、また矢張り机に凭つて掌に額を支へたまゝ靜としてゐると、段々氣が減入り込むやうで、何か



確乎としたものにも執り付いてゐなければ、何處かへ奪はれて行きさうだ。さうして薄暗く  
なつて行く室の中では、頭の中に、お宮の、初めて逢つた晩の、あの驚くやうに、、、  
、深夜の臙に霞んだ電燈の微光の下に、、、  
から今朝『精神的に接するわ。』と言つた、あの時のこと、その他折によつて、種々に變つて、  
此方の眼に映つた眉毛、目元口付、むつちりとした白い掌先。くゝれの出来た手首などが明歴  
と浮き上つて忘れられない。……それが最早居なくなつて了ふのだと思ふと、尙ほ明らかに眼  
に残る。

私は、何かして、此の寂しく廢れたやうな心持ちを、少しでも陽氣に引立てる工夫はないも  
のか、と考へながら何の氣なく、其處にあつた新聞を取上げて見てみると、

有樂座で今晚恰ど呂昇の『新口村』がある。これは好いものがある。これなりと聞きに行か  
う。と、八時を過ぎてから出掛けた。

さういふやうにして、お宮に夢中になつてゐたから、勝手に付けては、殆ど毎日のやうに行  
つてゐた矢來の婆さんの家へは此の十日ばかりといふもの。バツタリと離れたやうに、足踏み  
しなかつたが、お宮がゐなくなつて見ると、また矢張り婆さんの家が戀しくなつて、久振りに  
行つて見た。婆さんは何時も根好く狀袋を張つてゐたが、例の優しい聲で、

『おや、雪岡さん。何うなさいました？ 此の頃はチツトもお顔をお見せなさいませんか。何  
處かお加減でも悪いのかと思つて、お婆さんは心配してゐましたよ』と言ひながら、眼鏡越し  
に私を見成つて、『雪岡さん。頭髮なんかつんで、大層綺麗におめかし』と、尙ほ私の方を  
見て微笑てゐる。

『え、暫時御無沙汰をしてゐました。』  
と言つてゐると、

『雪岡さん。あなた既う好い情婦が出来たんですつてねえ。大層早く拵らへてねえ。』と、あの  
婆さんのことだから、言葉に情愛を着けて面白く言ふ。私は、ハテ不思議だ。屹度お宮のこと  
を言ふのだらうが、何うしてそれが瞬く間に此の婆さんの家にまで分つたらうか。と思つて、  
首を傾けながら、

『え、少しやそれに似たこともあつたんですが、何うして、それがお婆さんに分つて？』

『ですから悪いことは出来ませんよ。……チャンと私には分つてゐますよ。』

『へえ！ 不思議ですねえ。』

『不思議でせう……此の間、お雪さんが柳町へ来た序に、また一寸寄つた。』と言つて、私の家  
へ来て、『まあ、お婆さん。聞いて下さい。雪岡は何うでせう。既う情婦を拵らへてよ。矢張り



また前年のやうに濱町か蠣殻町らしいの……あの人は三十を過ぎてから覺えた道樂だから、もう一生止まない。だから愛相が盡きて了ふ。」ツて、お雪さんが自分でさう言つておました。……雪岡さん、本當に悪いことは言はないから淫賣婦なんかお止しなさい。あなたの男が下るばかりだから。」と思ひ掛けもないことを言ふ。

「へーえッ……驚いたねえ！ お雪が、さう言つた。不思議だ！ 嘘だらう。おばさん可い加減なことを言つてゐるんでせう。お雪が其様なことを知つてゐる理由がないもの……」

「不思議でせう！……あなた此の頃、頭髮に付ける香油かなんか買つて來たでせう。ちゃんと机の上に瓶が置いてあるといふではありませんか。さうして鏡を見ては頭髮を梳いてゐるでせう。婆さんは、若い者と違つて、別段に冷かすなどといふ風もなく、さういふことにも言ひ馴れた。といふ風に、初めから終まで同じやうな句調で、落着き拂つて、柔らかに云ふ。

「へーえッ！ 其様なことまで！ 何うしてそれが分つたでせう？」

「それから女の處から屢く手紙が來るといふではありませんか。」

「へッ！ 手紙の來ることまで！」

私は本當に呆れて了つた。さうして自然に頭部に手を遣りながら、「氣味が悪いなあ！ お雪の奴、來て見てゐたんだらうか。……彼奴屹度來て見たに違ひ無い。」

「否、お雪さんは行きやしないが、お母さんが、お雪さんの處へ行つて、さう言つたんでせう。……さうして此の頃何だか、ひどくソワ／＼して、一寸／＼泊つても來るつて。歸ると思つて、戸を締めないで置くもんだから不用心で仕様が無いつて。」

「へーえッ！あの婆さんが、さう言つた。嘘だ！ 年寄に其様なことが、一々分る道理が無いもの。」

「それでも、お母さんが、さう言つたつて。お母さんですよ。違やあしませんよ。……あれで矢張し吾が娘に關したことから、幾許年を取つてゐても、氣に掛けてゐるんでせうよ……何うしても雪岡といふ人は駄目だから、お前も、もう其の積りであるが好いつて、お雪さんに、さう言つてゐたさうですよ。」

「へーえッ！ さうですかなあ！ 本當に濟まないなあ！」私は眞から濟ないと思つた。

「ですからお雪さんだつて、あなたの動靜を遠くから、あゝして見てゐるんですよ。嫁いてなにかゝやしませんよ。」

「さうでせうか？」

「さうですよ。それに違ひありませんよ……此の間も私の話を聞いて、お雪さん、獨りで大層笑つてゐましたつけ……私が、「お雪さん、雪岡さんがねえ。時々私の家へ來ては、婆やのやう



に、おばさんく〜と。くさやで、お茶漬ちやづひ一杯呼んで下さいと言って、自家うちに無ければ、自分で買つて来て、それを私には出来ないから、おばさんに焼いて、むしつてくれつて、箸を持つてちやんと待てるのよ。と言つたら、お雪さんが「まあ！ 其様そんなことまでいふの？ 本當に雪岡には呆おきれて了ふ。」おばさんを捉つかまへて私に言ふ通りに言つてゐるのよ。」と獨ひとりではあく言つて笑つてゐましたよ。」と婆さんは、言葉に甘味うまみを付けて、靜しずかに後うら笑わらひながら、さう言つた。

私も「へーえ、お雪公、其様そんなことを言つてゐましたか。」と言ひながら笑つた。

淫賣婦いんばいと思へば汚きたいけれどお宮は、ひどく氣に入つた女だつたが、彼女おれがゐなくなつても、お前まへが時々、矢來こゝへ來て其様そんなことを言つて、婆さんと、影かげながらも私の噂うわさをしてゐるかと思へば、思おもひ做たしにも自分の世界が賑にぎかになつたやうで、お宮のことも諦あきらめられさうな氣持きもちちがして、

『矢張り何處どこに居るとも言ひませんでしたか。』

と、訊きねて見たが、婆さんも、

『言はないッ！何處どこにゐるか、それだけは私が何と言つて聞いても、「まあ〜それだけは」と言つて何うしても明あさない。』

と、さも〜其れだけは、力に及ばぬやうに言ふ。

さうなると、矢張り私の心元こゝろなさは少しも減へじない。それからそれへと、種々いろんなことが思はれて、相變あひらず心の遣つかりには迷まよひながら、氣き抜けがしたやうになつて、またしても、以前のやうに何處どこといふ目的あてもなく方々あちこち歩き廻まわつた。けれどもお宮といふ者を知らない時分に歩き廻まわつたのはまた氣持きもちが大分違ちがふ。寂さびしくつて物足ものたりないのは同じだが、その有樂座うらくざの新口村しんぐちむらを聽きいてから、あの「……薄尾花うすおぼなも冬枯ふゆがれて……」と、呂昇ろしょうの透すき徹とほるやうな、高い聲を張り上げて語つた處ところが、何時いつまでも耳に残のこつてゐて、それがお宮を懐なつかしいと思ふ情こゝろを誘そつて、自分でも時々ときどき可笑わかしく思ふくらゐ心が浮うついて、世間よこが何となく陽氣やうきに思はれる。私は湯ゆに入いつても、便所べんじに行いつても其處そこを口くちずさんで、お宮を思つてゐた。

明後日あしたまでに何とか定まめて了はなければならぬ。と、言つてゐたから、二日ばかりは其様そんな取留とどめもないことばかりを思つてゐたが、丁度その日になつて、日本橋の邊へんを彷徨たろくしながら、有り合せた自働電話じどうでんわに入いつて、そのお宮のゐる澤村さわむらといふ家うちへ聞くと、お宮は居いなくて、主婦おんなが出でて、

『え、宮ちゃん。さういふことを言ふにや言つてゐたやうですけれど、まだ急に何處どこへも行きやしないでせう。荷物もまだ自家うちに置いてゐるくらゐですもの。……ですから、御安心



なさい、また何うか来てやつて下さい。』と、流石に商賣柄、此方から正直に女から聞いた通りを口に出して訊ねて見ても、其様な悪い情夫の附いてゐることなんか、少しも知らぬことのやうに、何でもなく言ふ。

兎に角、さう言ふから、ぢやお宮といふ女奴、何を言つてゐるのか、知れたものぢやない。と思ひもしたが、まだ何處へも行きやしないといふので安心した。斯うしてブラウとしてゐても、まだ心の目的の楽しみがあるやうな気がする。けれども其處にゐるとすれば、何れ長田のことだから、此の間も、あの『本當に何處かへ行くか知らん?』と言つてゐた處を見ると、遣つて行くに相違ない。その他固より種々な嫖客に出る。これまでは其様なことが、さう氣にならなかつたが、しごきをくれた心が忘れられないばかりではない。あれからは女が自分の物のやうに思はれてならぬ。と思ひ詰めれば其様な気がするが、よく考へれば、その吉村といふ切つても切れぬらしい情夫がある。……自分でも『いけない!』といふし、情夫のある者は何うすることも出来ない。と言つて、あゝして、あのまま置くのも惜しくつて心元ない。錢がらんと有れば十日でも二十日も居續けてゐたい。

「あゝ錢が欲しいなあ!」と、私は盜坊といふものは、斯ういふ時分にするものかも知れぬ。と其様なことまで下らなく思ひあぐんで、日を暮らしてゐた。

そんなにして自家に獨りてゐても何事にも手に附かないし、さうかと言つて出歩いても心は少しも落着かない。それで、またしても自働電話に入つてお宮の處に電話を掛けて見る。

「宮ちゃん、お前あんなことを言つてゐたから、私は本當かと思つてゐたのに、主婦さんに聞くと、何處にも行かないといふぢやないか。君は嘘ばかり言つてゐるよ。君がゐてくれれば僕には好いんだが、あの時は喪然して了つたよ。」と恨むやうに言ふと、

「えゝ、さう思ふには思つたんですけど、種々都合があつてねえ。……それに自家の姉さんも、まあ、少し考へたが好いといふしねえ。……あなたまた入しつて下さい。」

「あゝ、行くよ。」

と、言ふやうなことを言つて、何時までも電話で話しをしてゐた。行く錢が無い時には、私は五錢の白銅一つで、せめて電話でお宮と話しをして蟲を堪へてゐた。電話を掛けると、大抵は女中か、主婦か初め電話口に出て、『今日、宮ちゃんゐるか?』と聞くと、『えゝ、おますよ。』と言つて、それからお宮が出て来るのだが、その出て来る間の、たつた一分間ほどが、私にはぞくぞくとして待たれた。お宮が出て来ると、毎時も、眼を瞑つたやうな靜かな、優しい聲で、

「えゝ、あなた、雪岡さん? わたし宮ですよ。」と、定つてさう言ふ。その『わたし宮ですよ。』



といふ、何とも言ふに言へない句調が、私の心を溶かして了ふやうで、それを聞いてみると、少し細長い笑窪あざの出来た、物を言ふ口元が歴々ろくろくと眼に見える。

『ぢやその内行くからねえ。』と言つて、『左様なら。切るよ。』と言ふと、『あゝ、もしく。あゝ、もしく。雪岡さん!』と呼び掛けて、切らせない。此度は、『さよなら! ぢや、いらつしやいな! 切りますよ。』と、向から言ふと、私が、『あゝ、もしく、もしく。宮ちゃんく、一寸く。まだ話すことがあるんだよ。』と何か話すことがありさうに言つて追掛ける。終しまひにはわざと、兩方で

『左様なら!』

『さよなら!』

を言つて、後を黙だまつてゐて見せる。私は、お宮の方でも、さうだらうと思つてゐた。

さうして交換手に『もう五分間来ましたよ。』と、催促をせられて、そのまゝ惜しいが切つて了ふこともあつたが、後には、あとからまた一つ落して、續けることもあつた。白銅を三つ入れたこともあれば、十錢銀貨を入れたこともあつた。私は、氣にして、始終白銅を絶やさないやうにしてゐた。

珍らしく一週間も経つて、櫻木では、此の間のやうなこともあつたし、元々其家は長田の定

宿のやうになつてゐる處だから、また何様なことと、何が分るかも知れないと思つて、お宮に電話で、櫻木は何だか厭だから、是非何處か、お前の知つた他の待合まちにしてといふと、それではこれくゝの處に菊水といふ、櫻木ほどに清潔せいせつではないが、私の氣の置けない小さい家があるから。と、約束をして、私は、ものゝ一と月も顔を見なかつたやうな、急せいかくした心持をしながら、電話で聞いたゞけでは、其の菊水といふ家もよく分らないし、一つは澤村といふ家は何様な家か見て置きたいと思つて、人形町の停留場ていりやうで降りて、行つて見ると、成程蠣殻町二丁目十四番地に、澤村ヒサと女名前の小さい表札を打つた家がある。古ぼけた二階建の棟割り長屋で、狭い間口の硝子戸をびつたり締め切つて、店前みせまへに、言ひ譯のやうに、敷へられるほど『敷島』だの『大和』だのを並べて、他に半紙とか、状態のやうなものをも少しばかり置いてゐる。ぐつと差し出した軒燈に、通りすがりにも、よく眼に着くやうに、向つて行く方に向けて赤く大きな煙草の葉を印しるしに描いてゐる。『斯ういふ處にゐて働かせぎに出るのかなあ!』と、私は、穢きたないやうな、淺間しいやうな氣がして、暫時戸外しばらくそとに立つたまゝ静まじと内の様子を見てゐた。

『御免!』

と言つて、私は出て來た女に、身を隠すやうにして、低聲こゝろで、『私、雪岡ですが。宮ちゃんゐますか。』と言ひながら、愛相に『敷島』を一つ買った。『あゝ、さうですか。ぢや一寸お待ちな



「さい！」と、次の間に入つて行つたが、また出て来て「宮ちゃん、其方の戸外の方から行きま  
すから。」と、密々と言ふ。

私は何處から出て来るのだらう？と思つて、戸外に突立つてみると、直ぐ壁隣の洋食屋の  
先きの、廂合ひのやうな薄闇りの中から、ふいと、眞白に塗つた顔を出して、お宮が、  
「ほ、あは、あは、あは……雪岡さん？」と懐しさうに言ふ。

變な處から出て來たと思ひながら、「おや！其様な處から！」と言ひながら、傍に寄つて行  
くと、「あは、あは、暫くねえ！何うしてゐて？」と、向ふからも寄り添うて來る。

其邊の火灯で、夜眼にも、今宵は、紅を潮した唇をだらしく開けて、此方を仰くやうにし  
て笑つてゐるのが分る。私は外套の胸を、女の胸に押附けるやうにして、

「何うしてゐたかツて？……電話で話した通りぢやないかツ……人に入らぬ心配さし  
て！」

女は「あは、あは」と笑つてばかりゐる。

「おい！菊水といふのは何處だい？」

「あなたあんなに言つても分らないの？直ぐ其處を突き當つて、一寸右に向くと、左手に狭  
い横丁があるから、それを入つて行くと直き分つてよ。……その横丁の入口に、幾個も軒燈

が出てゐるから、その内に菊水と、書いたのもありますよ。よく目を明けて御覽なさい！……  
先刻、私、お湯から歸りに寄つて、あなたが來るから、座敷を空けて置くやうに、よくさう言  
つて置いたから……二疊の小さい好い室があるから、早く其室へ行つて待つていらつしやい。私、  
直ぐ後から行くから。」と嬉々としてゐる。

「さうか。ぢや直ぐお出で！……畜生！直ぐ來ないと承知しないぞツ！」と、私は一つ睨ん  
で置いて、菊水に行つた。

お宮は直ぐ後から來て、今晚はまだ早いから、何處か其處らの寄席にでも行きませう。とい  
ふ。それは好からうと、菊水の老婢を連れて、藥師の宮松に呂清を聽きに行つた。

私は、もうぐつと色男になつたつもりになつて、暮口をお宮に渡して了つて、二階の先きの  
方に上つて、二人を前に坐らせて、自分はその背後に横になつて、心を遊ばせてゐた。

此な間、有樂座に行つた時には、此座へお宮を連れて來たら、さぞ見素ばらしいであらう。  
と思つたが、此席では何うであらうか。と、思ひながら、便所に行つた時、向側の階下の處か  
ら、一寸お宮の方を見ると、色だけは人並より優れて白い。

その晩、

「吉村といふ人、それから何うした？」と聞くと、



『矢張りそのまゝゐるわ。』と言ふ。

『そのまゝツて何處にゐるの?』

『何處か、柳島の方にあるとか言つてゐた。……私、本當に何處かへ行つて了ふかも知れないよ。』と、萎れたやうに言ふ。

私は、居るのだと思つてゐれば、また其様なことをいふ。と思つて、はつと落膽しながら、『君の言ふことは、始終變つてゐるねえ。も少し居たら好いぢやないか。』と、私は、斯うしてゐる内に何うか出来るであらうと思つて、引留めるやうに言つた。けれども女は、それには答へないで、

『……私また吉村が可哀さうになつて了つた。……昨日、手紙を読んで私眞個に泣いたよ。』と、率直に、此の間と打つて變つて今晚は、染々と吉村を可哀さうな者に言ふ。

さう言ふと、妙なもので、此度は吉村とお宮との仲が、いくらか小憎いやうに思はれた。

『へッ! 此の間、彼様な悪い人間のやうに言つてゐたものが、何うしてまた、さう遽かに可哀さうになつた?』私は軽く冷かすやうに言つた。

『……手紙の文句がまた甘いんだもの。それや文章なんか實に甘い。才子だなあ! 私感心して了つた。斯う人に同情を起さすやうに、同情を起さすやうに書いてあるの。』と、獨りで感

心してゐる。

『へーえ。さうかなあ。』と、私はあまり好い心持ちはしないで、氣の無い返事をしながらも、

腹では、フン、文章が甘いツて、何れほど甘いんであらう? 馬鹿にされたやうな氣もして、

『お前なんか、何を言つてゐるか分りやしない。ぢや向の言ふやうに、一緒になつてゐたら好いぢやないか。何も此様な處にゐないでも。』

さういふと女は

『其様なことが出来るものか。』と、一口にけなして了ふ。

私は、これは、愈々聞いて見たいと思つたが、その上強ひては聞かなかつた。

お宮のことに就いて、長田の心がよく分つてから、以後その事に就いては、斷じて此方から口にせぬ方が可いと思つたが、誰れの處といふことなく寂しいと思へば、遊びに行く私のことだから、……先達てから二週間ばかりも経つて久振りに遊びに行くと、丁度其處へ饗庭——これもお前の、よく知つた人だ。——が來てゐたが、何かの話が途切れた機會に、長田が、

『お宮は其の後何うした?』と訊く。

私は、なるだけ避けて靜として置きたいが、腹一杯であつたから、

『もう、お宮のことに就いては、何にも言はないで置いてくれ。』と、一寸左の掌を出して、拜



む眞似をして笑つて、言ふと、長田は唯じろくくと、笑つてゐたが、暫時して、

『あの女は寢顔の好い女だ。』

と、一口言つて私の顔を見た。

私は、その時、はつとなつて、『ぢや愈々』と思つたが強ひて何氣ない體を装うて、

『ぢや、買ったのかい？』と軽く笑つて訊いた。

『うむ！……一生君には言ふまいと思つてゐたけれど、……此間行つて見た。ふん！』と嘲笑ふやうに、私の顔を見て言つた。

『まあ可いさ。何うせ種々の奴が買つてゐるんだから、……支那人にも出たと言つてゐたよ。』私は固より好い氣持のする理由はないが、何うせ斯うなると承知してゐたから、案外平氣で居られた。すると、長田は、

『ふん、そりや其様なこともあるだらうが、知らない者なら幾許買つても可いが、併し吾々の内の知つた人間が買つたことが分ると、最早連れて來ることも何うすることも出来ないだらう！……變な氣がするだらう』と、さまを見る！ 好い氣味だといふやうに、段々恐い顔をして、鼻の先で『ふん！』と言つてゐる。

『變な氣は、しゃしないよ。』と避けようとする、

『ふん！ それでも少しは變な氣がする筈だ。……變な氣がするだらう！』劣け吝みを言ふな。嘘だらう。といふやうに冷笑する。

それでも私は却つて此方から長田を宥めるやうに、

『可いぢやないか。支那人や癩病と違つて君だと清淨に素性が分つてゐるから。……まあ構はないさ！』と苦笑に間切らして、見て見ぬ振りをしながら、一寸長田の顔を見ると、何とも言へない、執念深い眼で此方を見てゐる。私は、慄然とするやうな氣がして、これはなるだけ障らぬやうにして置くが好いと思つて、後を黙つてゐると、先は、反對に、何處までも、それを追掛けるやうに、

『此の頃は吾々の知つた者が、多勢彼處に行くさうだが、僕は、最早あんな處に餘り行かないやうにしなければならん。……安井なんかも、屢く行くさうだ。それから生田なんかも時々行くさうだから、屹度安井や生田なんかも買つてゐるに違ひない。生田が買つてゐると、一番面白いが。あはふふだから知つた者は多いあはふふ』と、何處までも引絡んで厭がらせを存分に言はうとする。生田といふのは、自家に長田の弟と時々遊びに來た、あの眼の片眼悪い人間のことだ。……あんまり執拗いから、私も次第に胸に据ゑかねて、此方が初め悪いことでもしはしまいし、何といふ無理な厭味を言ふ。と、今更に呆れたが、長田の面と向つた、無



遠慮な厭味は年來耳に馴れてゐるので尙ほ静と耐らへて、

『君と青山とは、一生岡焼をして暮す人間だね。』と、矢張り笑つて居らうとして、ふツと長田と私との間に坐つてゐる右手の饗庭の顔を見ると、饗庭が、何とも言へない獨り居り場に困つてゐるといふやうな顔をして私の顔を凝乎と見てゐる。その顔を見ると自分は泣き顔をしてゐるのではないか。と思つて、悄氣た風を見せまいと一層心を勵まして顔に笑ひを出さうとしてゐると、長田は、ますく癖の白い齒を、イーッと露して鬨り殺しの止めでも刺すかのやうに、荒い鼻呼吸をしながら、

『雪岡が、奴だと思つたら厭な氣がしたが、ちえツ！ 此奴姦通するつもりで、、、れと思つて汚す積りで、、、つた。は、は、は、君とお宮とを侮辱するつもりで、、、つた。』とせ、ら笑ひをして、悪毒く厭味を言つた。

けれども私は、『何うしてそんなことを言ふのか？』と言つた處が詰まらないし、立上つて喧嘩をすれば野暮になる。それに忌々しさの嫉妬心から打壊しを遣つたのだ。といふことは十分に飲込めてゐるから、何事に就けても嫉妬心が強くつて、直ぐまたそれを表に出す人間だが其様なにもお宮のことが焼けたかなあ。と思ひながら、私は長田の嫉妬心の強いのを今更に恐れてゐた。

それと共に、また自分の知つた女をそれまでに羨まれたと思へば却つて長田の心が氣の毒なやうな氣も少しは、して、それから、さういふ毒々しい侮辱の心持ちでしたと思へば、何だかお宮も可哀さうな、自分も可哀さうな氣分になつて來た。私はそんなことを思つて打壊された痛い心と、面と向つて突掛られる荒立つ心とを凝乎と取鎮めようとしてゐた。他の二人も暫時黙つて座が變になつてゐた。すると饗庭が、

『あゝ、今日會ひましたよ。』と、微笑としながら、私の顔を見て言ふ。

『誰れに？』と、聞くと、

『奥さんに。つひ、其處の山吹町の通りで。』

すると長田が、横合から口を出して、『僕が會へば好つたのに。……さうすれば面白かつた。ふゝん。』といふ。私は、それには素知らぬ顔をして、

『何とか言つてゐましたしか。』

『いえ。別に何とも。……唯皆様に宜く言つて下さい。』

すると、また長田が横から口を出して、

『ふゝん。彼奴も一つ俺れが口説いたら何うだらう。は、は、と、毒々しく當り散す。

それを聞いて、假令口先だけの戲談にもせよ。ひどいことを言ふと思つて、私は、ぐつと癢



に障つた。今まで散々種々なことを、言ひ放題言はして置いたといふのにお宮は何うせ賣り物  
 買ひ物の淫賣婦だ。長田が買ないつたつて誰れが買つてゐるのか分りやしない。先刻から黙つ  
 て聞いてゐれば、随分人を嘲弄したことを言つてゐる。それでも此方が強ひて笑つて聞き流し  
 て居ようとするのは、其様な詰まらないことで男同志が物を言ひ合つたりなどするのが見つと  
 もないからだ。

お雪は今立派な商人の娘と、いふぢやない。またあゝいふ處にも手傳だつてもゐたし以前嫁  
 いてゐた處もあんまり人聞きの好い處ぢやなかつた。あれから七年此の方、自分と、彼なつて  
 斯うなつたといふ筋道を知つてゐるが爲に、人を卑すんでそんなことを言ふが、假令見る影も  
 ない貧乏な生計をして來やうとも、また其の間が何ういふ關係であつたらうとも、苟めにも人  
 の妻でゐたものを捉かまへて、『彼奴も、一つ俺が口説いたら何うだらう。』とは何だ。此方で何  
 處までも温順く苦笑で、濟してゐれば附け上つて蟲けらかなんぞのやうに思つてゐる。いつて  
 自分の損になるやうな人間に向つては、其様なことは、おくびにも出し得ない癖に、一文もた  
 そくにならないやくざな人間だと思つて、人を馬鹿にしやがるなッ。

と、忽ちさう感じて湧々する胸を撫でるやうに堪へながら、向の顔を凝乎と見ると、  
 長田は、その淺黒い、意地の悪い顔を此方に向けて、じろくくと視てゐる。

『彼奴も俺が口説いたら何うだらう。』と、いふその暴け糞な出放題な言ひ草の口裏には、自分  
 の始終行つてゐる癩殻町で、此方が案外好い女と知つて、しごきなどを貰つた。といふことが  
 嫉けて嫉けて、焦れくして、それが其様なことを口走つたのだといふことが、明歴と見え透  
 してゐる。

さう思つて、また凝乎と長田の顔色を読みながら、自分の波のやうに騒ぐ心を落着けくし  
 てゐたが、

饗庭は先刻その長田の言つた言葉を聞くと、同時にまた氣の毒な顔をして私を見てゐたが、  
 二人が後を黙つてゐるので、暫時く經つてから何と思つたか、

『あの人可いぢやありませんか。……私なんか本當に感服してゐたんですよ。感服してゐたん  
 ですよ……』と、誰れにも柔かな饗庭のことだから、平常略ぼ知つてゐる私の離別に事寄せて  
 その場の私を軽く慰めるやうに言ふ。

『え、何うもさう行かない理由があるもんですから。』と詳しく事情を知らぬ饗庭に答へてゐ  
 ると、また長田が口を出して、

『ありや、細君にするなんて、初めから其様な氣はなかつたんだらう。一寸家を持つから來て  
 くれつて、それから、ずるくにあゝなつたんだらう。』と、



にべも艶もなく、人を馬鹿にしたやうに、鼻の先で言つた。

私は、成程、男と女と一緒にするには、種々な風で一緒になるのだから、長田が、さう思へば、それで可いのだが、饗庭が、假令その場限りのことにして、折角さう言つて、面白くも無い、氣持を悪くするやうな話を和げようとしてゐるのに、また面と向つて、そんなことを言ふ。何といふ言葉遣ひをする人間だらう！と思つて、返答の仕様もないから、それには答へず、黙つてまた長田の顔を見たが、お宮のことが忌々しさに氣が荒立つてゐるのは分り切つてゐる。さう思ふと、後には腹の中で可笑くもなつて、怒られもしないといふ氣になつた。で、それよりも寧ろ情氣た照れ隠しに、先達つての、あのしごきをくれた時のことを、面白く詳しく話して、陽氣に浮かれてゐた方が好い。他人に話すに惜しい晩であつた。と、これまでは、其の事をちびり、ちびり思ひ出しては獨り嬉しい、甘い思ひ出を歡しんでゐたが、斯う打ち壊はされて、荒されて見ると大事に藏つてゐたと詰らぬことだ。——あゝそれを思へば残念だが、何うせ斯うなるとは、ずつと以前『直ぐ行つて聞いて見てやつた。』と言つた時から分つてゐたことだ。と種々なことが逆上つて、咽喉の奥では咽ぶやうな氣がするのを静と堪へながら、表面は陽氣に面白可笑く、二人のゐる前で、前言つた、しごきをくれた夜の様を女の身振や聲色まで眞似をして話した。

## 男 清 姫



七月の初めのある暑い日であつた。加茂は、日光ゆきの車室の窓枠に肘を凭せて涼しい風に面を吹かせながら、青々とした田圃の過ぎて行くのを眺めてゐた。

避暑は、まだこれから始まらうとするので、二等室にはたと客が乗つてゐなかつた。赤帽が席を取つてくれたまゝに新型の旅行鞆と大きな信支袋とが塀をしたやうに、擴げて敷いた腰掛けの両端に置いてあつた。

今年は梅雨に雨が少くつて、例年よりも早く夏が襲うて來た。ひどい夏劣けをする彼は、六月の末時分から急に酷しくなつた暑さに驚いて、斯うして狼狽して都會を逃げだしたのである。北へ行く汽車には、彼は何年か振りて乗つたのであつた。加茂はそんなことを考へながら、かうして自由に旅をすることの出来るのを淡い心持で愉快に感じないでもなかつた。

彼は、汽車の中に腰を掛けてゐながら、遠くの方の山を見たり、大きな鐵橋を渡るのを子供のやうな心持ちで悦んだ。

宇都宮までは、烈しい太陽が正面に窓に射し込んでゐたが、其處を出て日光線に分岐すると汽車は段々深林に分けて行つた。嵐氣が肌に觸れて來た。霧のやうな細い雨が窓から吹込んで

冷々と顔を濡した。

やがて日光の停車場に着くと、單衣では寒さを感じるくらゐであつた。到頭雨が本當に降つて來た。加茂は又赤帽を呼んで、窓から二個の手荷物を受取らして、それを直に馬返し行の電車に運ばした。

電車は、神橋の處で、握り皮にブラ下るほど乗つてゐた満員の客を大方降して了ふと、倍々降つて來た雨の中を緩い勾配の道を辿りつゝ山を深くく上つて行つた。大谷川に沿うた兩岸の山々には濃い霧が濛々と立ち罩めてゐた。

加茂は、長い間寂寞には馴らされてゐるが、斯うして刺戟の多い繁華な都會を遁れて深く山の中に入つて行く自分を顧みて淋しさを感じずにはゐられなかつた。七月の初といふに、山上の僅かばかりの平地に切り開かれた畠にはまだ青麥が枯れたやうになつて立つてゐたり、豌豆が實つてゐたりした。

馬返して電車が無くなると、其處の休み茶屋に入つて遅い晝支度をして、泥鰯のお菜で硬い飯を甘く食つた。其處から手荷物を一臺の車に積んで、自分は二人挽に揺られて葛折りの二里の急阪を登つて行つた。

車夫は時々梶棒を停めて向の溪に懸つてゐる瀧の名を説いたり、華嚴の瀧の投身者の噂をし



たりした。馬返して一時止んでゐた雨が、またひどい勢で、深く生ひ繁つた林に音を立て、降つて来た。薄暗い山の中が倍々暗くなつて、寒さが肌に沁みた。暮れ方になつて中禪寺湖の畔に登り着いた。

二

加茂が、この夏中を此の山の中で暮すつもりでやつて来たのは、單に避暑を目的ばかりでなく、他に考へがあつた。彼は、出来るものならば、どうかして女といふ者を全く斷つて了ひたいと思つた。あらゆる愛欲の絶滅、若しそれが成就出来たならば、どんなに自分の心が軽くなるであらうかと思つた。彼はこれまで随分女に惱まされて来た。長い間の過ぎ去つたことを思へば始終女といふ者にばかり囚へられて生きて来たやうに思はれる。彼は、甘じてその誘惑に自分を委ねて安心してゐた時もあったが、よく考へて見れば見るほど男は何時でも女の爲にのみ心を勞してゐるやうに思はれた。女が彼の胸にその姿を宿す時、初は美しい形が後には皆妖魔に變化した。丁度戸隠山の鬼女が、次第に本性を顯はして来るやうなものであつた。それで、どうかして女といふ悪魔を頭の中から追拂つて了つたならば、さぞ氣が樂になるだらうと思つた。が、都會にゐては知ると、知らぬとに係らず、凡ての女は、そのあらゆる方法を用ひて常に

自分を誘惑してゐるやうに見える。道を歩いて、女は屢々神經を攪亂した。

それ故斯うして山の奥に逃げて来たのであつた。

けれども、それは矢張り彼自身を欺いてゐるに過ぎなかつたのだ。成程彼は既に長い間女の肉體からは遠ざかつてゐるが、頭の中には常に女の姿が宿つてゐた。彼は何様な女でも女を思はないではゐられなかつた。もし思ふべき女を持つてゐないと、寂しくつてゐられないばかりではない、思ふべき女を持たない時には世の中の觀る物聽く物に何等の感興がなかつた。

三

彼は實に女といふものに渴してゐるのである。けれどもそれほど女に渴してゐながら、彼は、新に現實の女を求めて、それに接近することを好まなかつた。女といふものに疲勞してゐる彼は、現實の女よりも空想の女を好んだ。彼が嘗て關係した女の事を想ひ浮べて過去の緊張した興味を追想することに於て女に對する渴を醫する方が、現實の女に關係するよりも遙かに自由で容易であつた。

今年の春、街頭の柳が青く芽吹いて、時々表を花電車の通る時分、十五六人の知人と銀座邊



のあるカフェーで一寸した晩飯の會食をした崩れに、彼はその中の二三人と最後まで附合つて、途中から雷門ゆきの電車に乗り換へた。

その夜多勢で戯談を言ひながら、何れでも可いと思つて見立てた遊女が、後に別室に入つてから横になりながら見ると、案外に派手な顔をしてゐた。彼等によくある血の枯れた寧ろ氣味の悪い容貌と違つて、頗の豊かな頭髮の房々した、色の白い皮膚の滑かな女であつた。

赤い太い房の附いた紐で吊した大きな衣掛けに擴げて打掛けた華美な友禪縮緬の長襦袢の模様、電燈の朦朧とした火影に浮いて見えた。

赤い裏の夜着が女の白粉の薫や香油の匂と融け合つて、異様な、男を誘惑するやうな匂ひを漂はせてゐた。それは伽羅を焚いて薫じた匂ひであつた。

「さうして静と寝ていらつしやい。一寸行つて来るから。」

と、いつて遊女が出て行つた後、彼は、強かその異香をかぎながら、柔い蒲團をすつぽり頭から被つて長い廊下の足音や、遠くの座敷でする騒ぎの三味線や太鼓の音を、靡爛した頭に聞くともなく聞いてゐた。さうしてもう遊女は歸つて來なくつても可いと思つてゐた。このまゝ翌朝まで何物にも妨げられずに熟睡したいと思つた。さうしてゐても矢張寢附かれぬ頭に、表を流して行く夜更の新内や淨瑠璃の三味線の音色が人を情けながらすやうに、もどかしがらす

やうに響いた。何事をも運に任せてこのまゝ斯うしてゐても好いといふやうな氣にならした。彼は堪へられなくなつて、むく／＼と蒲團の中から起き上つて、三階の廊下に出て下の方を眺めた。十二時過ぎの表の通りは、流石に森として、ぞめきの人脚も絶えた中を、何者の粹の果てか、夜更の寒さに三味を鳴して行く。加茂は五拾錢の銀貨を取出して、それを高い處から投げようとしてゐると、背後から、

「貴方何爲るの？」

遊女が部屋に戻つて來たのであつた。

「お止しなさい。ね、最う遅いから。」

翌朝目を覺して、面を洗つてから、煙草を吹かしながら、またよく見ると、遊女は、色の白い處に濃い柔い蠶のやうな眉毛をして、大きな島田に太い／＼樺色の手絡をかけてゐた。

彼は昨夜此の女を買つたかと思つたら、新に自分の生活の内容が一つ増したやうに思はれた。やがて其處を出て麗かな春の朝日を浴しながら淺草公園の方に出て戻る途中、とある牛屋に入つて清淨な朝湯に身體を洗つて朋友と話しながら、牛で酒を飲んだら食欲が稀しく進んだ。それから五六日立つて、冷い春雨の降る宵であつた。櫻花が咲き盛つてゐるのに春雨がしとしと降つてゐた。加茂は、その日一日何處にも出ないで、朝起きてから、また床を延べて安臥



してゐた。晩になつて家にゐるのにも怠屈したので、八時頃から先達て行つた遊女の處に一人で出掛けた。おばさんを相手に酒を飲んで冷くなつた身體を暖めようとしたが、どうしても暖くならなかつた。先達ての夜と違ひ家具が冷くつて、翌朝まで身體が暖まらなかつた。彼れ、それきり其處へは足を向けなかつたが、斯うして一人で山の中に来てゐると、矢張りさういふ處の華やかな夜の巷が思ひ出される。

それに就ても思ひ出されるのは、矢張りそれと同じ種類の女であつた。一體加茂は以前は、さういふ種類の女は餘り好まなかつた。それ故さういふ處へは自分から進んで行かなかつたが、どうかすると氣分の機會で四谷の先の方には出掛けたことがあつた。

それは今からもう十二年も昔になる。小さい家で三四度知つた遊女があつた。その後一度行くとそれが病氣だと言つて他の遊女が代つて出た。すると先の女よりも此度の女の方が好かつた。先の女は顔の青膨れた、氣の重い、それでゐて狡猾い女であつたが、後ののは血色の冴えた、身體の肉の引締つた、氣持ちの洒然とした女であつた。けれどもそれは其の時一度ぎりで、自分は間もなく何處かへ旅行してその夏中東京にゐなかつたので、そのまゝになつてしまつた。大分古い事だ。今頃は何うしてゐるだらう。

四谷の先にはその他にはまだ知つた女が二人ばかりあつた。それも皆古いことだ。さういふ

女がどうなつて行つたか、何だか彼等に對して罪惡を犯してゐるやうな氣がする。……遠く過ぎ去つたことがまた想ひ起された。

今年の五月瀬戸内海の方のある温泉場に行つた時、其處で遊んだ藝者は、白い柔い肉體をしてゐた。そこでは藝者でも二枚鑑札を持つてゐた。口元が變であつたけれど、目元のぼつちりした眉の柔かく濃い女であつた。その時東京に歸つたら何か送つてやると言つたが、そのまゝになつてしまつた。

四

それから彼はまた、矢張り今年の春關西に旅行した時、奈良に一晚泊つた時のことを想ひ出してゐた。

加茂は、關西線に乗つて汽車の窓から伊勢路から鈴鹿山の溪谷、伊賀國の平野、木津川の溪流などを眺めるのが好きであつた。その時はもう春の末であつたが、尾張伊勢の平野には菜の花が見渡す限り咲いてゐた。處々に暖い日が照つてゐるのに、薄曇りのした空から、しとくと微温湯のやうな春雨が降つてゐた。綺麗に揃つて濃く生ひ茂つた杉林の間々に切り開かれた山島に微かな日影が射してゐるのに向の方に群り聳えた鈴鹿山脈の峯々には白い霧が鎖してゐ



た。

「阪は照る／＼鈴鹿は曇る。あひの土山雨が降る」といふ唄は此處の古い街道の實景を諷つたものである。此處ら邊の自然くらゐ古めかしい懐しい情緒に富んだ處は稀れであつた。加茂は斯ういふ處を眺めながら奈良や大阪に行くのでなければ興味が十分に加はらなかつたのだ。加茂は昨夜の東海道の乗客と違つて、此の線路の乗客には、多忙な用事の爲に、東の大都會から、關西の大きな都會々々に旅行するといつたやうな人間は少なかつた。人の好さうな田舎の物持ちの夫婦づれだとか、大阪あたりの女達が伊勢參宮をした歸途だといつたやうな長閑な連中であつた。

彼は、昨夜東京を立つ時、ある若い友達が窓の外から贈つてくれた榮太樓の甘納豆を、漸つと落ち着いた気分になつて取出した。龜山驛で買つて伊勢路の番茶を啜りながら、それを少しづつ口に入れながら大阪の新聞を買つて讀んだ。四面を遠い山に取巻かれた伊賀の上野の平野には、暖い春雨が降つて、大きく伸びた黄白の菜の花がもう春雨に凋れかゝつてゐた。

加茂は昨夜の睡眠不足の上に暖かな陽氣に心地よい眠を催されて、廣々とした車席に横になつて空氣枕の上にごつすり寝入つて了つた。

轟といふ響に漸つと眼を覺されて氣が附くと、汽車はもう伊賀と山城の國境の險道を通過し

てゐる處であつた。それを抜けて出ると、汽車は忽ち人家の背後の岨道を直走りに走つてゐた。向の突兀たる山と山とを分けて木津川の清瀬が高い水音を立て、流れてゐた。大河原の驛を過ぎると鐵道は木津の溪の南岸に沿うた嶮峻な棧道に架つてゐた。奇怪な形をして岩石に塞がれた急湍深潭が、直ぐ眼の下を西に流れてゐた。加茂は北側の車窓に凭れて、其等の溪山を飽かず眺めた。その大きな岩の轉つた上を這つて帆網を引張つて溯つて行く川舟があつた。その川舟には蛇の目の傘を翳した男が、乗つて立つてゐた。春雨が西の方から細い糸を下げたやうに横さまに降り濺いでゐた。春雨に西の空から明い日が照つて、白く光つてゐた。

笠置驛を通過すると、溪流は次第に開けて、山と山との平地に麥の緑が畑つてゐた。やがて加茂と木津との二つの驛を過ぎると汽車はもう奈良に向つて行くのである。

加茂は名古屋で乗換へて、寛いで取り散かしてゐた荷物をこの時漸く形附けたり、帯を締め直したりした。

西の空を高く割つて懐かしい生駒山が春の末の強い西陽に眩しいほど黒く烟つてゐた。「あゝあの彼方には大阪があるのだ。」東の窓からはもう春日神社の濃い森や大佛殿の高い屋根などが見えて來た。彼はわけもなく胸の動悸が仕出した。

奈良の停車場の車夫は旅客を扱ひ馴れてゐた。彼は長途の汽車に乗り疲れた身體を車上に揺



られて奈良の街を眞直に奈良公園の方に走つて行つた。

猿澤の池の畔には、もう四月の末といふのに、淡白な山櫻が夕暮れの風に散りもせず、靜に薄暗の中に咲いてゐた。彼はそれをば恰も古い都の精のやうに思做しつゝ車の上から眺めた。折から南圓堂の方で御詠歌の鉦の音が滅入るやうに聞えてゐた。

車が、ある大きな門の内に入つて行くと、玄關の脇に寂しい、顔の色の稍蒼白い二十一二の仲居が膝を突いて待つてゐる。

「お越しやす。」

彼は久し振りに柔かな京阪の女の言葉を耳にしたのである。

仲居は、自分で持てさうな軽い蝙蝠傘と膝掛けを手に取つて、

「どうぞこちらへ。」といひつゝ長い廊下を立つて奥の方の廣間に客を案内した。

疊が古びて、ひどく荒れた座敷であつたが、廣い廻り縁などが附いてゐた。何百年の風霜を凌いで來たやうな大きな松の樹を取り入れた低い土塀を取巻いた庭があつて、斑入りの椿などが柴草の上に咲いてゐた。表の方の二階座敷で盛に三味線が鳴つてゐた。

「姐さん、好いねえ、あの音は。違ふねえ京阪の三味の音は。」

「さうおすか。」

「さうおすかツて、好いよ。東京のとは違ふ。」

「そりやさうだんな。此方のは調子が緩うおまうよつて。」

「さうさ、どうしてもあの音を聴いてゐると京阪に違ひないね。」

彼は、染々京阪に來たと思つた。もう慾も得もない、斯うして旅をして遊んでゐたい。さうして旅に死にたいと思ふ氣にさへなつた。

まだ少し早かつたから彼は直ぐ外に出て靜かな公園道を大佛殿から二月堂の方に歩いて行つた。嫩い色をした若葉の蔭にはまだ處々山櫻が淡白く咲き残つて、薄暗の中にほろ／＼と淋しく散つてゐた。二月堂の廊下に立つて西の方に遠く潤けた昔の皇居のあつた跡などを眺めた。さうしてゐるとまた春雨がザアと若葉を叩いて落ちて來た。見る間に遠くに黒く聳えてゐた生駒山の輪郭が白くぼやけた。近くの眼を壓するばかりに茂つた若葉から白い潮吹が立つた。

加茂は春雨に濡れつゝ清淨な砂混りの道を歩いて戻つて來た。

風呂に入つてから、夕飯の膳に向つた。鯛の刺身、蟹の具足煮、白い蟹の身の上に大きな山椒の芽が匂うてゐた。

「姐さん酒を一つ持つて來て貰はうかねえ。」

加茂は酒を飲む氣になつた。



「姐さんは美しいねえ。藝者してゐたの？」

「まあ……私のやうな者にそんな氣の利いたこと。出来しまへん。」

物をいふ拍子につつと後に反つたやうにして笑つた。

「さうぢやない。全く藝者のやうだ。」

「よう云はゝる。」

「姐さん、もう一旦嫁に行つたの？」

「まだ行きしまへん。」

「でも、もう行く時分だらう。」

「私達貧乏やさかい。こんな商賣してゐますと、目が高うばかりなつて、嫁に行けしまへん。」

彼は、いろ／＼な話を續けて一本の酒を長く飲んだ。

さうして強か酔心地になつて繪葉書などを書いた。春雨は強い音を立て、降つてゐた。その中を彼は傘を翳して運動かた／＼郵便局まで入れに行つた。その歸途にネーブルを袂に入れて戻つた。

「姐さん、ナイフを貸しておくれ。」

仲居は盆にナイフを載せて持つて來て、それを輪に切つて、皮を剥いて一つづつ差出した。

「姐さん一つお食べ。」

酒の後の渴いた口に滴るネーブルをくみながら、彼は言つた。

「えゝ。」と、言つたが食べはしなかつた。矢張り輪に切つては皮を剥いて差出した。

「姐さん、名は何といふの？」

「お菊」

その夜、加茂が床に入つてからも、お菊は脱いだ物など疊みながら、其處で話してゐた。

翌日出立の支度をしながら、

「姐さん、どうだ。東京に行かうぢやないか？」

と、いふと、

「私、東京に行きたうて行きたうて仕様がおまへんのや。」飛び立つやうに微笑して言つた。

「東京は好いよ。」

「さうだしやる。東京の人は皆好い、いゝまん。京阪の者は皆そりや不人情やけど。……私三十になるまでにはどないにしても一遍東京に行かんなりません。」力を込めて、無邪氣に言つた。

「三十になるまでには心細いぢやないか。今行かうよ。……僕これから大阪の方に行つて歸途また寄るから其の時一緒に行かう。」



「え、どうぞ。」

出立の用意は出来た。

「姐さん、此處の家から生駒山がよく見えるか。」

「え、よう見えまん……あつちの三階から尙ほよう見えまん。あつちお越しやして。」

さう言つてお菊は、西南に向つた高い三階の廊下へ案内した。

其處から郡山の方の田圃が遠く春霞に烟つて見えてゐた。

「彼方の遠い處に赤い煉瓦の大きな工場見たいな處が見えますやろ。彼處が郡山だす。」

お菊は指しゝて教へながら、自分も遠くの方を恍惚として眺めてゐた。白い耳の處に銀杏返

の鬢のほつれ毛が、明けた硝子戸の間から微々と吹いて來る春の風に揺れてゐた、加茂が、そ

れを、横から静と竊見するのも知らずにお菊は何時までも眺めてゐた。女は何といふ人を魅す

る生物だらう。

五

それから間もなく加茂は、湊町ゆきの汽車の窓に凭れて舊跡に富んだ西の京の田圃を眺めてゐた。春の草に埋れた野川の岸には名の知れぬ黄色の花や紫の花が咲き溢れてゐた。昔の大極

殿のあつた跡のあたりの田舎の村々にはもう強過ぎる程の春の目が高く伸びた青麥の野に照り渡つてゐた。日高を掬ふ里の子供が、小さいお尻を捲つて田の畔を驅けてゐた。それが汽車の來たのを見て「わあア！」と言つて箆を持った手を舉げた。

加茂は微眠くなつて、車席に横になつた。彼は目を瞑りながらこれから湊町に降りることを考へて空虚な感に襲はれてゐた。湊町の停車場から難波新地は直ぐ一と跨ぎの處にあつた。彼は今斯うして丁度半年ぶりて大阪の地を踏むのである。去年の十月の末難波新地の女とは、半月ばかりのつもりで東京に歸る時別れたのがそのまゝに永い別れとなつてしまつたのであつた。堅く末を約束してゐたその女は、加茂が東京に歸つてゐる間に身を落籍して何處ともなく姿を隠して了つたのである。それを、彼が毎時行き附けの大阪のお茶屋の主婦からの報知で知つた時には、どんなに失望と悲憤と寂寞とに身を苦しめたであらう。女は東京から遠くない處の山國の産れであつたがいろ／＼な土地を流れ／＼て到頭大阪迄行つて身を賣つてゐたのである。卑しい勤めの女であつたが、加茂にはひどくその女の性質が氣に入つてゐた。縹緞もさう悪くはなかつた。目鼻立ちのはつきりした色の蒼白い寂しい女であつた。

暫くと思つて遊びに行つてゐたのが、その女に引掛つてから、一年の間大阪の土地に足を止めてゐた。けれどもその女が大阪にゐなくなつてからは、彼は東京に歸つたきり、また急いで



大阪に戻つて来る氣はそれきりなくなつたのだ。

一と月餘り経つてから、女は男と一緒に臺灣に行つてゐることが、その女の姉の處に來た手紙で分つた。姉は、その不幸な妹の爲に、わざ／＼田舎から東京に出て來て加茂の處を訪ねて、女の行末を頼んだのであつた。その事があつてから間もなく女が大阪にゐなくなつたといふことが加茂の處に知れたのである。加茂はその報知に接すると自分で田舎の姉を訪ねた。姉は妹の爲に、加茂は愛してゐた女の爲に額を突合せて、行つた先きを想像して見たのであつた。

それが臺灣までも行つてゐると分つた。姉の處に手紙を寄越してから後、加茂の處にも時々手紙をよこした。それには加茂との約束に背いたことを詫びたり、今の男とは、ほんの金の義理に迫られて來てゐるのだから、長く臺灣などにゐるつもりはないと言つたり、其處は不自由な土地だから楽しみがない、少しも早く東京に歸りたい。と、言つたり種々自分の身の不仕合せなことを溢して來てゐた。

加茂は、さういふ手紙の來る毎に、新らしい妬みや憎しみの湧き上るのを覺えた。さうしてその裏面には新らしい晴天や未練や愛着の情が簇り起つた。

「……主人の寝てゐる間に認めました。」といふやうなことが手紙の中に書いてあつた。すると、寝るといふ文字が電氣の如き鋭さと迅

さとして加茂の胸に忌々しい聯想を呼び起さした。

さうして男が寢入つてゐる間、女が夜遅く起きて手紙を書いてゐる有様が眼に浮んだ。男は歡しい期待を以つて、最後に女を獨占したといふ意識の中に安らかに寢床に横つてゐるであらう。手紙を書き了つた女は、やがて靜に寢仕度をして、枕頭の燈を細めながら、その傍に秘と身體を横へるであらう。

加茂は、それを明歴と想像に描き、幻影を見詰めて、強ひて求めて厭な感覺に苛責されてゐた。忌々しい刺戟によつて胸を衝き詰めては、不健全な快感に耽つてゐた。

女から、「貴郎の深きお情けは永く忘れはいたさず候。」といふやうなことを手紙に書いて來ると、

「いくら俺のことを忘れないと言つたつて、現在お前の身體が、そちらに行つて他の男の自由になつてゐる以上は、おれは少しも嬉しくはない。」といふやうなことを書いて送つた。

それでも女からは、毎時も素直な手紙を寄越してゐた。加茂は、「お前のやうな女は、俺がもし無教育な人間であつたら屹度殺される女だ。」とも書いてやつた。彼は、實際女を殺すことを考へて見た。女を殺してゐると、その間だけは胸が清々した。



獨り寝の夜半に眼が覺めてどうしても寢附かれない時など、彼は寢ながら消したり點したりすることの出来るやうにしてゐる直ぐ頭の上の電燈を捻つて、手近の祕密函の中に收めてある女の手紙を取出して何度も読み返すことがあつた。さうしながら、遠くの方に自分を騙して黙つて行つてしまつた女が、今時分、男と二人でどうしてゐるだらうといろ／＼な場合を暗黒な中に描き出しては瞋恚の炎に胸を焦してゐた。

さうして彼は女のことを想はうとすると、何よりもその多い黒い房々とした頭髮が眞先に眼に浮んだ。暫時の間なりとも自分の花にして眺めて遊んでゐた時、自分はどんなにかこの黒い髪を愛してゐるのだらうと、胸の中で思つて見てゐた。やがて全く自分の獨占にしてしまつたらその時は尙ほのこと此の髪が好くなるだらうと思つてゐたのであつた。自分の所持してゐる何物よりも此の髪を大事にかけて愛撫しなければならぬと思つてゐた。あの頭髮は、自分を現世に繋ぐ生命の綱であつたものを。それが今他の男の寢床の上に縦に亂れてゐる。さう思ふと、彼は眞夜中に居ても起つてゐられないやうに神経が昂奮して來て、翌日になつたら、どんなにしても工夫して臺灣まで出掛けて行く計劃しよう。さうして向に行つて、あの頭髮を根元から斷ち切つて持つて戻つてやらう。せめてあの頭髮を切取つて來て、それを毎日見てゐたら好い心持になるだらう。どんな犠牲を拂つても屹度さうしよう。

そんなことを次から次へ夢想しながら寢床の中に眼を覺してゐることが稀しくなかつた。けれども一旦夜が明けると、眞夜中の妄想は明るい晝の光の中に消え失せてしまふのである。けれども女のことを少しも思はずにはゐられなかつた。深く胸の底に絡り附いた女を、去る者は日に疎し。といふ世間並の人情に委せて忘れ果て、しまひたくなかつた。忘れてしまふことの出来るほどならば、何も一年の間あの女の爲にあんな苦しい思ひを辛抱するのではなかつた。忘れてしまふには惜いほど愛着してゐた女であつた。

それに女は、薄情なことを仕向けたつて、追驅けて來ることの出来ぬ遠方に行つてしまへばいくら男の方でやき／＼焦れたつて、どうすることも出来はしない。その内月日の立つ間には忘れてしまふ。斯う思つて多寡を括つてゐるのだらう。

さう考へると、意地になつても何時までも新しい心持で女を憎んでゐてやらう。斯んことを思ひ返されてゐた。

加茂はその女の爲に方々に不義理を重ねたり、自分にも、馬鹿らしいほど不自由な目をして一年の間大阪を去ることが出来なかつた。そんなことまで女には解つてゐなかつた、それだけの埋め合せをしなければ、どうしても腹の蟲が収まらない。

手紙によると、女は一年か半年をたら歸る、自分とて臺灣のやうな處に永くゐる氣は少しもな



いと、言つてゐる。どうかして呼び戻すか、それとも自分が出掛けて行つて、怨みのたけをいふか、兎に角その女の事に拘つてゐるのが、差當つて、自分の生きてゐる理由である。假ひ怨むにもせよ、慕ふにもせよ、自分は今好きな女の事を思ひ詰めてゐる。思ひつめてゐればこそ、其處に自分が生きてゐる證據である。それを除いて世界の何物を持つて來ても一切自分とは無關係である。

大阪に行つたつて、もうその女はゐないのだ。けれどもその女の居た土地は懐しい。燈火の明かな美しい化粧をした女の往來ふ花街に行つて、せめて女と遊んでゐた時分の緊張した心持に浸つて見たい。餘處の座敷に行つてゐるのを貰ひをかけて此方に横取つたり、夜更けて待つても待つても來ないので不安に驅られながら待ち疲れてゐると、漸つとのことで十二時過ぎになつてから來た時の嬉しさ馬鹿らしい苦勞をする代りにはその苦勞を忍んで餘るほどの歡樂があつた。

いつぞや夏の夜更けのことであつた。宵から返事を出して待つてゐても、今行つてゐる座敷が十二時までになつてゐると言つて、遅くまで來なかつた。彼は待ちあぐねて、何度も外に出て花街を歩いて見た。綺麗に整つた軒並の貸座敷に明るい燈が點つて、狭い通に向き合つた二階座敷の簾に涼い風が流れてゐた。大阪の難波新地の夏の夜ほど華かな處はない。派手な長襦

袴の裾を端折つた藝者や遊女は皆表に出て扇子でバタ／＼胸のまはりを煽ぎながら、お座敷のかゝつて來るのを待つてゐた。

加茂は、二階の縁側から簾をあげて、いつまで人通りの絶えない街を眺めてゐた。餘處のお茶屋に送られて行く女は幾人も其處を通つて行つた。段々人足が薄くなつて、やう／＼花街が靜になる時分になつてから、彼が下の通りを見てゐると、女は、いつもの男衆と肩を並べて此方に歩いて來てゐた。女は歩きながら、懷紙を取出して口元を拭いてゐた。彼はそれを見て「ああ來た」と思つて、すぐ引込んだその時の女の姿も眼に残つてゐる。さういふ高潮した心持には再びなれないのだ。その他、いろ／＼な場合があつた。

身を引く時には、彼が常に呼びつけてゐたお茶屋へも顔出しもしないで行つてしまつたといふことだ。その主婦は彼等の爲に屢々どんなにか心を盡したであらう。彼は、せめてその主婦に會つて、去つて行つた女のことを話しもし、聴きもしたかつた。さう思ふと少しも早く湊町驛に行きたかつた。彼は汽車の中に横りながら、強く記憶に残つてゐる甘い思出を繰返へしてゐた。



半歳ぶりて河半の入口に立つた時には、加茂は流石に胸の躍るのを覺えた。

「まあ、若旦那が來やはりましたで。お久しおます。」お芳がゐて、奥に聲をかけた。

主婦は晝寢をしてゐた奥の間から起きて來た。

「まあおめづらしいこと。あれからずつと東京だつたか。」

「去年の秋歸つたきり、一昨日の夜、東京を立つて來たのさ。」

「さやうか。まあ若旦那には申譯けのないお氣の毒なこと。勝山はんが落籍いた時、私どう手紙を書いてえ、か。書けんいうたら主人で、どうもありのまゝを書いてやるより他にどうも仕方がない。というて、あゝ書いてやりましたが、自家でも若旦那があの手紙をお見やしたら、どないにびつくりしやはるやういうて、いろ／＼噂してゐましたんや。」

「いや仕方がない。彼奴に騙されたのが私の修業がまだ足らぬのさ。」

「騙したといふわけもおますまいがな。私の處でも他に人があつて、自前になつてゐるといふことちつとも知りまへんもんやから。」

「兎に角彼奴利巧な奴だ、よくも騙しやがつた。そんな奴だから尙ほ自分の物にして置いて見なかつたんだが仕方がない。」

「なんでもその人といふのは、始終船に乗つて貿易とかをする人やさうだす。それで今一緒に

臺灣に行つてゐるさうだす。」

「うむ、それは僕の處にも手紙を寄越すから知つてゐる」

「それも、なか／＼何處へ行てゐるか分らなんだのを、いろ／＼虎どんをせめたら、分りましたのや。あの虎どんの奴が憎らしい。あれほど若旦那に氣を付けて貰て居りながら、少しもさうさふことを話さんから。」

「もう幾許言つたつて駄目だ。が、彼奴に本を預けて置いた筈だが、なかつたかねえ。」

「それは自家に取つておきました。」と、いつて主婦は奥に行つて一冊の洋書を取つて來た。

「さう／＼え、物が入つてゐますで。」と、言つて主婦が渡した本の間に女は寫眞を一枚入れてゐた。

加茂は、その寫眞を見ると、ぼやけかけてゐた記憶が再び明に浮んで來た。さうして旅をするにも毎時其寫眞を鞆の底に秘めてゐた。旅寢の寂寞に耐へかねては其寫眞を取出して飽かず眺めてゐた。

中禪寺の湖水の畔に遠く都會の喧騒を避けてゐても、深く彼の胸に喰入つたその女に對する執着と怨恨とは、どうしても拂ひ去ることが出來なかつた。記憶は記憶を追うて、強く甘い愛着の情に心を悩ました種んな場合が、今となつては懐かしく想ひ回された。



もう一度あゝいふことがあつて見れば好いと思ふことさへ多かつた。まだ去年の九月、その女に心惹かれて東京に歸ることが出来なくて、攝津の有馬に逗留してゐる時分のことであつた。九月中ばのある日朝起きて見ると、この間中二三日濕り勝ちであつた天氣が、拭うたやうにカラリと晴れて、青く透き通るやうに澄んだ大空には、千切つたやうな眞白い雲が靜に浮いてゐた。その空にも、空を劃つて直ぐ眼の前に聳えてゐる、枝振りの面白い松の生ひ茂つた山にも、麗かな太陽が美しい光を浴せてゐた。

彼は楊枝を使ひながら、縁側に立つて稍々暫くその秋らしい空の色に見惚れてゐた。つい二三日前までは空氣の肌觸りにも、まだ何となく夏らしい心持が残つてゐたのだが、僅に二三日の雨を通り越すと、もう何も彼もが秋の色に充ちたやうに思はれて來た。貸し浴衣の寢衣一枚では寒くつて耐忍が出来ないくらゐであつた。

そんな快い天氣になつて見ると、彼は、靜としてはゐられなかつた。それに最早半月ばかりも温泉宿に籠居してゐるので、近くの散歩する處は見て了つたし、今に來るか／＼と待つてゐる女は來ないし、山の上の方の高い美しい秋の空を見るにつけて、彼はわけもなく唖られてふらふらと、その山の彼方の大阪に行きたくなつた。大阪の女の處に此方から出掛けて行きたくなつた。一旦さう思ひ染めるともうその氣になつて了つた。

さうして朝飯を済すと、直ぐに支度をして大阪まで出掛けた。彼は女とお茶屋の主婦とへの土産に女中に急いで取つて來させた炭酸煮餅を提げてゐた。別荘の庭にはもう木犀の花が、濕つた土の香に交つて蕭やかに匂うてゐた。彼は、その一枝を取つて嗅ぎながら、帽子の鉢巻に挿した。

有馬から大阪に出る六甲山の山道は眺望が好かつた。雨上りの松林に臭い強い土の熱蒸がしてゐた。爽やかな空氣の肌觸りを覺えながら彼は樹蔭の道を俥を走らせた。

裏道から見た六甲山の背面は、赭土色をした山の地膚が、痛ましい傷痕のやうに生々しく露はれてゐた。雨水に洗ひ削られた赤土の岩が巨人の鋒のやうに幾つとなく聳立つてゐた。その下には深い谷が抉つたやうに掘れてゐた。阪道はその大きな溪谷に添うて下つてゐた。

彼は好い心地で身體を俥が運んで行くのに任せながら、凝乎と眼を瞑つて、これから女に逢ひに行く楽しみに伴ふ種々の心元ない空想に囚へられてゐた。

「かうして有馬の山の上から、わざ／＼大阪まで出て行つて、好い鹽梅に女は家にゐるだらうか。」かういふ心配があつた。

女はよく賣れる妓であつた。二三日前に電話を掛けて、來るのか來ないのか訊ねた時に、そんなに來なければ此方から出て行かうかといつたら、「待つていらつしやい。私行くから。」と言



つた。今日来るとは思つてゐないだらう。来るといふから、抱への妓が三四日他處行きの出來るだけの錢を送つて遣つたのに、病氣をしてゐたとか、癒つたけれど、家で遠出を許さないから樂花で馴染の客の處へ遊びかた／＼行つてゐるとか言つてゐた。そんなに樂花の座敷が勤まるくらゐなら、錢まで送つてやつてあるのだから、保養かた／＼出られぬわけはない筈だ。そんなにして稼業を休んでゐるのに出るほどの馴染の客といふのは、どんな客であらう。そんな客に出るほどのなのに、自分の處へ來ぬといふのは、どう考へても解らない。

さう思つて來ると、彼は一刻も早く大阪に行つて、今日直ぐ、自分の言ふことを承知させて、晩の汽車で、いくら遅くなつても有馬に連れて歸らう。——空想と不安とが躍る胸の中に果てしもなく往來した。

さうして漸つと大阪行きの停車場まで山を下りて來ると、急いで電報を難波新地のお茶屋にあて、打つた。

有馬ではもう私が來たと思つてゐたのに、大阪に來ると、まだ夏らしい乾燥いだ光が疲れたやうな街區を照してゐた。

午後のお茶屋は静寂としてゐた。彼は「御免なさい。」と聲を掛けながら上つて行つた。長火鉢の傍には誰れもゐない。奥の主婦の居間に主婦の妹お芳さんが一人晝寢をしてゐた。後は突

立つて柱時計を見た。急いで來たほどあつて、まだ二時を少し過ぎたばかりであつた。

「早かつた。これなら屹度何處にもゆかないで居るに違ひない。」と、思つて安心しながら、「お芳さん／＼！」お芳の枕許に寄つて行つてお芳を呼び起した。

お芳は漸く寢呆けたやうな顔を擡げて大きな欠伸を一つした。

「お越しやす。」

「お芳さん、電報を打つたが、來たか。」彼はお芳の落着いてゐるのに、そろ／＼焦れながら何より先に訊いた。

「え、まゐりました。」

「何時頃着いたかね？……さうして最早あちらへさう言つてあるの？」彼は疊掛けて訊ねた。

「え、もう一時間ほど前でしたな。すぐ店の方へさう言つて置きました。五時までになつてゐますよつて、明き次第送りますいうてゐました。……今日有馬からだすか、若旦那。」

お芳は、漸つと長火鉢の處に起きて來て、長煙管を吸ひ附けた。

「今日、おかみさんは、どうして？」彼は薄暗い家の中を見廻しながら訊ねた。今時分ならば、屹度直ぐ出來ると思つた女が、晝間から他へ花に行つてゐるので、喪失したやうになつて、毎時のやうに主婦がちゃんと長火鉢の向に坐つてゐて、さういふ時に何とか斯とかお世辭よく氣



安めを言つてくれないのが一層物足りなかつた。さうしてこの間中病氣をして休んでゐるとか、樂花らくなはなに行つてゐるばかりだとか言つてゐたのだが、今時分花に行つてゐるとすれば、屹度その馴染の客の處に行つてゐるに違ひない。

さう思ふと、一刻も早く、自分が遠くの有馬からわざわざ出て来たことを行先の女ゆくさきに耳入れして、向の座敷を外はずさせたかつた。

「姉さんは、今日宅の方に行つてゐます。もうやがて三時です。もう二時間と一寸です。お二階に上つて少しお休みやすな。」

お芳は、時計を見上げながら言つた。

彼は、いはれるまゝに二階に上つて行つて、後からお芳が入れて来た茶を飲んだ。

「暮までになつてゐますさうやけど、もう一遍電話をかけて見ませう。」

お芳は降りて電話を鳴してゐた。彼は酒卓に眩くらを突いて階下したの話に耳を立てゝゐたが、よく聴き取れないので、階段の降り口の處まで行つて上から覗いた。

「……暮までになつてゐるのやな。暮まで屹度此方へ貰うておくれやす。屹度だつせ。……ようおます言うて、本人に耳入れしてくれたんだすか。耳入れ、まだしえへんのやろ。これから直ぐ本人に耳入れしておくれやす。……有馬から若旦那がお越しや言うて頼みますで。」

お芳は、くどく念を押して置いて、電話を切つた。彼は降りて行つてお芳の背後うしろから電話の話を聞いてゐた。

「まだ今まで耳入れしてゐなかつたんだ。私が出て来てゐるといふことを、本人に知らすやうに、よくさう言つてくれたでせう。店みせで直ぐその通り知らしてくれ。だらうねえ。……一體今日は早くから何處どこへ行つてゐるんだらう。」彼は後あとを獨言ひとりごとにいつた。

さうしてまたしても種々な不安と疑惑とに襲はれた。

錢まで送つてやつて、受取つたことをも電話で話してゐながら、有馬へ來ぬのからして不都合だ。夏から、あんなに連れて行つてくれ、連れて行つてくれと言つて置きながら、今よろこに悦んで來るだらう、來たら二人で顔を見合はしてどんなに嬉しがるだらう。と、そんなことばかり考へて待つてゐたのに先達中さきだちのやうに、そんなら進んで行かうとも言はなかつたのが不思議だ。病氣で座敷を斷つてゐて、馴染の處へだけ遊びながら樂花で行つてゐるほどだから、丁度有馬に來れば好いいわけだ。それにも係らず來ないのが氣に懸る。今に來たら、その理由わけを糺して、うんと脂を擽つてやらねば澄まぬ。……

こんなことを考へながら、彼はまた二階に上つて来て、兩手を枕にして仰けに横になつた。仕方がないので五時までは待つてゐなければならなかつた。



その内に主婦も歸つて来たと思はれて、階下で聲がし出した。夕方近くなつて花街に人の出入が繁くなつたらしい。

彼は暫くしてまた長火鉢の傍に降りて行つた。やがて暮近くなつたので、此度は主婦が直ぐ頭の上の電話口に立つて暮までの駄目を押した。

彼は二時から待ちあぐんで、漸つと五時近くなつた時計と主婦の電話口の交渉の有様とを交る交る見詰めてゐた。

「そねえなことを言うたかて、今日既う一時からさう言うたあるやのないか。暮までになつたるいふことやつたから、そんなら暮には屹度貰うとくれやすとくれづも頼んで置いたんやないか。……六時には屹度貰ふとくれやす。」

主婦は強く言つて、電話を切つた。

「六時まで……もちつとの間や。辛抱おしやす。」

その一時間が、彼には待遠しかつた。

外は七五夜でぞろ／＼とぞめき足音が續いた。花街には最う軒々に明るい灯が入つて、美しい夕化粧を凝した藝者や遊女が男衆と肩を並べて送られて行つた。涼しい風が單衣を着た肌にもう冷たかつた。

河半の店にもそろ／＼客があつた。電話の鈴が忙しさに鳴つた。柔かい調子の藝者が「今晚は」と明るい長火鉢の前で主婦に一寸挨拶をして直ぐ二階に行つた。お芳や仲居は黒光りのする箱段を急しく上つたり下りたりした。間もなく三味線や太鼓が鳴り始めた。

主婦は、彼がさ／＼待遠し／＼にしてゐるのを見かねて、暮後の催促をした。電話の返辭は、また延びた。

「餘程大事なお座敷だすのやらう。」とお芳は考へたやうに言つた。

それが、今心細くなつてゐる加茂の胸に響いて一層心元ながらした。

「大事なお座敷つて、一體どんな客なんだらう。」彼は獨言のやうにいつて首を傾げた。

長火鉢の傍は忙がしかつた。主婦は向側に坐つて徳利を銅壺に漬けてゐた。仲居は爛の出来たのに鯛煎餅の炙つたのなどを持ち添へて上つて行つた。後から来た客の註文はどん／＼出来た。送られて来た藝者はバツと媚びるやうに匂ひをさせながら加茂の鼻の先を通つて二階に上つた。

「今日は一時から、さう言うてあるのに、今になつても貰へんいふのは、これは何かわけがあるに違ひない。」主婦は徳利を漬けながら加茂の顔を見ていつた。

「向のお茶屋に行つて、本人に耳入れをしてゐないんだらうと思ふ。勝山に私が来てゐること



「が知れれば、何とかして貰つて来ないわけがない筈だ。」

勝山に錢を送つたことは、河半の主婦には内證であつた。河半からでなく、勝山の自分花にして有馬に来る約束が加茂との間にしてあつた。それは二人とも河半には言はぬことにしてあつた。

それを全然話してしまつた。

「さういふこともあるのだから、私が有馬から出て来たことが勝山に知れれば、何とかして貰つて来なければならぬのだ。」

「左様か。まあ貴郎方二人の仲にどんなことがあるか、私知らんけど。」

七

その内八時が来た。主婦はまた電話口に出て催促をした。虎どんが起きて来たから、今虎どんが向のお茶屋に勝山を迎へに行つてゐる。歸つて来たら直ぐ送らす。といふ返辭である。

「もう来ませう。」主婦が言つた。

加茂は楽しい不安に襲はれてゐた。

八時を過ぎて三十分も待つたが、それでもまだ来ない。

「どうしたんだらう？」加茂は時計を見ながら呟いた。

「本間にどうしたんやろなア」主婦も呟いてまた電話の鈴を鳴した。

今歸つた處だから、これから其方へ行くといふ返辭である。

暫く待つてゐる處へ虎どんが、遣つて来たが、勝山は見えない。

「まあ虎どん、勝山はん、どうしてくれるんや。」主婦もお芳も口を揃へて、いきなり極めつけた。

「私ももう困つてしまひました。」

虎どんは、苦しきうに太息を吐きながら言つた。

「勝山はん、何處にもゐやはりやへんのです。」呼吸が急いで虎どんは言葉も切々である。

今まで好い加減落膽してゐた加茂は、それだけ聞いて、ワク／＼動悸が打ち出した。

「何處にも居らんいうたかて、そんな事あるもんか。今日晝から、もう何度電話を掛けてある。

あんた居らんから知るまいが、耳入れをしたかいへば、したいふし。今にも貰うて来るやうな

ことをいふといて、どうしてくれるのや。若旦那今日、有馬からわざ／＼出て来てゐるのやな

いか。」暫時呆れて黙つてゐた主婦は、斯う言つた。

「あゝ、お越しやす。」虎どんは、初めて氣が着いて加茂の方に頭を下げた。「いやもう、それは何といはれましても仕様がおまへん。私、今日寢番だしたよつて自家に行つてちつとも晝の事知り



「ませんもんやから。漸つと少し前店に来て河半から勝山さん事で、これ／＼やと他の者に聞き  
ましたから、心當りを探しても、何處にもゐやはりへんのだす。」虎どんは、汗ばんだ額をして  
只管謝つた。

「あんだ、そりや晝の事は知らんのは無理はないやろけど、店の人が不都合やないか、今にも  
出来るやうなことを言うて、晝から客に待たして置いて、九時になつて今更本人の行つて居る  
處が分らんいうて、私の處で客に濟まんやないか。」

「御尤もだす。そやから今晚の處は私に免じて勘辨して頂きます、へえ。」虎どんは、頗に主婦  
の前に頭を下げた。

男衆の言ふことには問ひ詰めてゐると、どうしても辻褄の合はぬ處があるけれども、兎に角  
勝山は午前からブラリと一人で店を出たきり、まだ歸つて來ぬといふのであつた。

それで二時から今まで店から電話で返辭をしてゐたことはまるきり嘘であつたことだけは分  
つてしまつた。加茂も主婦も疑惑に鎖ざゝれて顔を凝乎と見交はしたが、さうかといつてどう  
することも出来なかつた。本人が居なくつて、加茂の來てゐることを、てんで知らないのであ  
つて見れば、勝山を責めることも出来ない。けれども疑へば疑へないこともなかつた。加茂は  
惚れ抜いてゐる女の來ぬのに、いはうやうもない失望を感じたけれど、何も彼も虚偽でばかり

表面を繕つて居る此の社會の、その嘘が何處まで達いてゐるかを探つて見たいやうな興味が起  
つて來たのであつた。

「午前から一人で出たつて、それにしても今時分まで何處にウロ／＼してゐるんだらう。第一  
店でも大切な抱妓を放つて置くわけがないな。」

「それとも活動寫眞でも見て居られますか。」虎どんが言つた。

「阿呆らしい。何ぼ活動寫眞が好きやかて、午前から夜の九時も十時までも見てゐられますか  
いな。虎どん本當の事を聞かしてくれやす。何處に行つてるのや。」主婦は賺かすやうに言葉を  
静にして訊ねた。

「本當に知れまへんのや。それが知れてくるらゐなら、斯様なに困りやしまへん。」言葉に力を  
入れて斷言した。

すると、店から虎どんが行つてはゐませんか、他に用が出來たから直ぐ歸るやうに言つてく  
れと電話が掛つて來た。

「まあも少し探して見ます。……私も他にも用がありますさかいな。……勝山はん、ほんとに何  
處に行つたんやろ。私一人難儀や。」

獨小言を言ひながら、急がしさうに歸つて行つた。



九時が過ぎ十時も過ぎたけれど、そのまゝ虎どんは顔を出さなかつた。加茂は頻りに焦れつたが、暫くしてお芳は電話で何度めかの催促をしてゐたが、氣の無い顔をして、

「まあ姉はん、店ではなあ、勝山はんは、先刻虎どんが、あなたの處に斷りに行つた筈やがいらてるんだつせ。今晚は勝山はんはお斷りしますいうて。何が何やら、ちつとも分りやへん。」

「斷りに？……それでは先刻虎どんか來たのが斷りに來たのやつた。それを、あの男、人が好いもんやさかい斷るいふことを、よう言はんのや。」

主婦はさう言つて加茂の顔を疑はしさうに見た。

「こりや矢張り勝山はん何處へも行つてへん。何處か其處らのお茶屋にゐるんや。今晚は斷るといふのは本人のいふことや。何か此には譯があるに違ひない。」

加茂は氣が急けて來た。

「さうだらうか。……しかし本人がゐるとすれば、さういふわけは無い筈だがなあ。そりや此方が騙されてゐるのかも知れないけれど、今も言つたやうに金も大分渡してゐるし、まさか本人がゐて、さういふんぢやなからう。」

加茂の胸は千々に掻き亂れた。

「さやうか。そりや賣下方二人の間にどんな事があるか、私の方ではよう知らんけれど。」

あなたまたどうして遊女に金を渡したりしたんや。」

「まあ可い。その代り、本人から斷るといふのだつたら、もう彼奴とはこれきりの縁だ。」

「まあもつと待つて見て、まだ十時やさかい、あの女に限つたことはない、あれがどうしても來なんだから今日は他のを呼べやえ。えゝのが、なんぼでもあるさかい。」

「いや、もし來なかつたら、今晚は二人で泊めて貰ふ。その代り後て仇を取つて遣るんだから」

加茂は、勝山と自分とを主婦が譯もなく言つてゐるやうに、唯普通の仲と思ひたくなかつた。

「そやけど本人が留守で知らんやつたら、本人に罪はないもの。」

「虎どん、どうしたんやなあ。勝山はんは。」表で外を通る客を呼んでゐたお芳が呼び掛けた。

男衆の虎どんがまたやつて來た。

「私困つて了りました。何處を探ねてもどだいなやはりしまへんのや。」太息を吐いて言つた。今が一番忙しい時刻と思はれて、汗で顔が光つてゐる。

「矢張りお客に連れられて行つてゐるんだらう。」

加茂は、晝前から今時分までゆつくり外で遊んでゐる客は、どんなお客だらうと、種々と想像して胸を焦してゐた。一人ぢやない、客と一緒に違ひない。とも思つた。そのお客と何様なにして遊んでゐるだらう。さう思つて自分と女との場合から今何處でどうしてゐるか明歴と幻



影かげに描えがいて、それを心の中で凝ぎ乎つと見詰めてゐた。有馬うまに來こられないと言いつた口の下で、さうして他の客きやくと出歩でいたりしてゐる。

「勝山かつやまはんが、よう行かれるお茶屋ちやうやに行つて見ましたけど、おやはりやしまへんのだす。向うでも餘り私わたしがきつう言ふもんやさかい、そんなら上つて見てくれ言ひますから、上つて一々座敷ざしきを見ましたけど、おやはりしまへんのだす。」

「さうやる。矢張りお客おきやくに連れられて行つたんやる。それで行く先さきは何處どこや。」主婦おかみは、問ひつめた。

「え、漸やっとお茶屋ちやうやだけ分りましてえ。さあ何處どこへそれから、行かはつたやら、分りまへんのだす。」

「ぢや他所よそゆきだらう。」加茂かきは、傍そばから口を出した。

「いえ、他所よそゆきなら、他所よそゆきと届けてゆきますから、他所よそゆきやおまへん。」

そんなことを言つて何時いつまで男衆おとこを責めてゐても際限さいげんがないので、兎うに角歸かくきつたら屹度いど貰もらつて來るやうに根押ねおししをして主婦おかみは虎とらどんを歸した。さうして

「どうも可笑おかしい。前まへと今いまと言ふことが違ふ。なあさうだつしやる、前まへ來た時には、晝前ひつり一人で店みせを出たいふかと思ふと、此度こゝろは、矢張りお客おきやくと一緒いっしょやいふし。」と言つて、不思議ふしぎがつかつた。

けれども他處よそ行きならば、掟おきてとして取締ととへ届けて行かねばならぬものが、肩かたを出してゐないから、他所よそ行きでないことだけが分つた。さうすれば幾許いくばく遅くなつても歸つて來るに違ひない。さう思ふと加茂かきはまた安心あんしんしたやうな心持こころもちになつた。さうして少し氣晴きせきしに外そとに出て見た。

夜よが更ふけるにつれて仲秋なつとの満月まんげつは大空おほぞら高く潤うるんだやうに澄すんでゐた。何處どこの屋根やねの上うへの涼すずみ臺たいにも夜露よるうが降りてゐるのがキラ／＼光あつてゐる。明るい藝者屋げしやの門先かどには長い床とこを出して、それに出的着物いでしものを着飾おどろつた藝者げしやが、赤あかいのや友禪ゆうぜん模様もやうのや長袴ながはかまの裾すそを高く捲まつて腰こしを掛けて、口の掛つて來るのを待つ間まを笑わらひさゝめいてゐた。涼すずしい夜風よるかぜが意氣いきな街筋まちすぢを流ながれて、櫛くしの跡あとの美しい鬢かみの毛けを吹ふいた。何時いつまでもぞろ／＼人足ひとあしが絶たえなかつた。

加茂かきはさういふ通とほりを歩あいたり、瀟洒せうさな露地つゆぢを抜ぬけたりして一ひとと廻まわりして戻かへつた。

その内段々うちだだだ晝間ひるまからの疲れつかれが出て、もう遊女あそびよめも何も入いらぬ、早く横よこになつて寝ねたくなつた。さうしてお芳よしに毎時まいじの三疊さんじやうに床とこをのべさした。

宵よから騒さわいでゐた客きやくも騒さわぎ疲つかれたと思はれて靜しずになつた。表おもも大分おほい寂さびしくなつた。

加茂かきは、着物きものを脱ぬいで蒲團ふとんの上に横よこはると、何時いつの間まにか微睡おぼろとしてゐた。すると、

「まあ、勝山かつやまはんどらして。待つてゐましたで。」

門口かどぐちにゐたお芳よしが大きな聲こゑで呼よぶのが二階にがいまで聞きえた。それと同時に



「どうも済みません。遅くなりまして。姐ちゃん。」

頭に膠着こびりいて忘れやうと忘れられない、少し暖ぬるれた勝山の聲がした。

あゝ来た。と思ふと加茂は急いで夜着を頭から、すつぽり被つた。畜生！ どうしてくれよう。心は嬉々いそしながら、何處どこまでも寝入つた風をして居らうと決心した。

「若旦那、勝山はん来やりましたで。」

お芳が聲を掛けながら入つて来た。

お芳が入つて来たので、寝た風を装うて居らうと思つたのが。さう出来なかつた。

何故、女は早く上つて来ないのだらう、もし一寸挨拶だけにでも来たのぢやないかと、またそれを氣遣ひながら、

「女はどうしたの？」もう女なんかどうでも可いといふやうに訊ねた。

「今、階下したで一寸話してゐやります。」

さういひながらお芳は、加茂の横になつてゐる枕許まくらもとに坐つて、

「勝山はん、到頭ま来やりましたさかい、どうぞもう何にも言はんと置いておくれやす。」

詫わびるやうに頭を下げて見せた。

「何も言やしない。どうでもいゝ。」

其處そこへ勝山が入つて来た。

「待つたでせう。」

と、言ひながら加茂の頭の處に来て蒲團の上にベタリと坐つた。

「随分ゆつ緩りお楽しみだつたな。お氣の毒さまだ。」加茂は、欠伸おびを噛み殺しつゝ言つた。

「そらまた出た。」

女は、冷かすやうに笑つた。

「どうぞ、もう何も言はんといておくれやす。」

「姐ちゃん、どうもお氣の毒さま、遅くなつて済みません。今日多勢ひふおほせでお客に連れられて神戸に行つてゐましたの。歸つて来て直ぐ来たわ。」

「あゝ、さよか、……若旦那が、急せきやはりますさかいな。よう歸つて来ておくれやす。どうぞ御緩り。」お芳は降りた。二人ばかりになると、

「うんどうして。待つたでせう。え。」

賺うすやうに言ひながら、女はびつたりと膝を男の體からだに押付けて、仰うげに寝てゐる顔の上に覗きかゝるやうにして、両手を静しずと男の胸の上に置いた。

多い鬢のほつれ毛が撫なでるやうに男の顔に軽く觸つてゐる。女の襟え頃や、きちんと搔かき合せた



小さい胸のあたりから鬱陶しいやうな化粧の薫りがする。男は両手を差伸ばして女の脊を大きくかゝへた。縮緬の單衣羽織を被つた女の體が撫ふやうに柔かい。誰れにも他の男には手を着けさせたくない。自分獨りで此の女を何時までも斯うして我が物にしたい。と思ふ情が、新しい勢で男の胸に湧き上つて來た。男は女の唇を軽く衝いた。それは幼兒が慈母の胸を披いて「乳」を探る時のやうな心持であつた。女の口の色は鮮かな淡紅色をしてゐた。小さくて柔かであつた。男は優しい涙が潤むのを覺えた。

「今晚これから夜中遊びませう。」

女は機むやうに言つた。

「神戸に行つてゐた。どうした客だい？ よく來る客かい？」

「うむ、臺灣の方に行つてた人間……」

女は事もなげに言つた。

「よく來る客かえ！」

「まあよく來る方だねえ。」

「神戸には多勢で、どんな連中と。料理屋へ行つて遊んでゐたの？」

「えゝさう。他は皆藝者。私には初めての人ばかり。」

「そのお客一人で？」

「えゝ一人。」

「ぢや金持の、遊び好きだな。」

「さうだねえ、金は持つてゐるらしいねえ。……あの奴。」

「何時頃から來てゐるの？」

「七月時分から。」

「月に何度くらゐ來る？」

「さうねえ、大抵五日めくらゐには來るわ。」

「その客好い男かい？」

「否！ 好かない。色の黒い奴。」

「酒でも好きな客かい？」

「大好き。幾許でも飲んで、腰が立ちやしないの。」

「でもこんな遅く神戸に泊らないで、よく戻つて來たねえ。」

「私一人で竊と脱けて戻つたのよ。」



「だって、お前は藝者と違つて、寝る時分になつて用があるんぢやないか。」

「そんなことが出来るもんですか、酔つて、身體が動けないのだから。」

「後になつてお前がゐないことが分つたら、怒るだらう。」

「さうかも知れない。ですから歸してくれと言つては歸してくれないでせう。それで竊と脱けて来てやつた。また丁度好い具合に私、虎どんに電話を掛けたの。虎どん私もう歸りたいわつて。さうすると、虎どんが、「勝山さんあなたは今何處にゐるんです。」と聞くから神戸から電話を掛けてゐるの、と言つたら、虎どん呆れて、「身體が悪いのにまあそんな遠方にどうして行つたんです。此方ぢや何處に行つたかと思つて斯々で大騒ぎです。直ぐ歸つて来て下さい、私が一人で困つてゐます。」と、いつたからそれで尙ほ急いで戻つたの。初め虎どんに迎へに来てくれと言つたけれど、忙しくつて、そんな遠方まで迎へに行けないからつて、梅田まで迎へに来てくれた。」

勝山はおぼこ娘のやうなあどけない聲で話した。昔も今も變りない、全盛の妓は抱主には大切にされ、男衆には下僕のやうに侍かれてゐた。

加茂は、勝山のいふことに辻褄の合はぬ處があるのに氣の附かぬこともなかつたが、強ひて疑はうともしなかつた。それよりも甘い歡みに耽るのに心が急げた。

「あゝ可愛い……」

女は緊めつけるやうに肉體から出る言葉を發して、痛くないほどギザ／＼と男の上唇を噛んだ。そして黒いよく動く瞳で男の顔を見詰めた。

男もさういつた女の顔を凝乎と見詰めた。不確なやうな甘い愛情の疑問が男の胸を通つて行つた。男は女からさういふ愛情の表はれた言葉を疾から求めてゐたのだ。

男の瞳に軽い疑問の表はれたのを、速に見て取つた女は、

「……顔をしてゐるわねえ、矢張り。怒つた時には恐い顔をするけれど。」

前の言葉を言ひ譯するやうに言ひ足して、男の頬を痛くないほど抓つた。

血の循環が止つたかと思はれるやうに發作的に疲れて蒼くなつた顔が、男の感能を一層刺戟した。

翌日は晝過ぎまでも寝てゐた。

八

臺灣まで一緒に行つた男は、その神戸に連れて行つた客であつた。

「今晚は斷る。……どうも可怪い。本人が言ふことぢやな。何かこれは勝山さんにわけがある



に違ひない。」

と、言つて、あの晩河半の主婦が不審の小首を傾けたのは流石にその道で食べてゐる主婦の推察の通りであつた。

加茂は「さうだらうか、まさか。」と思つて、幾度となく胸に忌な疑ひの雲を漲らして、女を飽くまでも不信な者にして見ようとしたけれど、自分と可愛い女との間に、どうしても興索る他の男の姿を認めることが出来なかつた。

「……今に素人になつたら、斯様なに何時まで寝てばかりゐられないわねえ。」

前夜から翌日までも寝通してゐる時など、女はそんなことを言つてゐた。

「私の古いのでお召の襦袢をこしらへてあげるわ。……不斷は木綿物でも好いわ。」

「それでも、さうばかりも行かない。お前に好い物を着せて見るのが、己の楽しみなのだから。」  
主婦は小猫をよく可愛がつてゐた。

「あなた猫嫌ひ？」

「嫌ぢやない。」

「階下に好い猫の兒がゐるのよ。連れて来よう。」

遊女はよく友禪縮緬の長襦袢の袖に小猫を包んで来て寝ながら戯れてゐた。

「お前も好きだなあ。飼ふと可愛くなるものだ。」

「東京に歸つて家を持つたら、猫を飼はうか。」

「え、飼ひませう。」

加茂はお召の半纏を被つて終日小猫を玩弄にしてゐる婀娜たる遊女を長火鉢の向に置いて描いてゐた。

「お前、眞個に俺の處に来る氣かい。」

「眞個ですとも、あんな約束までして。」

「でも千圓近い大金は、私にはとても出来ない。斯うしてゐる間に他の客で千圓出して身請けをしようといふ者があつたら、その時お前はどうする？ 俺の方は金は急には出来ない。一方は早く出来る。それでもお前は私の方に來られるまで待つてゐるか。」

「それは、いくら遅くなつてもあなたの處に行くまで待つてゐますさ。」

「いくら遅くなつても？」

「いくら遅くなつても、あなたの方で出してくれさへすれば待つてゐるわ。」

かういふ話がよく二人の間に言ひ交されたのは、まだその年の春の頃であつた。春雨の濕々降る時分加茂は毎日のやうにその土地に入り浸つてゐた。



その實、女は丁度その頃、長く通うて來てゐる客に身請けをされて自前で稼いでゐたのであつた。

九

加茂は、またしても女の寫眞を取出して見詰めながら、今言つたやうな事を現在のやうに楽しく思ひ耽つた。ハウプトマンの『僧房夢』の騎士は、最愛の妻に裏切られた胸の苦みに耐へかねて、わが此の苦みは、高い梯子に登つてゐる者のやうだ。一旦登つた者は必ず降りねばならぬ。降りねばならぬほどならば、寧ろ登らなかつた昔の方が安らかであつた。と言つてゐる。一旦執着した女は、深く心に絡み着いてなかくに忘られるものでない。

先達て、この地に來てから間もなく、女の姉は手紙を寄越して妹が近い内に内地に歸ると言つて來たから、歸つたならば早速お知らせすると言つて來た。加茂は、それから日々女の歸つて來たといふ音信のあるのを待つて日を消してゐた。

ある晩彼は毎時のやうに獨りボートに乗つて湖の沖に漕いで出た。夕暮れかゝつた男體山は湖水の岸を離れて、遠く水の上に出れば出るほど、その雄々しい姿が沈鬱な色を増して強く人間を威壓してゐるやうに見えた。幾日も雨が降らぬので、湖の水は、物凄くほど紺碧に澄んで

ゐた。それが夜の色の近づくとともに、倍々暗黒に變つて來た。黒く暮れた周囲の山の峽には白い雲が棚曳いてゐた。冷たい風が遠くの水の上に浮んでゐる彼の白衣の姿を吹いてゐた。鷺島のやうに湖水の上を幾つとなく彼方此方滑走してゐたセーリング・ボートの白い帆も、大分前に見えなくなつてしまつた。湖岸の大きな木立の間に立つてゐる外國の大使館の別荘に火影が見えて來た。其處から暗い水を渡つてピアノの響きが靜かな湖上に傳つて來た。

彼は一艘の舟も見えなくなつた廣い水の上に、暫くオールの手を止めて、靜かな波の揺するまゝに舟を流し放しにしながら、強か夜の風に吹かれてゐた。

さうしてゐると、暗い闇の中から、また遠くに行つてゐる女の姿が明歴と浮んで來た。白い顔、刮と見開いた時の派手な黒い瞳、毒々しいほど房々が多い頭髮、媚びるやうな襦袢の襟の色、さういふものが病的に明に彼の頭に蘇生つて來た。自制力の無くなつた頭には、さういふ妄念ばかりが安々と浮び上るのであつた。晝間さへ妄想に耽り勝ちの彼の頭は、さういふ眞暗い湖水の上に獨りて浮んでゐると、恰も夜の夢と同じやうな魔夢が現はれた。彼は段々遠くへ舟の流れて行くのも忘れて現の夢に見入つてゐた。女の姿がつい其處に立つてゐるやうにも見えて來た。彼は覺えず手を舉げ、女を打たうとして空を拂つた。

「畜生！ 彼女が戻つて來るといふ、戻つたら殺してやる。」



彼は、これまでも何度となく恨みのある女を殺すことを考へた。女を殺してゐる處を現の夢に描いて見て僅に積る胸の惱みを晴してゐた。殺すにしては、今の女くらゐ都合のいゝ女はない。常に親兄弟と遠く離れて殆ど行先不明になつてゐる女である。さうして美しい。十年苦海に身を沈めてゐるのを見殺しにしてゐるやうな親や姉が何時とは知れず此の世から姿を消したとて彼女の跡を探す氣遣ひはない。あの華奢な優しい身體をした女、今まで何千人と數知れぬ男の肌を觸れた女のあの肉體を、不意に絞殺して、あの肉を啖つてやらう。『雨月物語』の中に愛欲の迷ひから、無明の業火の爲に遂に鬼と化した僧が稚兒の死肉を啖うたことを書いてある。あれこそ愛欲の眞だ。自分はあの女の肉を啖はねば満足出來ぬほどの女を愛してゐるのだ。自分には最早普通的手段では女に對する情欲を満足せしめることは出來ない。

彼がそんな空想に耽つてゐる間に、ボートは自然に沖へ〜と流れて行つた。フト頭を上げて、星の明りを頼りに暗い水の上を見渡すと、舟は一里の水の上を流れて殆ど對岸の寺ヶ崎といふ處まで來てゐた。

中宮祠から湖水の岸に立つて、遠く對岸を見渡すと、鬱葱と樹木の茂つた島のやうな處が見える。それは島ではなくして寺ヶ崎と呼ぶ延長八丁餘の出島である。中宮祠の部落に近寄つた處から歌ヶ濱の觀音の邊までは湖畔の森林の間々に貸別荘などが建つてゐて、外國人が家族を連れ

て夏中を其處に過してゐるので、其等の洋館に食料品などを賣込む御用きゝの小僧どもが始終往來してゐるからそんなに寂しくはない。」

寺ヶ崎は、其處からは遠く離れてゐた。歌ヶ濱から先は、僅に湖水の岸に沿うて足尾峠にづく小徑が、白樺や山毛櫨などの高山植物の大本が繁茂した間に通じてゐるばかりであつた。そんな人足の稀れな處であるが、中禪寺の湖畔で其處ぐらゐ眺望の好い、地形の優れた處はない、半丁ばかりの廣さで細長く突出た半島の根は、丁度大きな鎖のやうに奇怪な形をした岩が亂雑に續いてゐて、濃い紺碧の水がヒタ〜と、樹木の掩ひ被つた其等の岩を蘸してゐる。榊や黒檜や落葉松の間には躑躅や八汐の老木が繁茂してゐた。その寺ヶ崎の突鼻に一字の薬師堂が立つてゐた。

加茂は、夜目にその薬師堂を見ると、思ひ附いたやうに、「あゝ、此處に連れて來て女を殺してやらう。さうぢや〜。」と獨りうなづいた。

すると、何時の間にか、湖水の上が、明るかつたのに氣が附いて東の方を見上げると、十七日ばかりの月が赤く彼方の峯の上に覗いてゐた。月光の爲に近くの水の上に却つて凄いばかりの隈が出來て來た。彼は覺えず四邊に一人であるのが恐しくなつた。さうして自分の考へてゐることも恐しくなつた。自分の心が鬼に化けて居るやうに思はれた。



18919

姬 清 男

印 刷 所	代表名作集第六十編			大正六年十一月十四日印刷 大正六年十一月十八日發行 大正八年十一月三十日廿四版
	發行所	發行者	著作者	
東京市神田區宮本町五番地 電話下谷四〇六七番	新 潮 社	東京市牛込區矢來町三番地 佐藤義亮	近 松 秋 江	
印刷者 新潮社印刷部 高橋治一	電話番町(八八九〇九番)	東京市牛込區矢來町三番地		
		番二四七一(京東替混)		

—了—



日本の文壇が生める唯美派藝術として  
世界に誇るべきものを此の一卷に求めよ

永井荷風氏序  
谷崎潤一郎氏著

装幀は、小村畫伯の苦心に成り、明治初年の  
出版物に擬して、特異の美觀をなせるの點、  
亦近時出版界の一驚異ならむ。

# 近代情痴集

忽ち  
五版  
▼大阪特製挿畫十五頁  
▼定價 金壹圓六拾錢  
▼郵送料 拾錢

## □天下の奇書□

現文壇を二分してその浪漫派の領域に君臨する者は、我が谷崎潤一郎氏也。本書「近代情痴集」と云ふ、題目既に尋常にあらず、内容の常套を絶せるものたるは、何人も推想し得ん。肉に眼覺めたる少年が、一妖婦の美の魅惑に逢うて、たとへば牡丹の蕊に溺るゝ蜂の如く、喜んでその毒手に、陶酔の死を死ぬる「戀を知る頃」、豊麗の美女に好色の老爺を配して「ソヒズムの極致を表はせる「富美子の足」を始めとして世の常ならぬ戀と罪とを描ける諸名篇を收め、更に附するに「異國綺談」を以てし、怪奇なる幻想を清新なる異國情調に糾へる「西湖の月」以下三傑作を蒐めたり。谷崎氏の作風は瑰麗にして芳醇、しかも亦深刻にして凄愴、たとへば毒草の花の、毒愈々深くして色益々濃かなるに似たり。日本の文壇が生める唯美派藝術として正に世界に誇るに足るべきもの、此の一卷に於て盡くせる也。

佐藤春夫氏著

—— 著者装幀極美本 ——

## ■ 改作 田園の憂鬱

三版  
背皮總洋裝  
定價壹圓貳拾錢  
郵送料八錢

「田園の憂鬱」或は「病める薔薇」は、佐藤春夫氏の出世作にして亦その代表作と目す可きもの也。村居一年、靜かに田園の自然に親みて、鋭敏なる近代人的神經、豐富なる天才的情感、而して繊細巧緻を極めたる文章、具さに其の觀察し、冥想し、感得せる所を描けるものにして、通篇珠玉の如き文字を以て成れる長篇散文詩。田山花袋氏が、初めて見たる新人の筆と激賞し、文壇舉つて眼を睜れる驚異的作品也。昨夏一たび書冊となりて世に出でしが、作者はその謙らざる點あまりに多しとなし、今回大訂正大増補を加へ、全然面目を一變して公にせられたり。

須藤藤鐘一著

## 傷める 花片

第二版  
壹圓拾錢送料八錢

新進中の新進須藤氏の創作集にして、何れも傷める花片を以て象徴せらるゝ惱み多く悲み滋き生活に材をとれるもの。或は、美貌の一少婦が病の爲に容色を失ひ、愛人の愛を失はん事を恐るゝあまり、殺人の大罪を犯すに至るの徑路を描き、或は、友の美しき未亡人と俊爽多根の一青年との情事を描く等その内容極めて多趣、描寫亦細緻を極む。



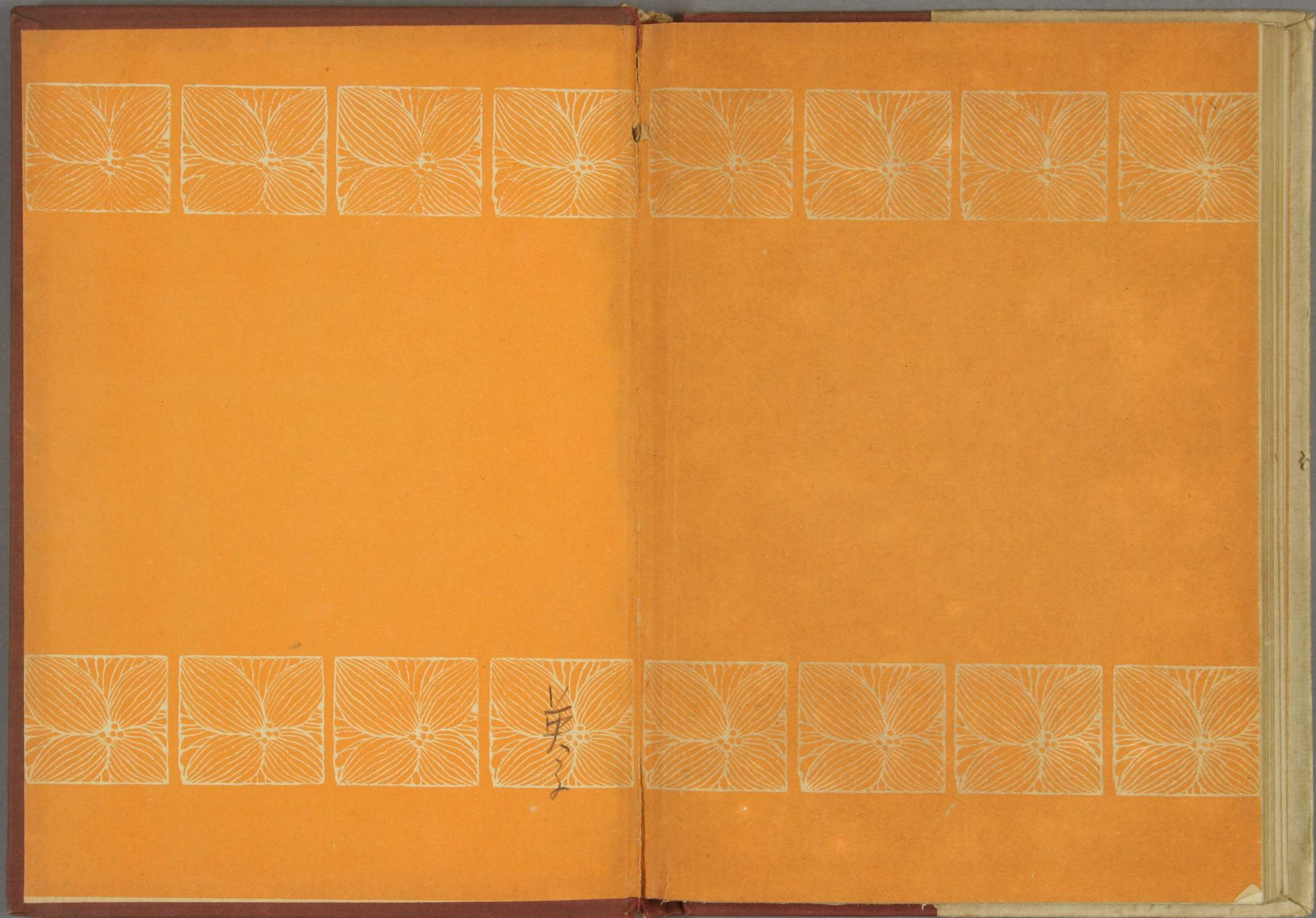


美しくしき悲しき戀物語の集  
**情話新集**

各編増版 竹久夢二装  
 取揃あり 特製極美本  
 一册四十五頁  
 送料六圓

- |                  |                |
|------------------|----------------|
| (一) 舞鶴心中 近松秋江    | (七) 箕輪心中 岡本綺堂  |
| (二) 舞妓姿 長田幹彦     | (八) みだれ髪 小栗風葉  |
| (三) 小さん金五郎 田村俊子  | (九) お七言三 田村俊子  |
| (四) 小夜ちどり 長田幹彦   | (十) 葛城太夫 近松秋江  |
| (五) 戀ごゝろ 田山花袋    | (十一) 江島生馬 小山内薫 |
| (六) お才と巳之介 谷崎潤一郎 | (十二) 桑名心中 長田幹彦 |





173